

茨木市

# 千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

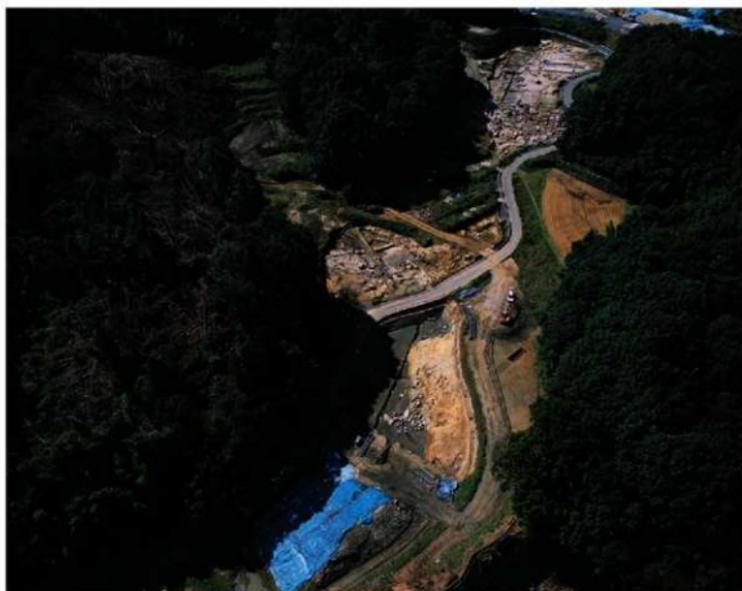
2014年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

茨木市

# 千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1. 調査地全景（東から）

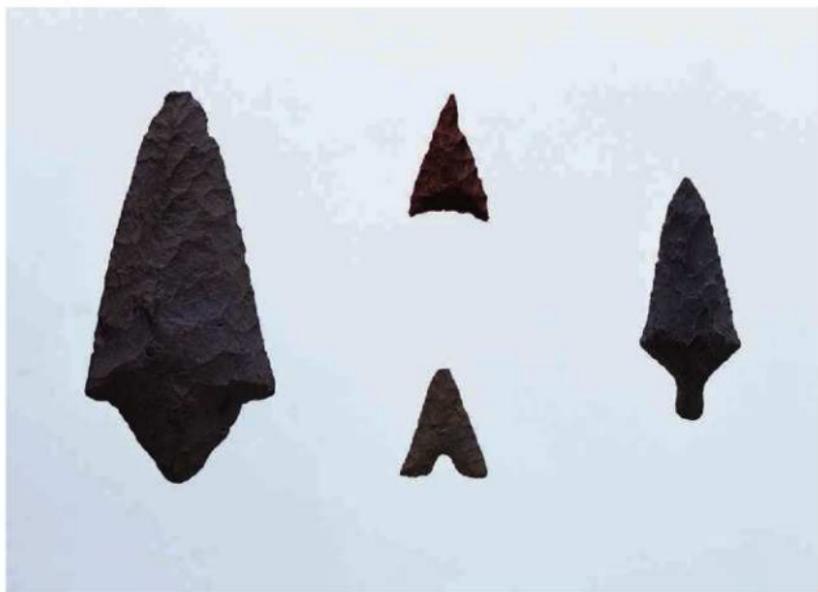


2. 調査地全景（西から）





1. 2区 215区土坑出土縄文土器



2. 出土石器

# 序 文

千提寺南遺跡は大阪府の北東部、茨木市の最も北端、山深いところに所在する遺跡であります。大阪市内からは1時間以上を要し、地理的には京都府亀岡市や大阪府豊能町に接しており、今も緑豊かな山々にかこまれて棚田が続く秘境の趣をなし、桃源郷のような風景の広がる地域として知られています。

この周辺は戦国時代の著名なキリシタン大名高山右近の所領地として栄え、地理的な要因も相まって戦国の禁制の時代から近代に至るまで、隠れキリシタンの里として知られていました。大正時代に藤波大超氏によってキリシタン墓碑が発見されたのを契機に、様々なキリシタン遺物が周知されることになり、一躍脚光を浴びることとなりました。

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（別称として新名神高速道路）の建設に伴うもので、兵庫県の神戸市から大阪府高槻市までを結ぶ道路のうち、茨木北インターチェンジ、茨木北パーキングエリア建設予定地にあたります。今まで埋蔵文化財調査の手が入っていなかった地域に大規模な調査が行われたことによって、この地域の歴史の内容や時代を追っての変遷解明に大きな足跡を残すこととなりました。

千提寺市販遺跡、千提寺クルス山遺跡、千提寺西遺跡、日奈戸遺跡といった千提寺周辺の他の遺跡が丘陵地に立地するのに対し、千提寺南遺跡は丘陵地の山裾にあたる谷部分の遺跡となります。そのため、他の遺跡にある中世から近世の墓地群は発見されませんでした。

中世から埋積谷の傾斜地形を利用して棚田や耕作に関する施設が広く作られており、現代に至るまで連続と土地利用されていた事が判明したのは大きな成果です。また、遺跡の東部でみつかった縄文時代中期末の土器群は良好な一括資料であり、全域でみつかった縄文時代早期以降の土器などもあわせて、この地域は縄文時代から活発に人間の営みがあったことを明らかにしました。

最後になりましたが、今回の調査にあたって地元関係各位をはじめ、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、茨木市立キリシタン遺物資料館、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所から多大な御協力や御尽力を賜りました。記してここに感謝いたします。

平成26年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 田邊 征夫



# 例 言

1. 本書は茨木市千提寺地内に所在する千提寺南遺跡（調査名：千提寺南遺跡11-1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、西日本高速道路株式会社関西支社（遺物整理は、同支社新名神大阪西事務所）の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 受託契約名、受託期間、調査および整理体制は以下の通りである。

受託契約名：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（茨木市域）その3

受託期間：平成23年11月1日～平成24年5月31日

調査体制：（平成23年度）	調査課長	江浦 洋	調整グループ長	岡本 茂史
	調査グループ長	岡戸 哲紀	調査グループ主幹	金光 正裕
	主査	合田 幸美	技師	河本 純一
	専門調査員	入江 正則		

受託契約名：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（茨木市域）その4

受託期間：平成24年2月1日～平成25年3月19日

調査体制：（平成23年度）	調査課長	江浦 洋	調整グループ長	岡本 茂史
	調査グループ長	岡戸 哲紀	調査グループ主幹	金光 正裕
	主査	小野 久隆	主査	合田 幸美
	専門調査員	入江 正則		
（平成24年度）	調査部長	江浦 洋	調整課長	岡本 茂史
	調査課長	岡戸 哲紀	調査課主幹	金光 正裕
	主査（新名神第二総括）	亀井 聡	副主査	本間 元樹
	副主査	川瀬 貴子		

受託契約名：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（千提寺南）

受託期間：平成25年3月1日～平成26年3月31日

調査・整理体制：（平成24年度）	調査部長	江浦 洋	調整課長	岡本 茂史
	調査課長	岡戸 哲紀	調査課主幹	金光 正裕
	主査（新名神第二総括）	亀井 聡	副主査	川瀬 貴子
（平成25年度）	事務局次長兼総務企画課長	江浦 洋		
	調整課長	岡本 茂史	調査課長	岡戸 哲紀
	調査第一課長補佐	金光 正裕	副主査	川瀬 貴子

発掘調査は平成24年1月16日～平成25年3月8日及び平成25年5月20日～平成25年6月6日まで行った。それ以外の期間は整理作業を行い、平成26年3月20日に本書を刊行して全ての業務を完了した。

4. 調査にあたっては、下記の方々のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表する。(五十音順、敬称略)  
大野薫 (大阪府教育委員会)
5. 本書の執筆、編集は川瀬が行った。
6. 本調査に関わる写真、実測図、出土遺物等は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 基準高は東京湾平均海水位 (T.P.) + を使用している。使用単位はmを基準とする。
2. 遺構平面図の使用測地系は、平面直角座標系「世界測地系 (測地成果 2000)」第VI座標系を基準とする。単位はすべてmで表記した。
3. 本書の遺構図に付与された方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北を標準とする。磁北は西に  $6^{\circ} 18'$ 、真北は東に  $0^{\circ} 12'$  振っている。
4. 発掘調査および遺物整理は『財団法人大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』2010の内容に準拠して行った。
5. 本書の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修に基づいて行った。記述は記号、土色名、土質名の順である。
6. 遺構番号は遺構種類にかかわらず1からの連番を付しており、遺構名は番号-遺構種類となる。(例: 1 土坑)。ただし、複数の調査区を同時に調査していたため、調査区ごとに1からの遺構番号が存在することとなっているので、整理作業の際に新たな遺構番号を付与した。
7. 遺構平面図の縮尺は、多種存在するため各挿図に縮尺を示してある。  
遺物実測図の縮尺は土器が4分の1と3分の1、石器が3分の2、銭貨・金属製品・石製品・木製品が2分の1としている。土器断面と拓本はそれぞれ残りがよいところとった。そのため実測図上、必ずしも一致していない。遺物写真の縮尺は任意である。
8. 遺物番号は通し番号であり、写真図版に関しては挿図と同一の番号を付与している。

# 目 次

巻頭図版	
序文	
例言	
凡例	
目次	
本文	
第1章 調査にあたって	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 地理的・歴史的環境	4
第3節 調査の方法	9
第2章 基本層序	13
第1節 基本層序	13
第3章 調査成果（遺構）	24
第1節 東部（1・2区）の遺構	24
第2節 中央部（3～8区、13区）の遺構	44
第3節 西部（9～12区）の遺構	71
第4章 調査成果（遺物）	81
第1節 1・2区の遺物	81
第2節 3～8・13区の遺物	91
第3節 9～12区の遺物	97
第5章 総括	103
第1節 千提寺南遺跡における土地利用	103
第2節 千提寺南遺跡出土縄文土器の評価	108
遺物観察表	112
写真図版	
遺構	
遺物	
報告書抄録	
奥付	

# 挿 図 目 次

第1図	千提寺南遺跡の位置と千提寺遺跡群	1
第2図	新名神高速道路建設計画図	2
第3図	周辺遺跡図	6
第4図	茨木市千提寺民俗地図	8
第5図	地区割図	11
第6図	調査区名図	11
第7図	基本層序模式図(1)	14
第8図	基本層序模式図(2)	15
第9図	1・2区東西アゼ断面図、アゼ位置図	17・18
第10図	4・6・7区南北アゼ断面図、アゼ位置図	19・20
第11図	9区南北アゼ、10・11区東西アゼ断面図	21・22
第12図	1区第2面・2区第3面平面図	25
第13図	1区第2面平面図	26
第14図	1区第2面遺構平・断面図(1)	28
第15図	1区第2面遺構平・断面図(2)	29
第16図	2区第3面平面図	30
第17図	2区第3面229石列平・立面図	31
第18図	2区215土坑土器出土状況図	32
第19図	2区第3面遺構平・断面図	34
第20図	1区第3面・2区第5面平面図	35
第21図	1区第3面平面図	36
第22図	1区第3面遺構断面図(1)	38
第23図	1区第3面遺構断面図(2)	39
第24図	1区第3面遺構断面図(3)	40
第25図	1区第3面遺構平・断面図	42
第26図	2区第5面平面図	43
第27図	2区第5面遺構断面図	44
第28図	3区第1面・4区第1面・8区第1面平面図	45
第29図	3区第1面上段平面図・アゼ断面図	46
第30図	4区第1面中央東部平面図	48
第31図	4区第1面中央東部遺構断面図(1)	49
第32図	4区第1面中央東部遺構断面図(2)	50
第33図	4区第1面中央西部平面図	52
第34図	4区第1面中央西部遺構断面図	54
第35図	4区第1面西部・8区第1面平面図	55

第36図	4区第1面西部遺構断面図	56
第37図	4区第2面・8区第4面平面図	57
第38図	4区第2面中央東部平面図	58
第39図	4区第2面中央東部遺構断面図	59
第40図	5区第1面・6区第1面・13区第2面平面図	60
第41図	6区第1面平面図・601溝断面図・13区第2面平面図	61
第42図	6区第1面601溝・杭検出状況図	62
第43図	5区第3面・6区第3面平面図	64
第44図	6区第3面602杭列検出状況図	65
第45図	6区第3面603杭列検出状況図	65
第46図	13区東トレンチ位置図・5・13区断面図	66
第47図	7区第3面・8区第4面・13区第4面平面図	68
第48図	7区第3面707杭列検出状況図	69
第49図	9区第1面・10区第2面・11区第2面・12区第2面平面図	70
第50図	9区第1面平面図	72
第51図	10区第2面・11区第2面平面図	73
第52図	10区第2面1001溝・石列平・断面図	74
第53図	10区第3面平面図・1003暗渠断面図	75
第54図	9区第2面・10区第4面・12区第3面平面図	77
第55図	9区第2面平面図	78
第56図	10区第4面平面図	79
第57図	1・2区出土遺物実測図	82
第58図	1・2区出土石器実測図	83
第59図	1区遺構出土縄文土器実測図	84
第60図	1区包含層出土縄文土器実測図	85
第61図	2区215土坑出土縄文土器実測図(1)	88
第62図	2区215土坑出土縄文土器実測図(2)	89
第63図	2・4区包含層出土縄文土器実測図	90
第64図	3～6区出土土器実測図	92
第65図	7・8・13区出土土器実測図	93
第66図	4～8・13区出土遺物実測図	95
第67図	4・13区出土石器実測図	96
第68図	4区出土石器実測図	97
第69図	9～12区出土土器実測図	98
第70図	9～12区出土銭貨・木製品実測図	100
第71図	9区出土石器・石製品実測図	101
第72図	全体平面図	105・106
第73図	千提寺南遺跡出土遺構と水利	107

第74図	215 土坑出土縄文土器と出土位置図	108
第75図	国際文化公園都市試掘地点及び免山氏遺物採集地点	110
第76図	千提寺南遺跡出土縄文土器時期区分	111

## 表 目 次

表 1	縄文土器観察表	112～114
表 2	土器観察表	114～117
表 3	石器観察表	117～118
表 4	石製品観察表	118
表 5	木製品観察表	118
表 6	銭貨観察表	118
表 7	金属製品観察表	118
表 8	土製品観察表	118
表 9	調査区遺構面対応表	103

## 写 真 目 次

写真 1	調査区風景	3
写真 2	調査区風景	3
写真 3	現場作業風景	12
写真 4	ヘリコプターを用いた航空測量	12
写真 5	高所作業車からの撮影	12
写真 6	平板測量	12
写真 7	断面実測	12
写真 8	遺物実測	12
写真 9	大阪府教育委員会による立会	12
写真 10	現地説明会風景	12

## 写真図版目次

写真図版 1	1 区	4. 4 土坑・5 土坑（北から）
	1. 1 区第 3 面全景（西から）	5. 第 2 面下段近景（北から）
	2. 1 区第 3 面全景（南西から）	6. 第 2 面上段近景（北から）
写真図版 2	1 区	7. 53 土坑断面（西から）
	1. 1 区第 3 面近景（北東から）	8. 71 ビット完掘状況（北から）
	2. 1 区第 3 面近景（西から）	写真図版 3
	3. 1 区第 3 面近景（東から）	2 区
		1. 2 区第 2 面全景（南西から）

- 2. 2区第2面全景 (南から)
- 写真図版 4 2区
  - 1. 2区第3面全景 (南西から)
  - 2. 2区第3面全景 (南から)
- 写真図版 5 2区
  - 1. 2区第4面全景 (南西から)
  - 2. 2区第4面全景 (北東から)
- 写真図版 6 2区
  - 1. 2区第5面全景 (南西から)
  - 2. 2区第5面全景 (北東から)
- 写真図版 7 2区
  - 1. 2区第3面 215 土坑検出状況 (西から)
  - 2. 2区第3面 229 石列検出状況 (南西から)
- 写真図版 8 3区
  - 1. 3区第1面全景 (東から)
  - 2. 3区第1面全景 (南東から)
- 写真図版 9 4区
  - 1. 4区第1面全景 (西から)
  - 2. 4区西部近景 (西から)
- 写真図版 10 4区
  - 1. 4区中央部近景 (南西から)
  - 2. 4区東部全景 (東から)
- 写真図版 11 4区
  - 1. 4区 409 溝断面 (南東から)
  - 2. 4区 410 溝断面 (北から)
  - 3. 4区 411 土坑断面 (南西から)
  - 4. 4区 413 土坑断面 (南から)
  - 5. 4区 416 土坑断面 (北東から)
  - 6. 4区 417 土坑断面 (西から)
  - 7. 4区 450 ビット断面 (東から)
  - 8. 4区 440 土坑・441 土坑断面 (南から)
- 写真図版 12 5区
  - 1. 5区第2面全景 (西から)
  - 2. 5区西半足跡検出状況 (南から)
- 写真図版 13 5区
  - 1. 5区第3面全景 (西から)
  - 2. 5区第3面全景 (東から)
- 写真図版 14 6区
  - 1. 6区第1面全景 (南西から)
  - 2. 6区第1面全景 (北東から)
- 写真図版 15 6区
  - 1. 6区第1面 601 溝 (東から)
  - 2. 6区第1面 601 溝断面 (南西から)
- 写真図版 16 6区
  - 1. 6区第3面全景 (南西から)
  - 2. 6区第3面全景 (北東から)
- 写真図版 17 6区
  - 1. 6区第3面 603 杭列検出状況 (南東から)
  - 2. 6区第3面 602 杭列検出状況 (南東から)
- 写真図版 18 7区
  - 1. 7区第1面全景 (南西から)
  - 2. 7区第1面全景 (南から)
- 写真図版 19 7区
  - 1. 7区第3面全景 (北西から)
  - 2. 7区第3面全景 (北から)
- 写真図版 20 8区
  - 1. 8区第4面全景 (北から)
  - 2. 8区第4面全景 (北西から)
- 写真図版 21 9区
  - 1. 9区第1面全景 (西から)
  - 2. 9区第1面全景 (北から)
- 写真図版 22 9区
  - 1. 9区第2面全景 (西から)
  - 2. 9区第2面全景 (北東から)
- 写真図版 23 10区
  - 1. 10区第2面近景 (南西から)
  - 2. 10区第2面 1001 溝・石列検出状況 (北東から)
- 写真図版 24 10区
  - 1. 10区第3面近景 (北東から)
  - 2. 10区第3面 1002 石列検出状況 (北から)
- 写真図版 25 10区
  - 1. 10区第4面全景 (北西から)
  - 2. 10区第4面近景 (南西から)
- 写真図版 26 11区
  - 1. 11区第2面全景 (西から)
  - 2. 11区第2面全景 (北西から)
- 写真図版 27 11区
  - 1. 11区第2面全景 (北東から)
  - 2. 11区第2面 欄田検出状況 (南東から)
- 写真図版 28 12区
  - 1. 12区第3面全景 (北西から)

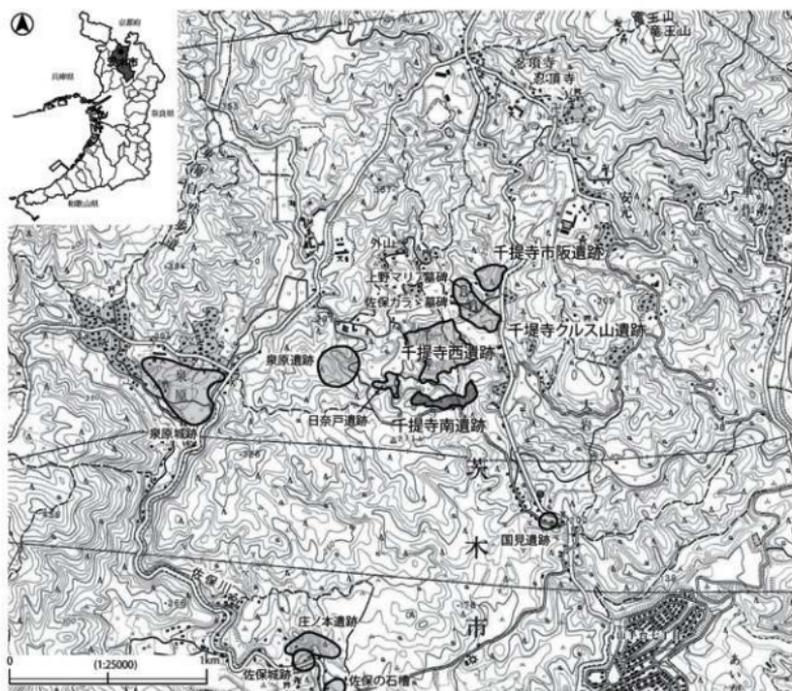
2. 12区第3面全景(南東から)
- 写真図版 29 13区
1. 13区第2面全景(北西から)
2. 13区第3面全景(南東から)
- 写真図版 30 2区遺構出土縄文土器(1)
- 1~3. 2区215土坑出土深鉢
- 写真図版 31 2区遺構出土縄文土器(2)
- 1・2. 2区215土坑出土深鉢
- 写真図版 32 2区遺構出土縄文土器(3)
- 1~3. 2区215土坑出土深鉢
- 写真図版 33 1・2区遺構・包含層出土縄文土器
1. 2区215土坑出土縄文土器、1区71ピット出土縄文土器、53土坑出土縄文土器
2. 1区包含層出土縄文土器
3. 2区包含層出土縄文土器
- 4・5. 4区包含層出土縄文土器
- 写真図版 34 1区包含層出土縄文土器
1. 1区包含層出土縄文土器
- 写真図版 35 2・4区包含層出土縄文土器
1. 2区包含層出土縄文土器、4区包含層出土縄文土器
- 写真図版 36 1~3区出土土器
1. 3区出土土器
2. 2区出土土器
3. 1区出土土器
4. 2区出土土器
5. 2区出土土器
- 写真図版 37 1・2・4区出土土器
1. 2区出土土器
2. 4区出土土器
3. 2区出土土器、4区出土土器
4. 2区出土土器
5. 1区出土土器
- 写真図版 38 5~7・13区出土土器
1. 5区出土土器
2. 7区出土土器、13区出土土器
3. 6区出土土器
- 写真図版 39 5~8・13区出土土器
1. 5区出土土器
- 2・3. 7区出土土器
4. 6区出土土器
5. 13区出土土器
6. 7区出土土器、8区出土土器
- 写真 40 9~12区出土土器(1)
1. 9区出土土器
2. 11区出土土器
3. 11区出土土器
4. 9区出土土器
5. 9区出土土器
6. 11区出土土器
7. 9~11区出土土器
- 写真図版 41 9~12区出土土器(2)
- 1・2. 9~12区出土白磁・青磁、10区出土緑釉陶器
- 写真図版 42 9・10区出土土器(3)・木製品
1. 9・10区出土土器
2. 6区出土曲物底板
3. 11区出土曲物底板
- 写真図版 43 打製石器(1)
1. 9区出土有舌尖頭器
2. 4区出土石鏃、1区出土石鏃
- 写真図版 44 打製石器(2)
1. 2区出土未成品、13区出土剥片、4区出土剥片
2. 4区出土石核
- 写真図版 45 磨製石器・石製品
1. 4区出土磨石、9区出土卵石
2. 1区出土砥石、9区出土砥石
- 写真図版 46 銭貨
1. 唐銭・開元通寶、宋銭・太平通寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元符通寶、紹聖元寶
2. 明銭・洪武通寶、永樂通寶、寛永通寶
3. 宋銭・紹定通寶
4. 一銭青銅貨、一銭銅貨

# 第1章 調査にあたって

## 第1節 調査の経緯

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴うものである。この建設工事は昭和62年（1987）の第四次全国総合開発計画において閣議決定され、平成元年（1989）には基本計画が公示された。平成19年（2007）には、第二名神自動車道から新名神自動車道へと変更した名称が公表されている。道路建設に先立って、平成5年度（1993）に財団法人大阪府文化財センター（現、公益財団法人大阪府文化財センター、以下センターと略）によって高槻から箕面までの大阪工区内の計画路線内の分布調査が実施された。

実際に工事が着手されるようになったのは近年のことで、まず神戸ジャンクションから高槻ジャンクションまでの全長40.5kmの区間が、平成30年の開通を目指して事業が進められることとなった。工事は兵庫工事区域と大阪工事区域とに分けられる。そのうち、大阪府内の工事区域は、北摂地域と呼ばれる大阪の最北部、山間地域を東西に横断することとなる。距離にして、西は箕面市から東は高槻市までの全長19.5kmにおよぶ（第2図）。それに伴い、平成23年度（2011）には当センターによって、箕面市、茨木市、高槻市にわたって埋蔵文化財の有無を調査する広範囲な試掘調査が実施された。

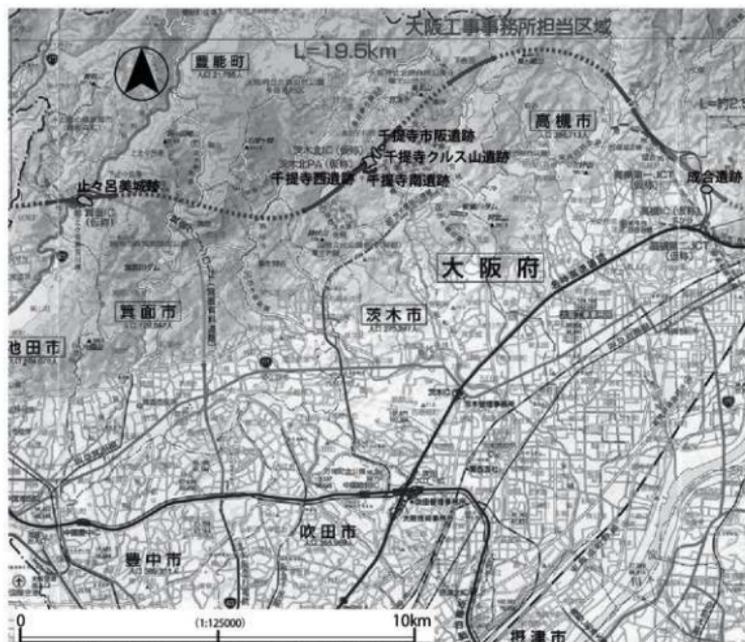


第1図 千提寺南遺跡の位置と千提寺遺跡群(国土地理院25,000分の1地形図「高槻」に加筆)

茨木市域の該当範囲は茨木市で最も北部にあたり、北は大阪府豊能町や京都府亀岡市に接し、国際文化公園都市（彩都）と名付けられたエリアに位置する。東に安威川と府道茨木摂津線、西に佐保川と豊中亀岡線が位置し、北には竜王山がそびえる（第1図）。北摂山地の山がそびえたち、その山間地に集落や棚田が散在する地域である。中世荘園支配の象徴であった忍頂寺などの寺社や、高山右近の旧領地だったことからキリシタン関係の資料などが知られるが、考古学的調査はほとんど行われておらず、資料報告も断片的だった。試掘調査の結果、今まで遺跡として認定されていなかった千提寺地区で、広範囲にわたって遺構や遺物の包含が確認され、千提寺南遺跡は新規発見の遺跡として認定された。

試掘調査をふまえ、西日本高速道路株式会社と大阪府教育委員会によって遺跡の取り扱いについて協議が行われた結果、大阪府教育委員会は西日本高速道路株式会社関西支社に対して、調査を実施するよう指示した。これを受け、当センターと西日本高速道路株式会社関西支社は平成24年1月30日付で契約を締結し、上記建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の茨木市域その4として千提寺南遺跡の調査が行われることとなった。（それ以前に、埋蔵文化財発掘調査茨木市域その3という契約の中で、千提寺西遺跡の調査とあわせて千提寺南遺跡の機械掘削を行った。）

千提寺南遺跡は丘陵の南側谷部分が調査対象区である。隣接する山側の丘陵部分が千提寺西遺跡、日奈戸遺跡である（第2図）。千提寺西遺跡（日奈戸遺跡を含む）は調査総面積が25,000㎡以上であり、千提寺南遺跡や他の遺跡（千提寺クルス山遺跡、千提寺市阪遺跡等）もあわせて、茨木北インターチェンジ、茨木北パー



第2図 新名神高速道路建設計画図

(西日本高速道路(株)作成の『新名神高速道路神戸JCT～高槻JCT(仮称)』より抜粋、改変)



写真1 調査区風景（西から）（平成24年7月19日撮影）



写真2 調査区風景（西から）（平成25年2月22日撮影）

キングエリア建設予定地に相当する。

千提寺南遺跡の現地調査は、調査区を13に分けた(第6図)。調査は本体工事の撤去工などが済み、準備が整った調査区から順次行った。ただし、工程上、道路の付け替えを最後にせざるを得ず、9区や10区に隣接する道路付け替え部(12区)と、6区南側に隣接する道路付け替え部(13区)は、平成24年度から平成25年度を契約期間とする遺物整理事業の中で発掘調査を行うこととなった。

平成23年度から平成24年度に12・13区を除いた11の調査区、南北約80m、東西約200mを調査した(受託契約名:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(茨木市域)その4)。平成24年1月に1区の機械掘削を行って調査を開始し、平成25年2月に調査を終了した。その後、平成25年3月から遺物整理事業契約の中で12区の発掘調査を行った(受託契約名:高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理(千提寺南))。この2年度の調査総面積は13,400㎡におよぶ。遺物整理作業を挟んで、平成25年5月から6月に最後に残った13区の調査を行い(12区と13区の調査面積1,066㎡)、全ての調査を終了した。調査総面積は14,466㎡である。

発掘調査の間には、現地にて遺構実測図面や写真の整理、遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業を行い、記録の保存に努めた。全調査の終了後(平成25年4月から5月、平成25年6月から12月)、中部調査事務所にて報告書作成のための整理作業を行った。整理作業の詳細は第3節に述べるが、基礎整理を行った遺構実測図や出土遺物をもとに挿図を作成、また、写真や文章もあわせて遺跡の説明を行った。出土遺物や図面、写真についても整理して収納、保管し照会に答えられるようにした。平成26年3月、本書を刊行して完了した。

## 第2節 地理的・歴史的環境

### 第1項 地理的環境

千提寺南遺跡は、茨木市の北部、千提寺地区に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。当遺跡は、北摂山地の山間部を流れる安威川上流、大岩川西側に開かれた谷底平野に立地しており、調査地周辺の現標高はT.P.+約220.0～240.0mをはかる。北には竜王山が位置する。

北摂山地は地層学的には丹波層群の南端にあたる。丹波層群は三疊紀後半(約2億年前)から堆積した地層であり、ほとんどが硬砂岩である。その後約1億年前には、地下の花崗岩マグマ(石英閃緑岩)が貫入してきたことによって周りの岩石が変質を受け、硬いホルンfelsへと変化した。竜王山(標高510m)などがそれによってできた(加藤三一「IV地質古水流 1 茨木の地形と地質」茨木市教育委員会1991)。

安威川の源流は亀岡盆地の南側にある。亀岡盆地は丹波帯形成後の洪積世の頃に形成された亀岡湖の浅くなったものである。亀岡の谷から北から南に安威川に水流が流れ込む。一方の佐保川は泉原<sup>いづみのはら</sup>周辺を支流とする川で、下流になると茨木川となる。

安威川上流から中流、京都府亀岡市までは古・中生界の丹波層群から構成される。そのため、深い河谷が形成される。ところが、竜王山より南になると、中生代白亜紀の花崗岩類で構成されるという。

東岸では同じく深い河谷が形成されるが、西岸では山地は標高200～250mと急激に低くなり、尾瀬と谷が複雑に入り乱れる。近畿トライアングルの花崗岩類から構成される山地は、花崗岩が風化してマサとなっているために、侵食に弱く低平化しやすい特徴をもつ。マサ化した岩盤は容易に掘削できるため、水田化が可能である。花崗岩類の地域には複雑な小谷が刻まれ、水田が開かれる。集落や水田は扇状地帯や山腹傾斜面に築かれる(高橋学「第4章安威川流域の地形環境と土地利用」大阪府文化財センター1997)。

狭い平地地を利用するためや乏しい水を有効に使うために、地形にあわせて狭く区画した圃田が多くみられる。水田には天水と湧水を利用した灌漑が不可欠だが、河川灌漑は不可能で、溜地の利用によっている。

## 第2項 歴史的環境

千提寺南遺跡の周囲には、千提寺地区に位置する遺跡群として、当遺跡の北には千提寺市飯遺跡、千提寺クルス山遺跡、日奈戸遺跡、千提寺西遺跡が所在する（第1図）。

千提寺という地名は、忍頂寺の塔頭千提寺があったことに由来すると言われていいる。千提寺はその浄土真宗の寺院となり、明治時代頃廃寺となった（『わがまち茨木 地名編』茨木市教育委員会 1988より）。

千提寺地区は戦国時代から江戸時代初めの大名、高山右近の旧領地で、キリシタン墓碑やザビエル聖人画像などのキリシタン資料が数多く発見されていることから、隠れキリシタンの里としても有名である。平成11年に分布調査や民俗調査を含めた総合調査が実施され、千提寺地区についても字名などの調査が行われている（第4図）。これと対照すると、千提寺南遺跡は白井が谷の南、字名下日名戸の辺りに相当する。調査地の西側、佐保川左岸では弥生時代の石器が出土した泉原遺跡が知られていたが、千提寺地区では遺跡の存在が明らかでなかった。

今回の高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設に伴って、平成23年度に当センターによって広範囲な試掘調査が実施され、当遺跡は新規に発見された。その後、平成23年度から平成24年度に本格的な調査が行われた。以下では、茨木市内および周辺のその他の遺跡を概観する（第3図）。

〔旧石器時代〕安威川流域で遺跡の発見はない。しかし、安威川の東、三島段丘や低位段丘には良好な遺跡が発見される。箕面市粟生間谷遺跡で石器製作跡遺構が発見されている。茨木市では佐保の田中地点や神田平遺跡などがある。高槻市では郡家今城遺跡A地点、郡家今城遺跡C地点、郡家川西遺跡、塚原遺跡などがあり、塚原遺跡ではナイフ形石器や握斧などが発見されている。

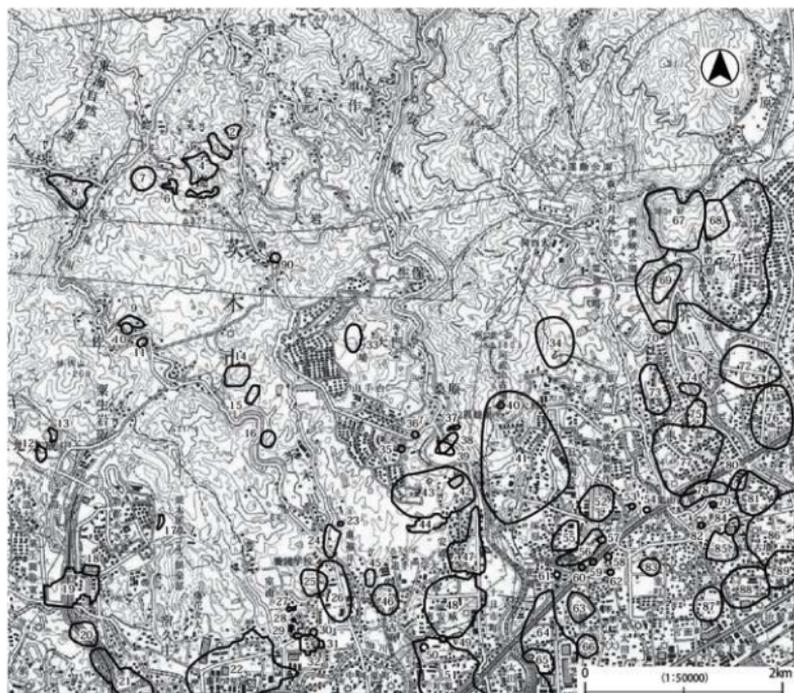
〔縄文時代〕三島地域では縄文時代草創期・早期の遺跡として、高槻市大塚遺跡、吹田市吉志部遺跡、箕面市粟生間谷遺跡がある。粟生間谷遺跡と吉志部遺跡では有舌尖頭器が数多く発見されている。茨木市郡遺跡でも旧石器時代末から縄文時代草創期の有舌尖頭器が発見されている。

縄文時代前期・中期では高槻市柱本遺跡などがある。縄文時代後期は茨木市の安威川流域で初田遺跡、西福井遺跡、太田遺跡などがある。縄文時代晩期は茨木市耳原遺跡で深鉢棺墓16基が発見され、石畿が数多く発見された。千提寺地区では免山篤氏により泉原の堂の前地点や佐保の田中地点で、楔形石器や尖頭器、石畿などの石器や高山寺式、神宮寺式、穂谷式など早期の押型文の縄文土器が採取されている。住居などの明確な遺構は検出されていない。

〔弥生時代〕弥生時代前期後半の耳原遺跡、郡遺跡、中期では塚原遺跡、中期後半では太田遺跡、後期では茨木市安威遺跡、茨木市宿久庄遺跡がある。郡遺跡では弥生時代中期から後期の方形周溝墓や竪穴住居が発見された。太田遺跡では竪穴住居などが発見された。

〔古墳時代〕茨木市総持寺遺跡では、1基の円墳と36基の方墳からなる古墳群から円筒埴輪、形象埴輪が多数発見された。5世紀中頃からの築造と考えられる。三島丘陵では多数の古墳が形成された。古墳時代前期（4世紀前半）の紫金山古墳、將軍山古墳や古墳時代中期（5世紀）の太田茶白山古墳などである。安威川流域では4世紀終り頃の安威古墳群や、耳原古墳、將軍塚古墳、海北塚古墳、新屋古墳群などの横穴式石室をもつ古墳がある。

〔古代〕竜王山の西南に位置する忍頂寺は、平安時代初めに僧三澄により建立された。貞観2年（860）清和天皇から寺号を賜り、勸願寺となった。当時は勝尾寺、神峰山寺などととも23もの僧坊をもつ山岳寺院



- |            |            |            |           |           |            |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|------------|
| 1 忍頂寺      | 2 千代寺市家遺跡  | 3 千代寺クス山遺跡 | 4 千代寺西遺跡  | 5 千代寺南遺跡  | 6 日合戸遺跡    |
| 7 泉原遺跡     | 8 泉原城跡     | 9 庄ノ木遺跡    | 10 佐保城跡   | 11 佐保の石橋  | 12 粟生岩阪遺跡  |
| 13 粟生岩阪北遺跡 | 14 佐保栗栖山古跡 | 15 栗栖山南墳墓群 | 16 福井北古墳群 | 17 窟久北遺跡  | 18 徳大寺遺跡   |
| 19 粟生間谷遺跡  | 20 庄田遺跡    | 21 窟久西遺跡   | 22 窟久庄遺跡  | 23 熊ヶ谷古墳  | 24 福井城跡    |
| 25 新屋古墳群   | 26 西福井遺跡   | 27 紫金山古墳   | 28 青松塚古墳  | 29 南塚古墳   | 30 湖北塚北方遺跡 |
| 31 海北塚古墳   | 32 福井遺跡    | 33 大門寺古墳群  | 34 片ヶ谷古墳群 | 35 初田2号墳  | 36 初田1号墳   |
| 37 桑原古墳群   | 38 桑原西古墳群  | 39 桑原遺跡    | 40 阿武山古墳  | 41 塚原古墳群  | 42 長ヶ原古墳群  |
| 43 安成古墳群   | 44 安成寺跡    | 45 真能寺古墳群  | 46 菅原山古墳群 | 47 安成城跡   | 48 安成遺跡    |
| 49 耳原古墳    | 50 藤原古墳    | 51 耳原遺跡    | 52 新池遺跡   | 53 眞藤山古墳  | 54 眞藤山古墳群  |
| 55 上土室遺跡   | 56 土室遺跡    | 57 泰山古墳    | 58 石塚古墳   | 59 土俵山古墳  | 60 二子山古墳   |
| 61 石山古墳    | 62 高橋古墳    | 63 太田茶臼山古墳 | 64 太田遺跡   | 65 太田城跡   | 66 太田庵寺跡   |
| 67 芥川山城跡   | 68 帯山山向城跡  | 69 下ノ口古墳群  | 70 塚ノ古墳群  | 71 塚原古墳群  | 72 宮之川遺跡   |
| 73 藤谷古墳群   | 74 唐井谷古墳群  | 75 肥ヶ谷古墳群  | 76 大蔵河遺跡  | 77 舟天山古墳群 | 78 岡本山古墳群  |
| 79 郡家車塚古墳  | 80 上野遺跡    | 81 郡家本町遺跡  | 82 前塚古墳   | 83 ツツノ古墳群 | 84 葛塚古墳群   |
| 85 今城塚古墳   | 86 郡家川西遺跡  | 87 宮田遺跡    | 88 郡家今城遺跡 | 89 川西古墳群  | 90 園見遺跡    |

第3図 周辺遺跡図(国土地理院50,000分の1地図「京都西南部」を使用)

として栄えた。他に寺院遺跡としては、太田庵寺、穂積庵寺、三宅庵寺などがある。

千代寺遺跡群の近くの遺跡としては、佐保の田中代地点で10世紀代の黒色土器B類椀、篠窯緑釉陶器皿、青磁・白磁などの中国陶磁器などが発見されている。明確な遺構はない。

〔中世〕古代末から中世初めになると茨木でも荘園支配が行われる。藤原氏などの摂関勢力が強かった平野部では、興福寺や春日社領が多く存在する。

山間部の忍頂寺は古代以後も、仁和寺の末寺として付近の5箇村に16町歩の荘園をもち勢力を誇った。忍頂寺5箇村といわれる、寺辺、銭原、音羽、泉原、佐保の村々である。寺辺の村が大門寺、車作、大岩、安元などとみられる。忍頂寺は織田信長が保護したが、高山右近がキリスト教布教のため寺領を没収し、衰えた。その後、17世紀前半に再興されたが再び衰え、今は寿命院が残るに過ぎない。寿命院本堂の北側斜面には、地輪に「元亨辛酉（1321年）七月十五日 金剛佛子 定盛」と銘が入った五輪塔が残っており、大阪府の有形文化財に指定されている。千提寺地区では、堂の前遺跡が名前の通り、瓦葺の寺院跡があったと推測される遺跡である。遺構は後世の開発により破壊されていたが、南北朝時代から中世末までの瓦が出土している。また、泉原今井遺跡では鎌倉時代の瓦器や土師器、中国陶磁などが発見されている。

中世後半期になると荘園支配が崩れ、地方の土豪が台頭してきて領主となった。茨木氏、中川氏、高山氏、乾氏などである。その居館が山城である。中世の山城跡としては、福井城跡、安威城跡、泉原城跡、佐保城跡などがある。泉原城は築城者が国人泉原氏と確定できる唯一の城である。東西の谷川によって造られた独立丘陵の地形を活かした、東西250m、南北100m位が城郭の範囲と推定される。現在は拡削平されて詳細は不明だが、北側が最も低く、切通となっていたと思われる。佐保城跡は元來城山と呼ばれていた。佐保の盆地が北より延びる急峻な地形を利用して造られた連郭式城である。長楕円形の郭で、北と東側に土塁が廻る。築城者は不明である。

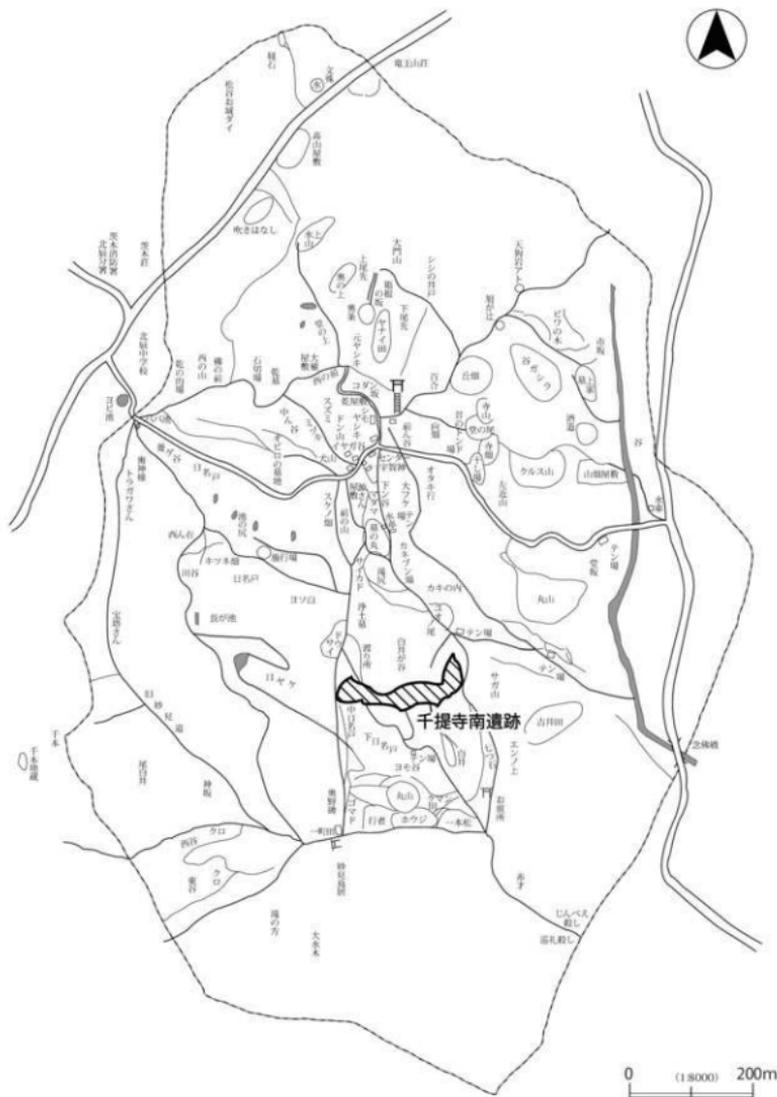
千提寺では、大字千提寺字中ノ谷小字土居山に山城があった。近代初頭まで中世名主の系譜を引いていた乾氏の居館跡である。千提寺地区のほぼ中央、西から突出した急峻な地形を利用して築かれる。西のみ尾根続きだが、三方は急斜面である。北と東に土塁が廻る。幅の広い東部は南側に小土居が造られ、郭状をなす。山間部は高山氏が支配し、キリスト教を厚く庇護したため流罪となったのは広く知られている。

〔近世〕千提寺に関連してはキリスト教遺物の発見がある。大正8年（1919）から昭和5年（1930）にかけて、千提寺安元地区の藤波大超氏が東藤次郎氏の協力を得て、「上野マリヤ」と書かれた墓碑をみつけたのを皮切りに、「フランシスコ・ザビエル画像」や「キリスト磔刑像」などの数々のキリスト教遺物が周辺の民家から発見された。その後、下音羽地区でも「マリア十五玄義図」「象牙彫キリスト磔刑像」なども発見された。これらのキリスト教遺物は、神戸市立博物館や京都大学博物館に保管されている。千提寺地区には昭和62年（1987）に茨木市立キリスト教遺物資料館が設置され、2012年には創立25周年を迎えた。

今回、千提寺南遺跡と共に調査を行った千提寺クス山遺跡は、まさにこの上野マリヤ墓碑がみつかった場所に相当する。

#### 〔参考文献〕

- 井藤暁子編 1999 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集 彩都（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 井藤暁子編 1997 『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第9集 安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 茨木市教育委員会 1988 『わがまち茨木 地名編』
- 茨木市教育委員会 1991 『わがまち茨木 水利編』
- 茨木市史編纂委員会編 1969 『茨木市史』
- 茨木市史編纂委員会編 2004 『新修 茨木市史 第八巻史料編 地理』
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2013 現地説明会資料『千提寺西遺跡の調査』
- 田代克己、小林章 1998 『茨木の史跡』 茨木市教育委員会



第4図 茨木市千提寺民俗地図

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集

『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』より抜粋、改変)

## 第3節 調査の方法

### 第1項 地区割と調査区名

調査区割は世界測地系に基づく平面直角座標系に準拠している。

第Ⅰ区画から第Ⅳ区画の区割によって大阪府内を分割し、それぞれに地区割名を与えるものである。第Ⅰ区画とは、大阪府の南西端  $X = -192,000$ 、 $Y = -88,000$  の交点を基準として、南北6km、東西8kmの範囲を62分割した区域をいう。このうちの1区画をさらに南北1.5km、東西2kmの範囲を各4分割、計16分割したものが第Ⅱ区画である。さらに、この第Ⅱ区画を南北に15分割、東西に20分割した一辺100mの範囲を第Ⅲ区画とする。第Ⅲ区画を東西南北それぞれ10分割した一辺10mの範囲を第Ⅳ区画とする。

大阪府が位置する第Ⅵ座標系を第Ⅰ～Ⅳ区画に区分すると、当遺跡の所在地は第Ⅰ・Ⅱ区画がL5-7となる。第Ⅲ区画が3H・3I・4I・5H・5I・6H・6Iとなる(第5図)。

調査区は13に当初設定された区割からは工程上若干の変更が生じ、別の調査区だった12区と13区を一つの区として調査した(第6図)。また、道路の付け替え部にあたる8区も2つに分けて調査したため、それぞれの調査時には8-1区、8-2区と呼称した。この報告書で調査区名の整理を図り、以下の名称に変更する。

旧調査区名		新調査区名
12・13区	→	12区
8-1区	→	8区
8-2・8-3区	→	13区

また、遺構番号も区の調査順が1区、5区、7区、9区、11区、10区、3区、4区、6区、2区、8区、12区、13区の順であり、2つの調査区を並行して調査することもあったので、調査時には区毎に1からの数字を付与した。よって、遺構番号が数字の通し番号となっておらず複数存在する例が生じた(例えば1区、6区、10区それぞれに1溝が存在する)。

そこで、遺構番号も整理し番号を付け替えることとした。1区の遺構番号はそのままにして、それ以外の区は調査時に付与した遺構番号の前に、調査区を表す数字をつけ、従来の遺構番号はそのあとに2桁ないしは3桁の番号で続けるものとして、3桁ないしは4桁の番号で表すこととした。

(例)

旧遺構番号		新遺構番号
1区 1溝	→	1溝
6区 1溝	→	601溝
10区 1溝	→	1001溝
4区 23土坑	→	423土坑

### 第2項 発掘調査

各区とも現況測量後にバックホウを用いて盛土・耕土等の機械掘削を行った(写真3)。機械掘削後はベルトコンベアー、排水ポンプ等を設置し、断面観察用のアゼと側溝を適宜設けた。アゼは調査区の南北もしくは東西の座標の正方位にそって谷底を通る箇所に設けるようにしたが、地形にあわせた結果、正方位より45°の角度になった調査区もある。

人力掘削では、包含層の掘削(写真3)、精査、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、実測、遺物の取り上げな

どを行った。各遺構面の調査ごとに、遺構面の撮影や平板測量、調査区・遺構断面の実測を行った（写真6・7）。

調査はすべて当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行われた。遺構平面図の作成には平板図は100分の1、航空測量図は50分の1縮尺を基本とする。断面図の作成には10分の1もしくは20分の1縮尺を基本とする。出土状況図は5分の1や10分の1縮尺などを適宜使用した。測量の際は委託して設置した3級基準点や4級基準点に拠って、各調査区内に杭を設置し、X、Y座標値を割り出した。

写真撮影は35mmフィルムによるモノクロ、リバーサル撮影とデジタルカメラを基本とし、全景写真や重要写真には6×7版フィルムでモノクロ撮影した。特にカラーでの記録情報が必要なもの、巻頭図版やパンフレット等に使用される可能性があるものは6×7版フィルムでリバーサル撮影した。

航空測量は、13区以外の調査区で主要な遺構面の調査時に1回、計12回のヘリコプターによる航空測量を実施した（写真4）。航空測量の際は必要に応じて高所作業車を使用して写真撮影を行った（写真5）。また、全調査区とも最終遺構面については大阪府教育委員会の立会を受けた（写真9）。

平成25年3月23日には隣接する千提寺西遺跡で現地説明会が実施された。新聞報道で広く紹介されたこともあり、地元の方以外の遠方からの来訪者もあり、572名の参加を得た。千提寺南遺跡についても写真パネルや出土した縄文土器・石器の展示を行い、縄文時代から中世まで継続した千提寺南遺跡の存在を広く印象づけた（写真10）。

### 第3項 整理事業

今回の調査で出土した遺物はコンテナ20箱にのぼった。現場作業の合間に遺物の登録や洗浄、注記といった出土遺物の基礎整理事業を随時実施した。また、撮影した遺構写真のアルバム整理や写真台帳作成、遺構実測図の整理なども現場作業と並行して行った。

平成25年4月からはセンター中部調査事務所に本格的に整理事業を開始した。

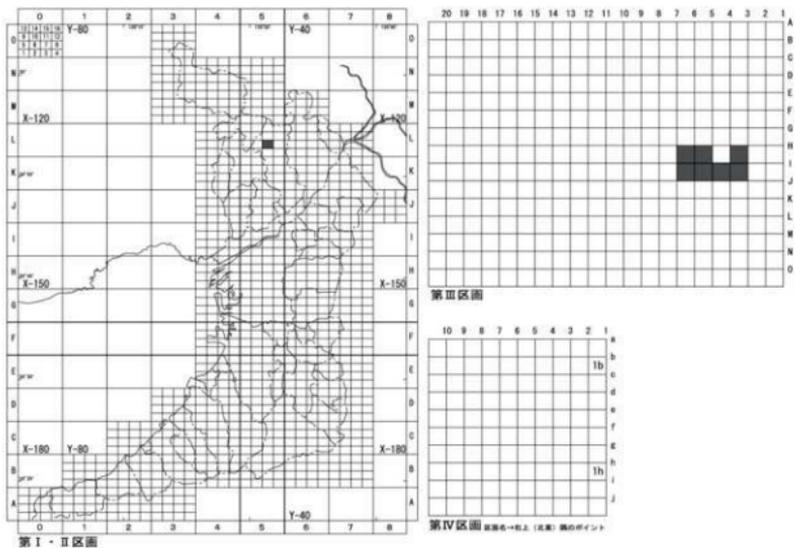
遺構については、実測図や空測図の整理から挿図レイアウト、トレース、版下作成、原稿作成等を行った。遺構はデジタルトレースを行った。デジタルトレースについてはPhotoshopCS2を用いて図面の合成作業を行い、IllustratorCS2でトレース作業を行った。

遺物については、掲載遺物のピックアップから接合、実測（写真8）、拓本、トレース、版下作成、原稿作成、遺物観察表の作成などを行った。トレースはロットリングトレースを行った。挿図や写真図版の掲載番号が確定した後は、個々の個体に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納した。

写真図版は、遺構は現場で撮影した6×7版モノクロ写真を中心に写真を選択し、レイアウトを行い、写真室で紙焼、その後貼り込み、キャプション等を作成して完成した。遺構写真図版は29プレートになる。遺物は写真掲載遺物を決定して、必要に応じて接合・復元を行った。レイアウトの後、撮影、紙焼は写真室に依頼した。その後に貼り込み、キャプション等を行って完成した。遺物写真図版は17プレートになる。

原稿、挿図、写真図版を個々に完成した後、編集作業を経て報告書の体裁を整えた。入稿後校正を経て、平成26年3月本書の刊行をもって完了した。

遺物は報告書掲載順に整理して、報告書の遺物番号などから後日すぐに検索できるよう収納した。台帳はファイルメーカーを用いてデータベースの台帳を作成した。それらの遺物台帳、写真台帳にも掲載番号等を付与し、報告書からの検索を可能とした。



第5図 地区割図

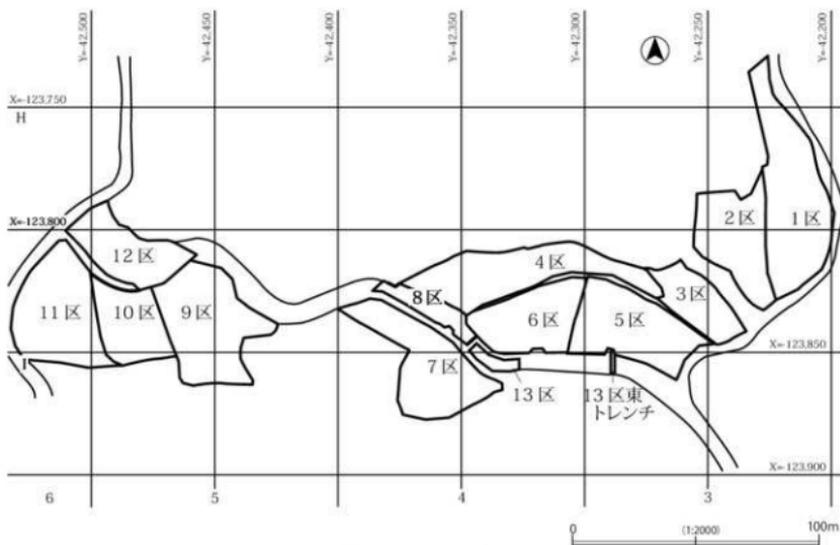




写真3 現場作業風景



写真4 ヘリコプターを用いた航空測量



写真5 高所作業車からの写真撮影



写真6 平板測量



写真7 断面実測



写真8 遺物実測

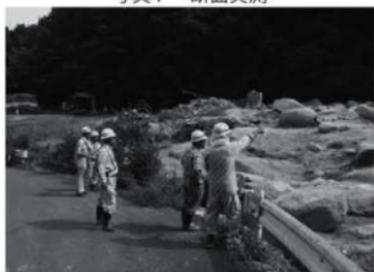


写真9 大阪府教育委員会による立会



写真10 現地説明会風景

## 第2章 基本層序

### 第1節 基本層序

調査地は南北約 80 m、東西約 200 m という範囲で、13 の調査区に分かれて存在する（第 6 図）。1 区から 8 区と 13 区は、南北の丘陵地に挟まれた谷底平野でその中心にあたる 3 区のみが北西部の山から伸びる尾根となる。3 区を胴として蝶が羽をひろげたような形状である。また、西側の 11 区から 7 区にむかつては西から東に下降する地形をとる。そこで、3 区より東（1・2 区）を東部、3 区から 8 区と 13 区を中央部、9 区から 12 区を西部と、調査区全体を大きく 3 つに分けて記述する。

標高は中央部の中では、山の尾根にあたる 3 区は独立して高い。全体としては西端の 11 区が最も高く、東端の 1 区が最も低くなる（第 7・8 図）。

また、基本層序は大きくは 3 層に分けられる。試掘調査結果報告に基づく呼称を本調査でも踏襲し、耕土層・床土を 1 層とし、人力掘削を行った層の上層を 2 層、下層を 3 層とした。

2 層は黄褐色や灰褐色の細砂混じりシルトをベースとする層で、主に中世から近世の遺物を包含する。2 層は区によって堆積の厚さが異なる。

3 層は東部では、砂礫を多く含むほか、マンガン粒を含むことにより赤茶色を呈するシルト層が上層に堆積していた。全体では、白色砂礫や有機物を含む黄灰色もしくは灰色シルト層がベースとなる。3 層は縄文時代から中世以前の遺物を包含する堆積層と考えられ、地山まで、ほぼこの層が堆積していた。地山に近い最下層では粒子の粗い砂礫層となる事が多い。地山は、黄褐色のしまった中砂から粗砂で、花崗岩のバイロン土である。

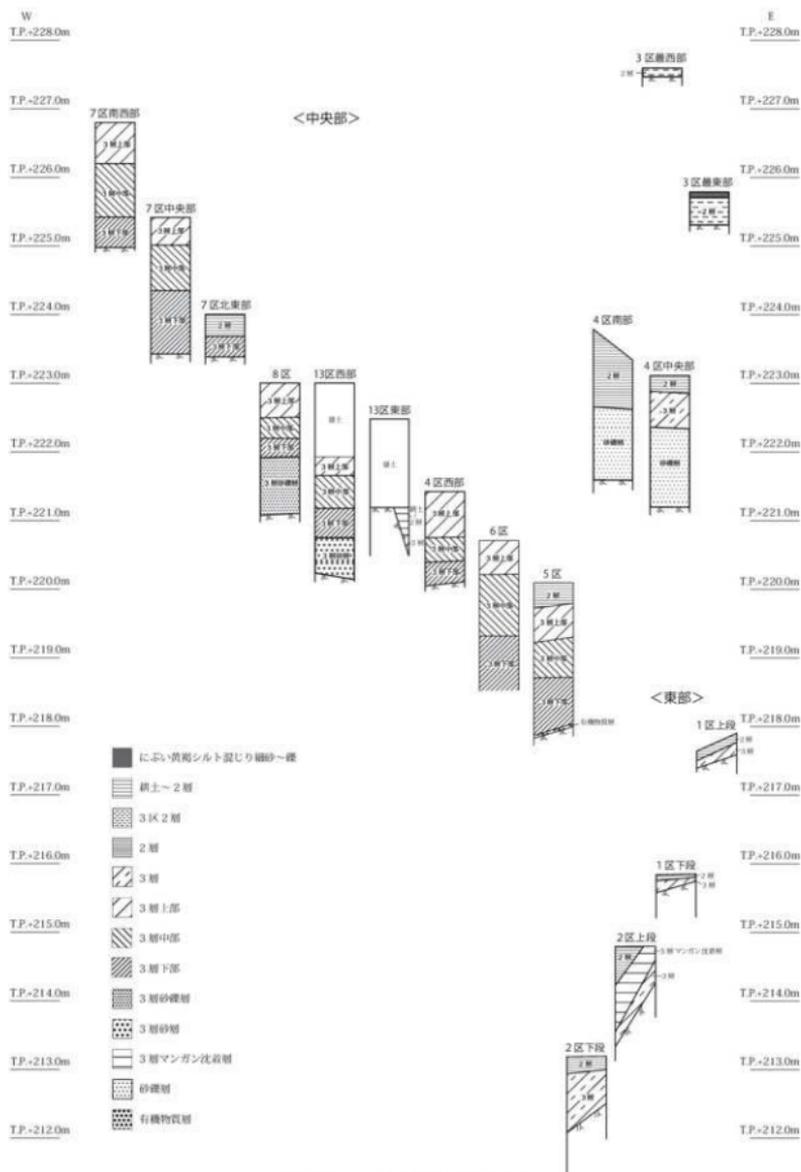
ただし、調査地は広い範囲におよぶため、同じ 2 層、3 層でも離れた地点では土色や土質に違いが認められる。そこで、初めに全体を概括するための基本層序柱状図を示した（第 7・8 図）。次に、東部の東西方向を示す断面としては X = -123,800 ラインを通る断面（第 9 図）を、中央部は南北方向を示す断面（第 10 図）を、西部は主に東西方向を示す断面（第 11 図）を掲載した。なるべく各調査区の最も低いところを通る断面を抽出した。また、3 区については、他の調査区と標高や性格が異なるため、第 3 章の遺構面のところであわせて説明することとする（第 29 図）。

#### 第 1 項 東部 [1・2 区]（第 7・9 図）

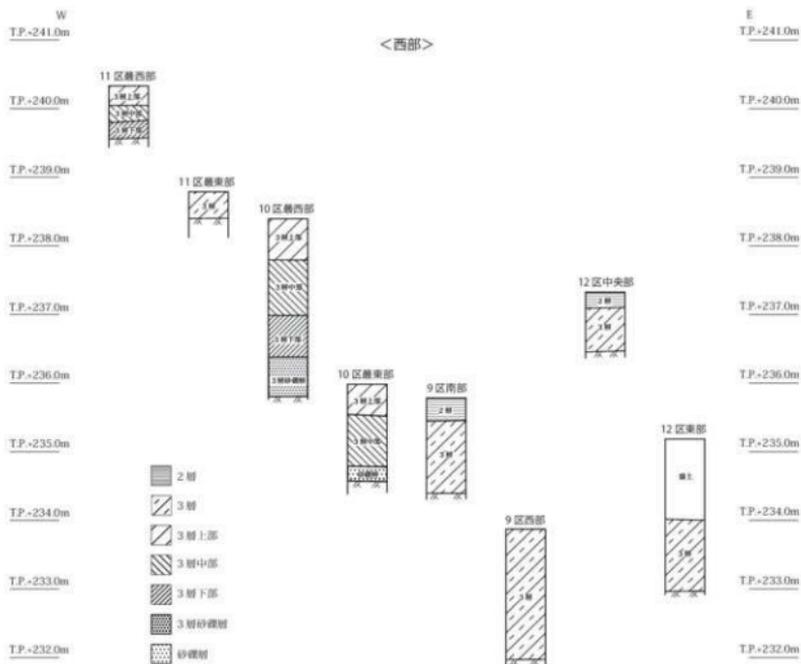
1 区、2 区とも南北に細長く広がる調査区である。東から西に低くなる。調査前も東から西に落ちる南北方向の棚田であった。1 区から 2 区にむかつて下がる傾斜地形が、棚田造成の際に削平を受け現況の段状地形になったと思われる。従って、2 区の上段など本来はもっと高かったと考えられる。人力掘削を開始した標高は、最東部の 1 区上段が T.P. + 218.9 m 前後となる。最西部の 2 区下段で T.P. + 213.2 m をはかる。

2 層は 0.1 ~ 0.5 m の厚さで黄褐色の細砂混じりシルト層を主体とする。北東部から北西部にかけて厚く堆積する。須恵器などをわずかに含むものの、土師器・瓦器・陶磁器・瓦質土器等を主に包含することから古代末から中世以降の堆積層と考えられる。2 層上面に近世以降とみられる鋤溝などの耕作痕が認められる。

この下層の 3 層は調査区北東部では灰黄褐色細砂～礫混じりシルト層である。さらに、1 区から 2 区上段では、上層にマンガン粒を多く含むため黄色味が強く、オリーブ褐色を呈する層が認められ、2 層と 3 層を細分することができる。縄文時代所産の遺構はこのマンガン粒が沈着する 3 層の上面に多く存在する。



第7図 基本層序模式図(1)



第8図 基本層序模式図(2)

マンガンが沈着する層(第7・8図では3層上部と表現)の厚さは0.1～0.5 m程度であり、2層と同じく北東部で最も厚く堆積が認められ、南東部から南西部ではほとんど堆積しない。さらに3層下層(3層中部～下部と表現)は0.2～1.0 m堆積する。これらの層に縄文土器や石器などが含まれる。

調査区南西部、2区の南側から下段にかけては白色の砂礫を含む灰色細砂混じりシルト層が主となる。これは、中央部や西部の谷に最も標準的に堆積する層である。この下からは湧水が著しい。主に中世の土器を含む。

3層を除去すると丘陵から滑落した岩石が集積する地山面となる。2区下段の3層除去後の標高は約T.P.+212.0 mとなり、1区の上段と比較すると6 m程の高低差をもつこととなる。

## 第2項 中央部〔3・4・5・6・7・8・13区〕(第7・10図)

1区、2区と4区に挟まれた山の痩せ尾根部分が3区である。3区は北西から南東に斜めに細長く伸びる調査区である。3区の最高部でT.P.+227.6 m前後である。急峻なため土の堆積が少なく、山頂平坦部では地山の土が風化した層の堆積がわずかに認められるのみである(第29図参照)。

3区の南側山裾に広がるのが4区、5区、6区である。4区は3区の間裾にあたり、東西に細長く弧を描くように広がる調査区である。東西で約100 m離れているため、東側、中央部、西側で堆積状況が大きく異なる。北から南に、西から東に低くなる。東側は3区の間裾が伸びてくるため、盛土を除去すると地山の崩

れた土が堆積するのみである。中央部はT.P. + 221.5 m～223.0 mで、2層と3層が0.5～1.0 mと厚く堆積して、それぞれの上面で複数の遺構面が認められた。遺物も縄文時代前期から中世までの幅広い時期のものを包含する。西側は3層が厚く堆積する谷状地形をとる。

4区の西側と5区、6区が北と南の山に挟まれた盆地の最も谷底に近い地区で、2層、3層ともに厚く堆積する。人力掘削開始高は4区で約T.P. + 223.0 m、5区で約T.P. + 220.0 m、6区で約T.P. + 220.8 mである。そこから調査で確認できた限りでは、2層、3層が2～3 m堆積する。5区や6区は3層の堆積が3 m以上におよんだ。5区と6区は4区と北を接し、東半が5区、西半が6区に相当する。3層の堆積が厚く、間層となる砂層を目安に数回に分けて掘削し、3層上部、3層中部、3層下部と表現した。

中央部での3層は、灰色から灰褐色の白色砂粒を含むシルト層を主体とする。3層最下層には木の枝などの有機物を含むためか、やや黒味を帯びた黒褐色シルト、あるいは川砂の黄灰色砂礫層が堆積する。3層上層から中層の厚い堆積中に、足跡と考えられる踏み込みを伴う細砂層の堆積が間層として認められた。3層の堆積は一挙に生じたのではなく、機能している時期と、浸水して機能していない時期とが交互に繰り返されたものと推測できる。ただし、上層でも下層でも包含する遺物は古代末から中世後半のものであり、時期幅は数百年内におさまらるだろう。

3層途中で杭を列状に並べる、あるいは自然石を利用して列状に並べた遺構が認められた。畦畔などは検出していないが、一定の方向性、規則性が認められることから水田の区画などに基づく施設とも考えられる。最低部の標高は4区で約T.P. + 221.5 m、5区で約T.P. + 218.0 m、6区で約T.P. + 219.0 mである。

7区は3区とは4区、5区、6区を挟んで相対的に位置する南側の山から落ちてくる傾斜地で、南東部が膨らみ、西側が細長いおたまじくのような形状をとる。南西から北東に低くなる。

人力掘削開始高は7区南西部でT.P. + 226.5 m、中央部でT.P. + 225.5 m、北東部でT.P. + 224.0 mとなる。そこから南東部や南西部では2、3層が1.5～2.0 m堆積する。北西部から8区に接する部分は2層の堆積が厚く、2層を除去すると、3層の堆積がなく地山が露出する部分が多い。2層は黄褐色のかたくしまったシルト層である。2層には陶磁器などが多く含まれていた。膨らんだ南東部を二分するように細くて深い谷筋が入り、その部分にのみ3層が厚く堆積していた。7区でも最も深い箇所は部分観察にとどまった。7区の最高部と最低部の標高差は約4 mになる。

4区から8区、13区ともに、3層の堆積中には2区などと同様に、山頂から落ちてきた花崗岩の巨石が多数含まれていた。中央部の南北方向の堆積状況を示す断面図を第10図に示した。同じY座標軸では断面を取ることができなかったため、区によって層厚などに若干の相違は生じる。

8区は既存の道路部分で主に4区と7区の間に位置する、細長い調査区である。人力掘削開始高は約T.P. + 222.9 mである。西から東に低くなる。4区同様に3層が厚く堆積していた。

13区は既存の道路部分で主に6区の南に位置する細長い調査区である。人力掘削開始高は約T.P. + 222.0 mである。西から東に低くなる。6区同様に3層が厚く堆積していた。

13区東トレンチは5区西側の谷から連続する3層の堆積を確認するために設定した。5区との境界から2、3 mまでは3層が1 mの厚さで堆積するが次第に薄くなり、谷底が上昇して地山が露出した(第46図参照)。

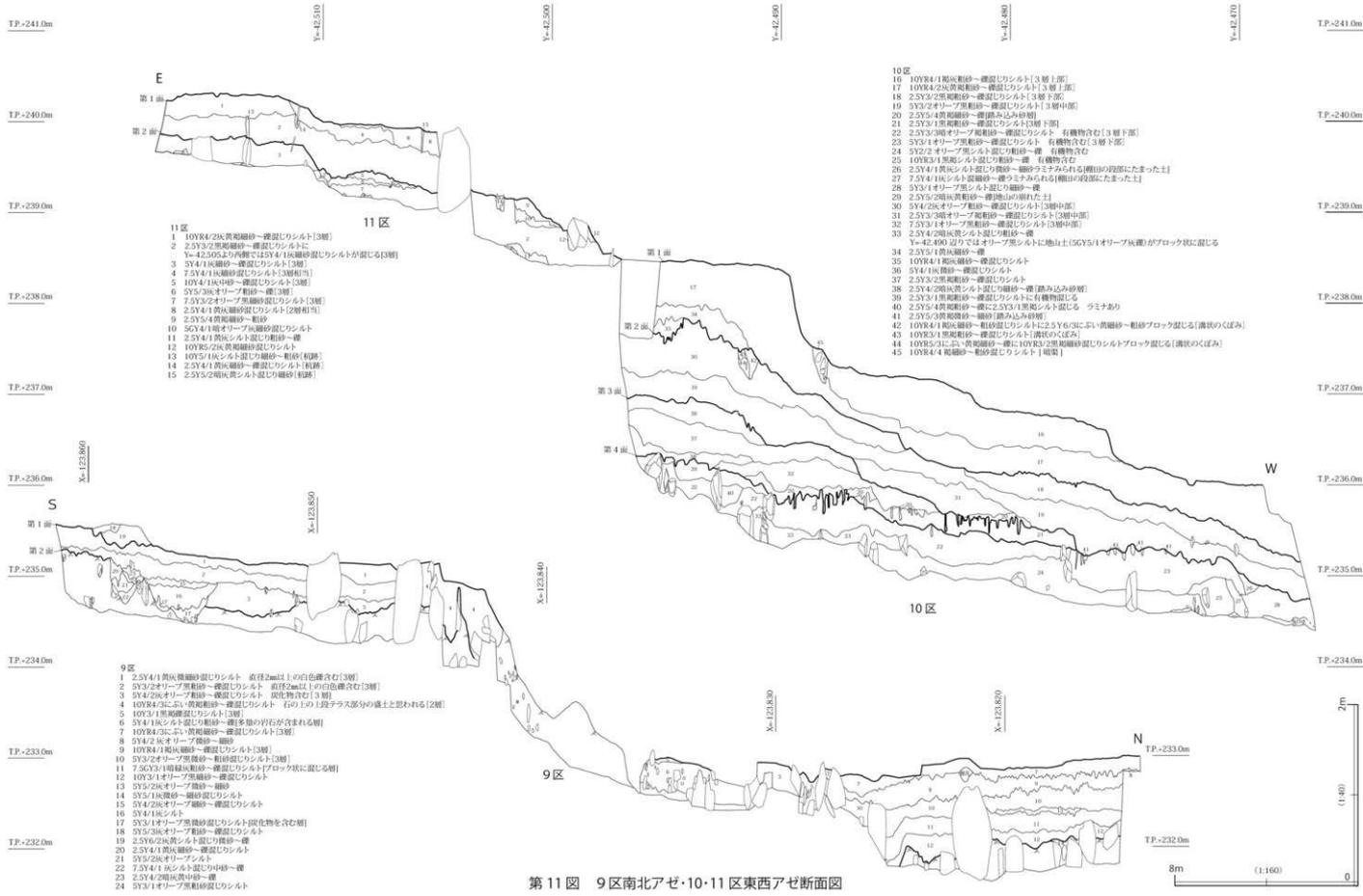
### 第3項 西部 [9・10・11・12区] (第8・11図)

11区、12区は市道千提寺中線を西辺とし、10区は11区の東に、9区は10区の東に位置する。いずれも西から東に下降していく調査区である。調査前も西から東に落ちる南北方向の棚田が8、9段あった。

11区から9区にかけては、調査区の北端と南側で深い埋積谷が認められ、それ以外は機械掘削で盛土等を







第11図 9区南北アゼ・10・11区東西アゼ断面図

除去すると3層が堆積せず地山が露出した。10・11区では調査区の西半では2層が認められ、2層上面で竹管を用いた暗渠状の遺構が構築されていた。

10・11区の2層は黄褐色から赤褐色のシルト層で、古代末から中世の遺物を包含する。

人力掘削開始高は11区最西部でT.P. + 240.4 m、最東部でT.P. + 238.8 m、10区最西部でT.P. + 238.4 m、最東部でT.P. + 236.0 m、9区最西部でT.P. + 235.8 m、最東部でT.P. + 233.9 mとなる。西の11区から東の9区までの標高差は約7 mとなる。谷筋では、2～3 mの厚さにわたって3層が堆積する。

11区と10区にある、南側谷筋の西部の3層の堆積の厚いところでは、5・6区と同様に足跡による踏み込みを伴う砂層が間層として数層確認できた。これを目安に2、3層に分けて掘削し、中央部と同様3層上部、3層中部、3層下部とした。3層は灰色から暗灰色のシルト層を基本とし、上部がより粘性が強く、下部になると砂礫の混じり方が強くなる。最下層では有機物が堆積する層が認められる傾向なども中央部と同じである。中央部と比較すると、3層では土師器、瓦器など主に中世の遺物を包含するが、黒色土器などやや古い遺物も含む。

11区から10区にかけての南側谷筋の3層上部では、西に要をおく扇形の中世の棚田が数段確認できた。近現代と同じく傾斜地形を利用して棚田などの耕作地に利用されていたと考えられる。また、棚田に伴う石列や杭列などの遺構も確認した。

北端の谷筋は11区から9区の間まで認められ、調査区外にも延長していくと考えられる。

9区は南側の上段部は山の裾にあたるためか3層の堆積が薄かったが、南東部では縄文時代の石器や弥生土器などの比較的古い時代の遺物が含まれていた。

9区では、地山の露出した箇所、特に低くなった東側では頂上から滑落ちてきたと思われる巨石が集積していた。これらの上に盛土等をかぶせて平坦化し、近現代の田や畑として利用していたようである。盛土する際に突出した石の上部を切り取るためのノミなどの加工痕もみられた。

12区は市道千提寺中線から分岐する道路であり、8区同様道路の付け替え部分に相当する。山の裾部にあたる。従って、北側は機械掘削を行った段階で地山が露出した。

12区の調査区の東端、9区に隣接する部分で深い埋積谷が認められ、それ以外は機械掘削で盛土や締りの弱い表土を除去すると地山が露出した。人力掘削開始高は12区中央部でT.P. + 237.3 m、東部でT.P. + 234.1 mとなる。中央部では2層が0.2 m、3層が0.5 m程度堆積して地山が現れる。東部では1 m以上におよぶ盛土を除去すると2層はほとんどみられなかった。削平されたと考えられる。その下層には3層が1 m強堆積する。

中央部の3層の堆積の厚いところでは、足跡による踏み込みを伴う砂層が間層としてあるのが確認できた。これより、近現代と同じく傾斜地形を利用して、中世の棚田などの耕作地に利用されていたと考えられる。地山の露出した箇所では頂上から滑落ちてきたと思われる巨石が集積していた。

以上、基本層序を概観すると基本的には東部では東から西に、西部では西から東に下降していく地形をとり、北の山から、あるいは南の山から落ちてくる数本の谷筋が現道路の辺りで、最も深くなる地形の状況がみてとれる。そして、谷筋深く堆積したシルト層を活用して、主に耕作地に利用されていたと考えられる。利用の詳細は、次章の遺構でみていきたい。

## 第3章 調査成果（遺構）

本章では、遺構の調査成果を記述する。調査区が13あり、全てを一度に図化、説明すると煩雑になるため、第2章に倣って調査区を東部（1、2区）、中央部（3～8区、13区）、西部（9～12区）の3つの区域に分け、それぞれ節を設けて記述した。全調査区の主要遺構面の平面図は第5章の総括に掲載した（第72図）。

出土遺物の調査成果については第4章に記載した。ただし、出土遺物については、1区から12区まで調査区位置の東から西に掲載するが、遺構と同じ東部、中央部、西部の区分となっていない箇所もある。

また、機械掘削終了時に精査した遺構面を概ね第1面としたが、それ以降は層の掘削の細さが違うため、各調査区によって遺構面数が異なる。基本は東部、中央部、西部毎に対応する遺構面で1つの合成平面図として図化し、説明を行った。その後、合成平面図に含まれるそれぞれの区の遺構面、遺構の図化、説明を行っている。そのため、対応する遺構面の名称が調査区によって異なる場合があるが、あえて統一せず調査時の名称のままとした。各調査区の遺構面の対応は第5章の表9にまとめた。

機械掘削終了面や部分的な調査にとどまった遺構面は、文章や写真図版で説明するとともに、遺構平面図は掲載していないものもある。また、1層、2層、3層という包含層の名称は第2章の基本層序の呼称をそのまま使用している。

### 第1節 東部（1・2区）の遺構

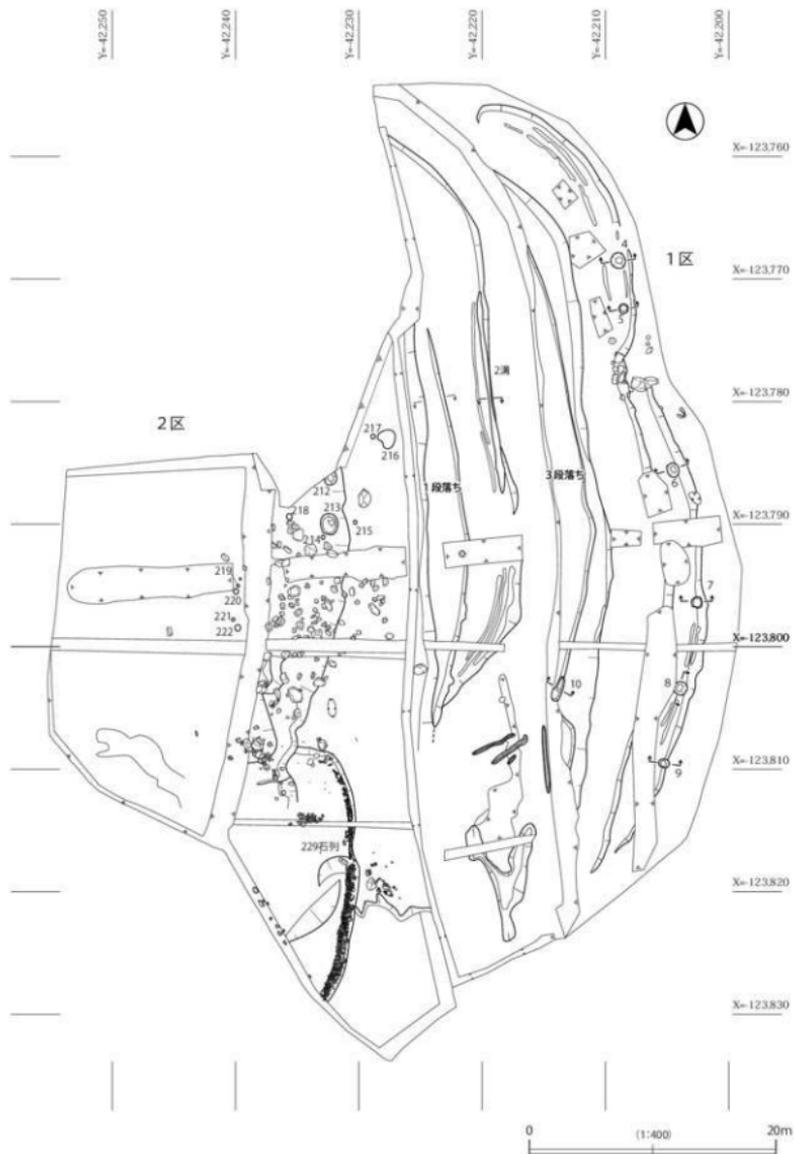
#### 第1項 1区第2面・2区第3面（第12～19図、写真図版1～4）

1区と2区はおおよそ $X = -123.755 \sim -123.835$ 、 $Y = -42.200 \sim -42.250$ の間に存在する。南北に細長い形状をとる（第12図）。調査前の現況では、東から西へと下降する棚田が4段広がっていた。機械掘削で盛土や近世耕土層（1層）を除去しても東から西へと下降するままである。機械掘削終了後の高さは、最も高い1区の東端でT.P. + 218.8 m、最も低い2区の西端でT.P. + 213.2 mと比高差は5 m以上ある（第9図）。

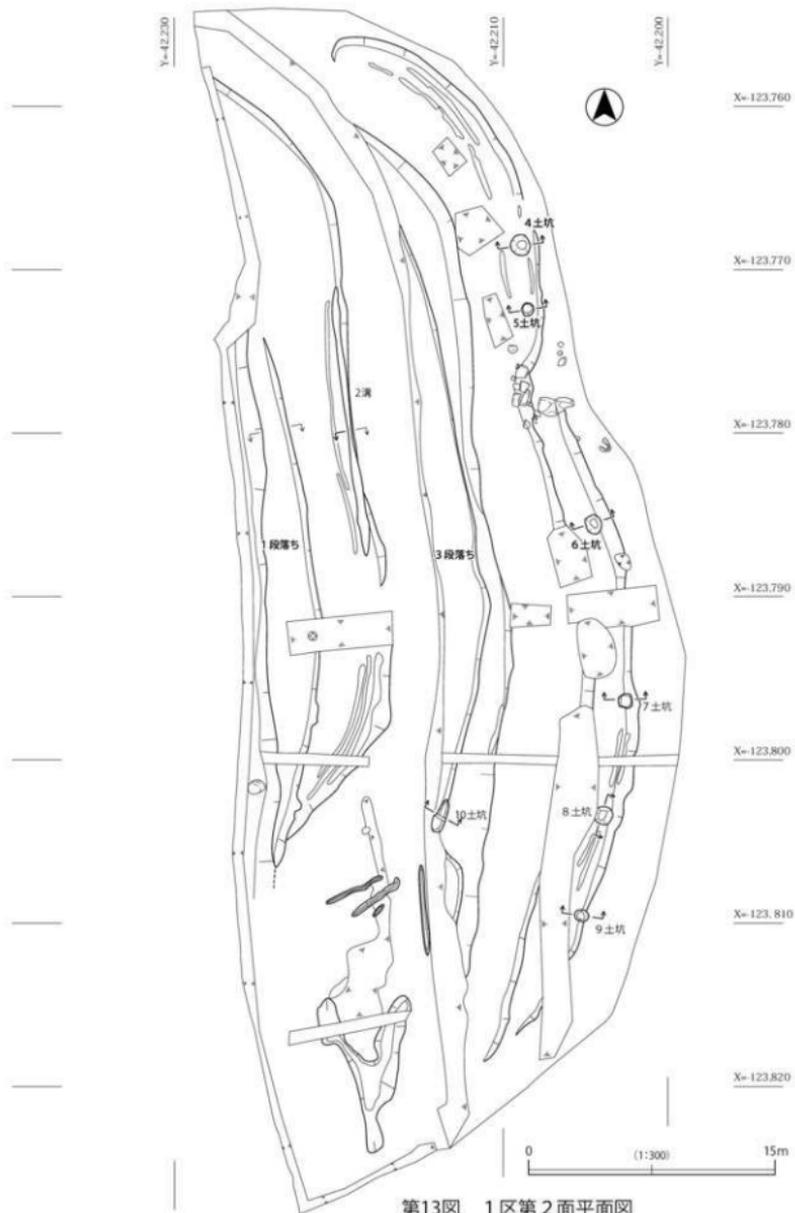
1区、2区とも機械掘削を終了した面を第1面とした。第1面では南北方向、あるいは東西方向の鋤溝を確認した。機械掘削や第1面精査で出土したのは、縄文土器も含むが多くは陶磁器類である（第57図）。よって、第1面は近世の遺構面と判断し、この節では報告しない。その後、1区は2層を掘削して、2層の下面の土坑や溝などを複数検出した遺構面を第2面とした。第2面の平面高は約T.P. + 218.6 m～214.7 mである。

2区は第1面掘削後、上段（東半）中央、 $X = -123.800$  辺りから北5 mほどの範囲にのみ、2層が厚く堆積して上層、下層と分層できたため、2層上層のみを0.1～0.5 m掘削して第2面とした（写真図版3）。2区の第2面では短い溝を1条検出した。

さらに、2層下層を掘削し、土坑などを検出し第3面とした。第3面の平面高は約T.P. + 214.7 m～213.2 mである。1区第2面と2区第3面とも、3層上面を検出したところを対応する遺構面と捉えて合成平面図を作図した（第12図）。1区では第2面以下は橙色や褐色系シルトや細砂の3層を掘削し、全域で地山まで検出した。2区は下段の北西部や $X = -123.810$  以南では、東の山から落ちてくる谷にあたり、他の調査区でも谷に埋積する灰色シルト（3層）が深く堆積して、地山まで検出できなかった部分がある。複数時期の遺構が同一遺構面で存在するが、詳細な遺構の説明は以下に記述する。



第12图 1区第2面·2区第3面平面图



第13图 1区第2面平面图

## 1区第2面の遺構（第13図、写真図版2）

第1面の名残で、地形のカーブに沿うように東から西にいくつかの段落ち（1段落ち・3段落ち）や溝（2溝）が存在する。また、最東部から3段落ちの間で円形や不整形の土坑数基を検出した。

遺構から遺物が出土していないが、2区での検出遺構の時期や層位との関連から1区の第2面は縄文時代の遺構面と考えられる。

1段落ち（第14図）・3段落ち どちらも棚田の段が一段下がる傾斜部分の落ち、溝状部分の上層に土が堆積したものである。段中心部が最も幅広く、段に沿って三日月状に落ちが発生する。最大幅2.5～3.0m、深さ0.25mをはかる。

2溝（第14図） 1段落ちと3段落ちの間の南北に長い溝である。幅0.3m、深さ0.05mをはかる。

1区の東端の縁辺部に沿って、4土坑から9土坑を検出した。土坑はいずれも不整形、もしくは隅丸方形で大きさもまちまちである。土坑と土坑の間隔も4土坑と5土坑は約3.0mだが、5土坑と6土坑の間は14.0m弱、それ以外も10.0m、7.0m、7.0mとまちまちである。ただし、5土坑と6土坑の間などにさらに土坑が存在していた可能性もある。

10土坑のみがやや離れた2段目の段端の位置に存在し、形状もアメーバ状の長円形であるのに対して、4土坑から9土坑は平断面形が似ており、南北方向に長軸をとることや埋土に焼土や炭化物が含まれるなどの共通点が認められる。ただし、遺物も出土しておらずこれらの土坑の性格や関連性は決めがたい。

4土坑（第14図、写真図版2） 長径1.3m、短径1.2m、深さ0.3mをはかる。南東隅が直線的な不整形の土坑である。断面形は椀形である。上層には3層や地山がブロック状になった土がほぼ水平に堆積していた。下層には炭化物層が広がり、最下層には焼土が歪な形状で北西寄りに認められる。土坑底で何かを焼いた痕跡と思われる。遺物は出土していない。

5土坑（第14図、写真図版2） 長径0.8m、短径0.75m、深さ0.2mをはかる。ほぼ円形の土坑である。断面形は椀形である。埋土のほとんどは3層と地山ブロックが混じった土で占められるが、下層には炭化物と焼土が長円形に認められる。遺物は出土していない。

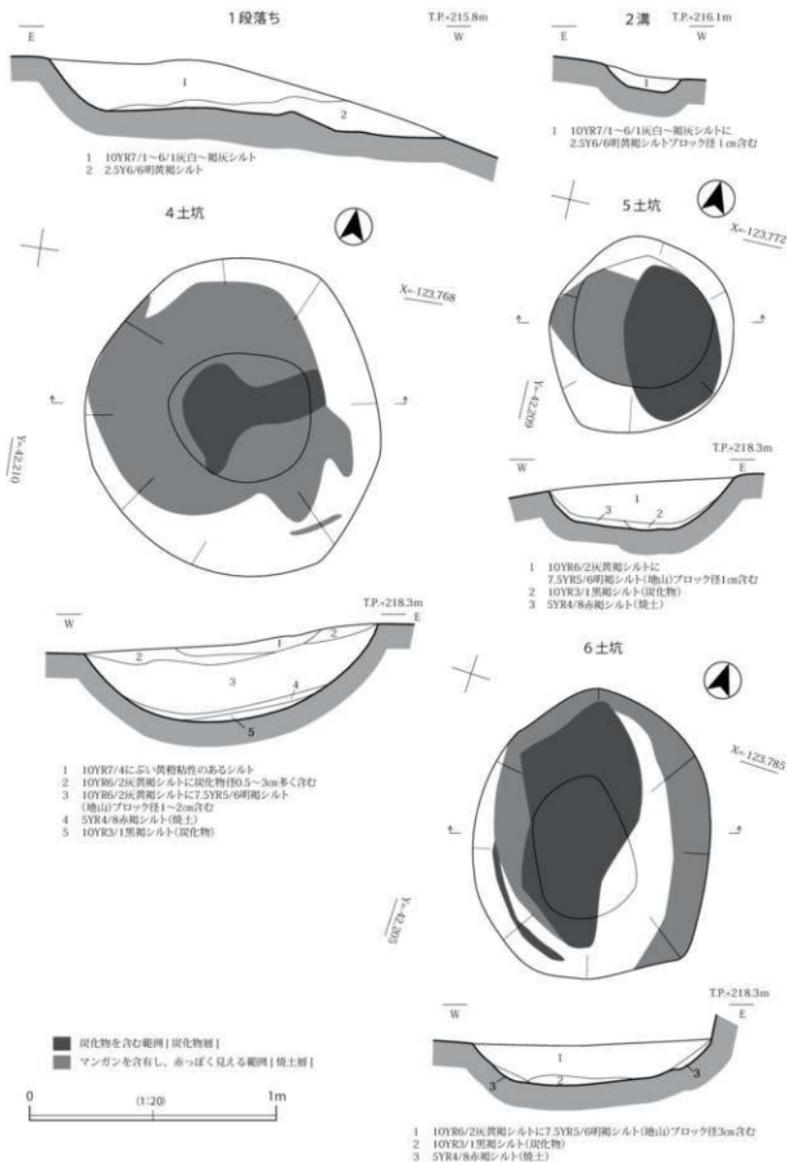
6土坑（第14図） 長径1.2m、短径0.95m、深さ0.2mをはかる。南北に長い長円形の土坑である。断面形は皿形である。上層は3層と地山ブロックが混じった土で占められるが、下層は焼土が壁に張り付くように巡り、底部には炭化物が認められる。遺物は出土していない。

7土坑（第15図） 長径0.9m、短径0.8m、深さ0.15mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は逆台形である。6土坑と同じく、東側の壁に焼土がみられ、最下層には炭化物がまだらに認められる。遺物は出土していない。

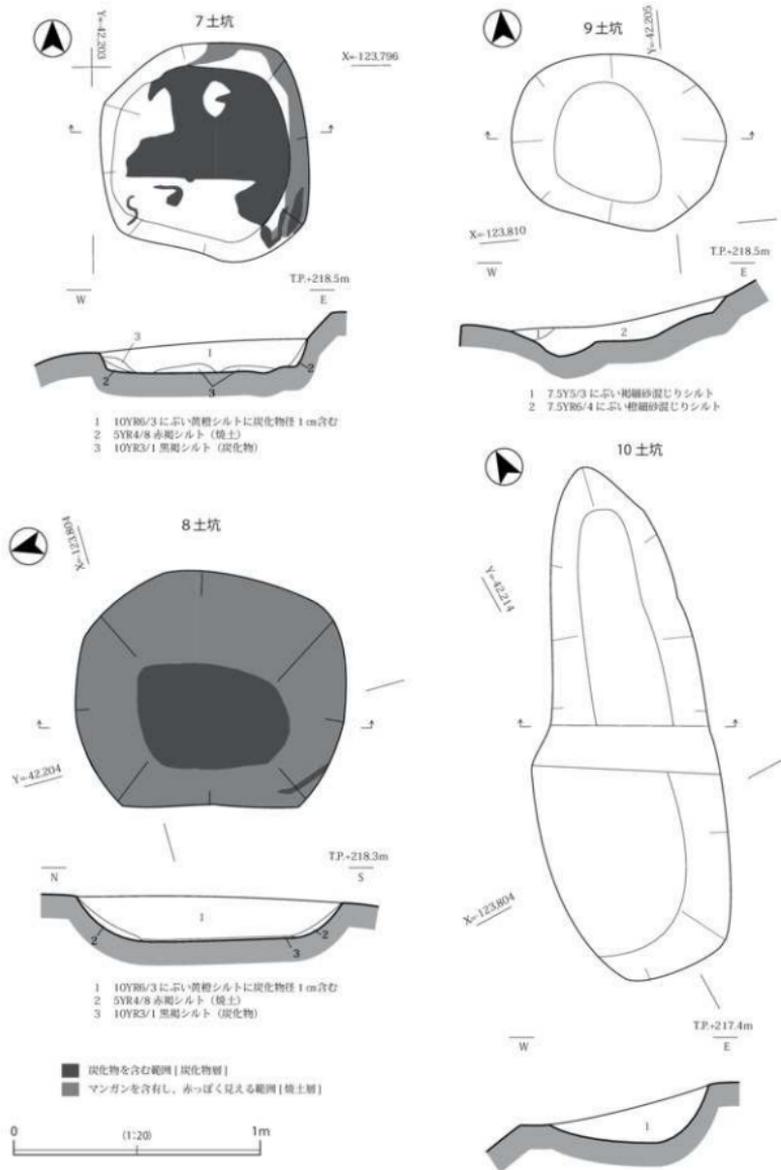
8土坑（第15図） 長径1.1m、短径0.95m、深さ0.2mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は椀形である。当土坑は上層の埋土を除去すると、壁面に焼土がまんべんなく認められ、底部には炭化物が円形に堆積していた。遺物は出土していない。

9土坑（第15図） 長径0.9m、短径0.7m、深さ0.1mをはかる。不整形の土坑である。断面形は皿形であるが、立地条件を反映してか東が高く西が低く、底面が凸凹である。焼土や炭化物が認められなかった。遺物は出土していない。

10土坑（第15図） 長径2.1m、短径0.7m、深さ0.15mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形であるが、立地条件を反映してか東が高く西が低い。10土坑のみ、他の土坑とやや離れた位置で検出され、主軸の方向も北東―南西と他土坑と異なる。埋土も粘質土で、焼土や炭化物が認められなかった。遺物は出



第14図 1区第2面遺構平・断面図(1)



第15図 1区第2面遺構横・断面図(2) 1 7.5YR6/0 粘結性のあるシルト



第16图 2区第3面平面图

土していない。

## 2区第3面の遺構（第16図、写真図版4）

1区と東辺を接する2区は $X = -123,785$ 以北は調査対象でないため、1区の3分の2程度の面積である。南北中心、 $Y = -42,240$ 付近で既存の水路によって分断され、大きくは上下の2段に分かれる。

下段にあたる西半部は、2層を除去すると褐灰色シルト層の3層が全体に広がる。1区東端から急激に落ち込む谷地形となり、2区でより広がったためこの谷に厚く3層が堆積していると考えられる。

上段も $X = -123,810$ 以南では下段と同様の褐灰色シルト層が堆積している。上層を掘削すると $X = -123,810$ 線上で、西から東に伸び、途中で屈曲して南北に伸びる229石列を検出した。229石列の内側にも、人頭大の石が集積する箇所が検出された。

上段の $X = -123,810$ 以北の部分が1区から次第に下降して来て、地山が露出する部分にあたる。3層でもマンガンが多く含まれる層を除去して検出したのが第3面である。

2区上段中心の $Y = -42,230$ 付近になると急激に下降する谷の始まりとなる。この区域で212土坑から222土坑と自然石や岩を検出した。なかでも215土坑は縄文時代中期末の土器が集積した状態で検出され（第18図）、意図的に埋納された遺構と考えられる。

215土坑やその周辺の出土遺物から判断すると、2区第3面は縄文時代の遺構面となる（第61～63図）。ただし、229石列やこれより南や西は、3層が褐灰色シルト層となる。ここから出土する遺物は縄文土器はほぼない。わずかに弥生土器なども含むものの、多くは中世から近世の遺物である（第57図）。

従って、2区の第3面は北東部の縄文時代と考えられる土坑群を検出した区域、遺構面と、それ以外の中世以降と考えられる区域、遺構面と、区域により2つの時期が混在しているといえる。個々の遺構については以下で検討を加える。

229石列（第17図、写真図版7） 2区の東南部、 $X = -123,808$ より南で検出した。約5mは東西の段差に続いて、西を中心とする円が弧を描くように南に伸びていく石



第17図 2区第3面229石列平・立面図

列で、全長は 20 m 以上に及ぶ。

南端は調査区南辺の側溝で分断されるため、実際にはさらに続くと思われる。

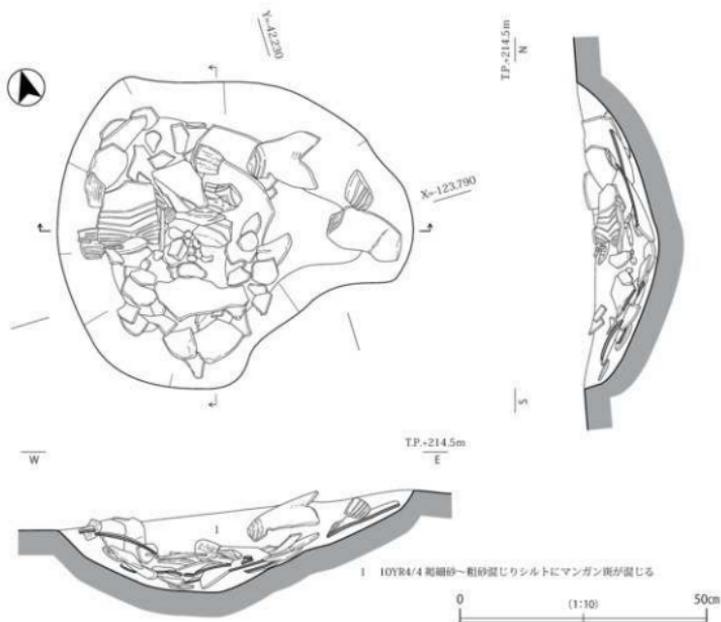
229 石列は小石、礫から握りこぶし大、人頭大のものまで、様々な大きさの花崗岩系の自然石を集積して幅 1.0 m、高さ 0.5 m 弱の堤状の遺構を構築する。石列の上面、下面ともほぼ水平である。229 石列の石は切り出したり、加工したりした痕跡は認められず、周辺の丘陵地から滑落した自然石か、付近の地山中に存在した自然石の集積と考える。

229 石列より西の、円弧より内側の部分では褐灰色シルト層が厚く堆積し、東から西に下降していく。従って、229 石列はこの窪みとも池ともいえる区域と、東の比較的地盤が安定した区域との境界を示すか、護岸的用途をもつ遺構といえる。229 石列の内側、X = -123.814 ライン上でも東西 2 m、南北 1 m の範囲にわたって自然石が 20 ~ 30 個集積した遺構を検出したが、用途や性格は不明である。

229 石列は窪み部分から出土する遺物が瓦器や陶器であることから類推すると、中世前半の 13 世紀から 14 世紀、あるいはそれ以降の遺構と考えられる。

215 土坑 (第 18 図、写真図版 5・7) 2 区の北東部、上段で検出した土坑である。212 土坑から 217 土坑はこの区域に密集して検出された。215 土坑は地山が急激に下降する平坦部ぎりぎりでも検出した。

長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.15 m をはかる。南東部がえぐれた不整形の土坑である。断面形は皿形である。マンガン層上面では遺構が判別しにくかったため、実際はさらに上層から掘り込まれた土坑で、直径、深さともさらに大きかった可能性が高い。これは周辺の他の土坑、213 土坑などと比較しても平面形が小さ



第18図 2区215土坑土器出土状況図

いことから推測できる。

埋土は単一な層なので、一時で堆積したと考えられる。上層のマンガン粒混じりの褐色で砂質が強い細砂からシルト層である。

この土坑からは、第18図のように縄文土器の破片が多数積み重なるような、集積した状態で出土した。出土土器を復元したところ、少なくとも5個体以上の縄文土器深鉢が確認された(第61・62図、写真図版30～33)。しかしながら、最も復元できた個体(81)でも、口縁部付近と胴部の一部しか揃わず底部は存在しない。他の個体も口縁部、もしくは口縁部付近から胴部の途中までの破片である。また、検出状況からも土器口縁部が一定方向を示したり、放射状に広がってはいない。つまり、直立や倒立していた土器が埋納後に土圧で潰れた状況ではない。破損した土器をこの土坑に集めて廃棄したと考えた方が妥当だろう。

215土坑より出土した縄文土器は、すべて縄文時代中期末、北白川C式の深鉢である。215土坑は縄文時代中期末に特定される点からも、遺物の残存状況の良さからも、きわめて良好な一括資料といえる。

周辺の土坑からは時期を特定できる遺物が出土しておらず、他の土坑との関連性は不明である。周辺の包含層中からは縄文時代中期末以前に遡る、縄文時代早期末から前期初頭の土器も出土している。よって、この周辺の2区北東部区域は縄文時代早期末から中期末までの長期間機能していたと考えられる。

212土坑(第19図) 直径0.9m、深さ0.3mをはかる。円形の土坑と思われるが、北側3分の1は調査区外にある。断面形は椀形で、上層のマンガン粒を含む3層が水平に堆積していた。遺物は出土していない。

213土坑(第19図) 長径1.8m、短径1.2m、深さ0.1mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形である。径に比して深さが浅いので、実際はもっと上から掘り込まれていた可能性がある。遺物は出土していない。

214土坑(第19図) 直径0.4m、深さ0.1mをはかる。円形の土坑である。断面形は皿形である。213土坑に近接する。遺物は出土していない。

216土坑(第19図) 調査区の北東端、2区の最上段に位置する。直径1.3m、深さ0.2mをはかる。南西端がくぼんだ不整形の土坑で、断面形は椀形である。217土坑に近接する。遺物は出土していない。

217土坑(第19図) 調査区の北東端、2区の最上段に位置する。直径0.25m、深さ0.05mをはかる。ごく小形の円形土坑で、断面形は皿形である。216土坑西側に近接する。遺物は出土していない。

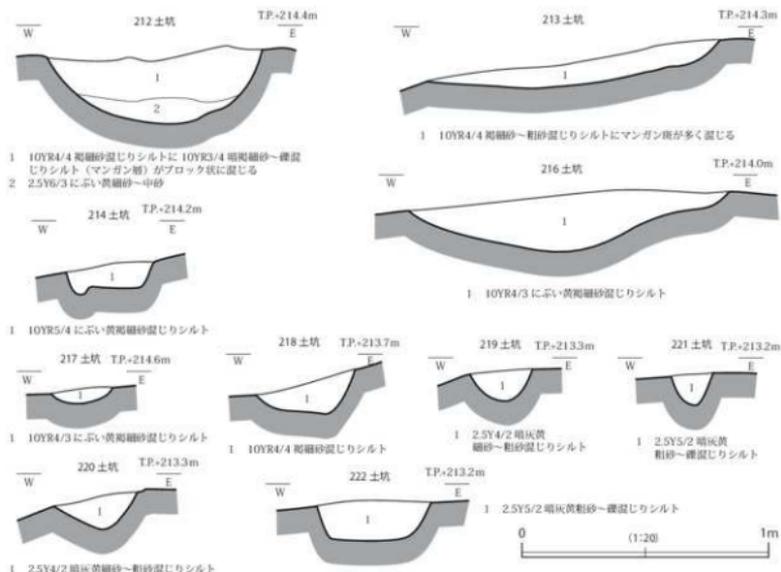
218土坑(第19図) 2区の上段から2段目に位置する。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

212土坑から218土坑に関しては、検出位置から縄文時代の遺構と推測する。

219土坑～222土坑(第19図) 219土坑から222土坑は2区のY—42.240付近を通る側溝より西側、2区の下段に位置する土坑である。西端に側溝に沿うように南北に並ぶ。219土坑は、直径0.2m、深さ0.1mをはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。220土坑は直径0.3m、深さ0.1mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は椀形である。221土坑は直径0.15m、深さ0.1mをはかる。ごく小形の円形土坑である。断面形は椀形である。222土坑は直径0.5m、深さ0.15mをはかる。円形土坑である。断面形は逆台形である。いずれも遺物は出土していない。

219土坑から222土坑に関しては、出土遺物がないため時期決定の決め手を欠く。しかし、検出位置が下段部で、埋土が灰色系シルトであることから、229石列などと相関する、中世の遺構と推測する。

2区第5面を地山まで検出した遺構面とすると、第3面から第5面の間は、3層を少しずつ掘削し遺構を検出することを繰り返したため生じた遺構面であるので、第3面から第5面は近接した時期幅の中におさ



第19図 2区第3面遺構平・断面図

まる。

## 第2項 1区第3面・2区第5面 (第20～27図、写真図版1・2、5・6)

1区では3層をすべて掘削し、調査区の一部をのぞき広範囲で地山を検出した。これを第3面、最終遺構面として、航空測量を実施した。その後、 $X = -123.780 \sim -123.790$ 、 $Y = -42.220$  付近に限られた範囲を掘り下げて遺構 (71 ピット) を検出したため、第4面とした。第4面は第3面で掘削深度が不十分だったところを確認したもので、本書では第4面も第3面に含めて報告する。

2区も東半の上半北側では地山を検出した。1区同様に東から西への傾斜はさらにきつくなる。また、谷に埋積する褐灰色シルトをさらに掘削すると、下段では土坑や溝 (流路) などを検出した。ただし、一部の範囲、つまり上半南側や下段では地山までの検出に至っていない。が、アゼ断面の観察により、第5面より約 1m 下がった T.P. + 212.0 m 前後が地山と考えられる。

2区は第5面を最終遺構面として、航空測量を実施した。1区第3面と2区第5面は遺構を数多く検出し、出土遺物の時期から縄文時代を中心とする遺構面と考えられる。

### 1区第3面の遺構 (第21図、写真図版2)

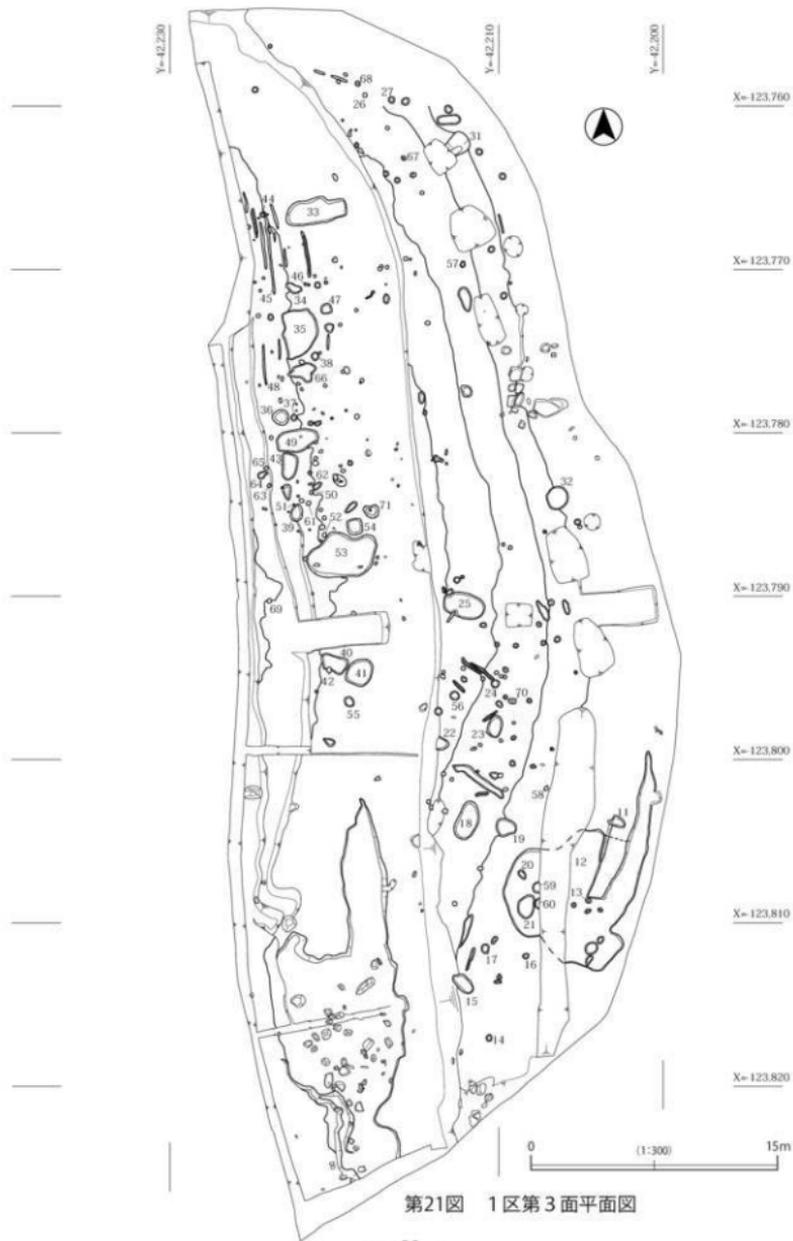
第3面では東から西への傾斜がさらに強くなる。最も高い東南端では T.P. + 218.6 m だが、最も西端中央では T.P. + 215.3 m と 3m 以上の比高差をもつ。調査区の広範囲から土坑、ピット、溝など約 60 の遺構が検出された。なかでも、 $X = -123.800$  以北、 $Y = -42.220 \sim -42.230$  の範囲では遺構が密集する。

遺構・包含層から出土した遺物は主に縄文時代のものである (第59・60図)。よって、1区第3面は縄文時代の遺構面と考えられる。

12 落込み (第22図) 調査区の南東端に大きく広がる不整形の落込みである。不揃いの円形状から北側の



第20图 1区第3面・2区第5面平面图



第21图 1区第3面平面图

み靴形の溝が延びるような形状をとる。円形状部での最大幅 8.0 m、深さ 0.25 mをはかる。12 落ち込みの中に 13・20・21・59・60 ビットが存在する。

60 ビット・59 ビット(第 22 図) 12 落ち込みの中にある。攪乱で東約半分は欠損する。60 ビットは直径 0.6 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mをはかる。円形で、断面形は皿形である。遺物は出土していない。

59 ビットは直径 0.7 m、深さ 0.4 mをはかる。円形である。断面形は逆台形であるが、底面の凹凸が著しい。遺物は出土していない。

21 ビット・20 ビット(第 22 図) 12 落ち込みの中にあり、互いに接する。21 ビットは直径 0.7 m、深さ 0.4 mをはかる。長円形で、断面形は碗形である。遺物は出土していない。20 ビットは直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。長円形で、断面形は U 字形である。遺物は出土していない。

13 ビット(第 22 図) 12 落ち込みの中にある。直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

11 土坑(第 22 図) 12 落ち込みの北側にある。直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。不整形円の土坑である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

18 土坑(第 22 図) 12 落ち込みの北西部、1 段下がった段にある。長径 2.1 m、短径 1.35 m、深さ 0.15 mをはかる。楕円形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

19 土坑(第 22 図) 12 落ち込みの北西、1 段目と 2 段目の段の境界線上にある。そのため当遺構も傾斜が激しい。長径 1.1 m、短径 1.0 m、深さ 0.1 mをはかる。不整形円の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

58 ビット(第 22 図) 12 落ち込みや 19 土坑の北側にある。直径 0.15 m、深さ 0.3 mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は U 字形である。遺物は出土していない。

17 土坑(第 22 図) 12 落ち込みの南西にある。直径 0.45 m、深さ 0.4 mをはかる。長円形の土坑である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

16 ビット(第 22 図) 12 落ち込みの南にある。直径 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

14 ビット(第 22 図) 16 ビットの南、調査区の南端にある。直径 0.35 m、深さ 0.05 mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

15 土坑(第 22 図) 14 ビットの北西にある。長径 1.8 m、短径 0.75 m、深さ 0.15 mをはかる。長円形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

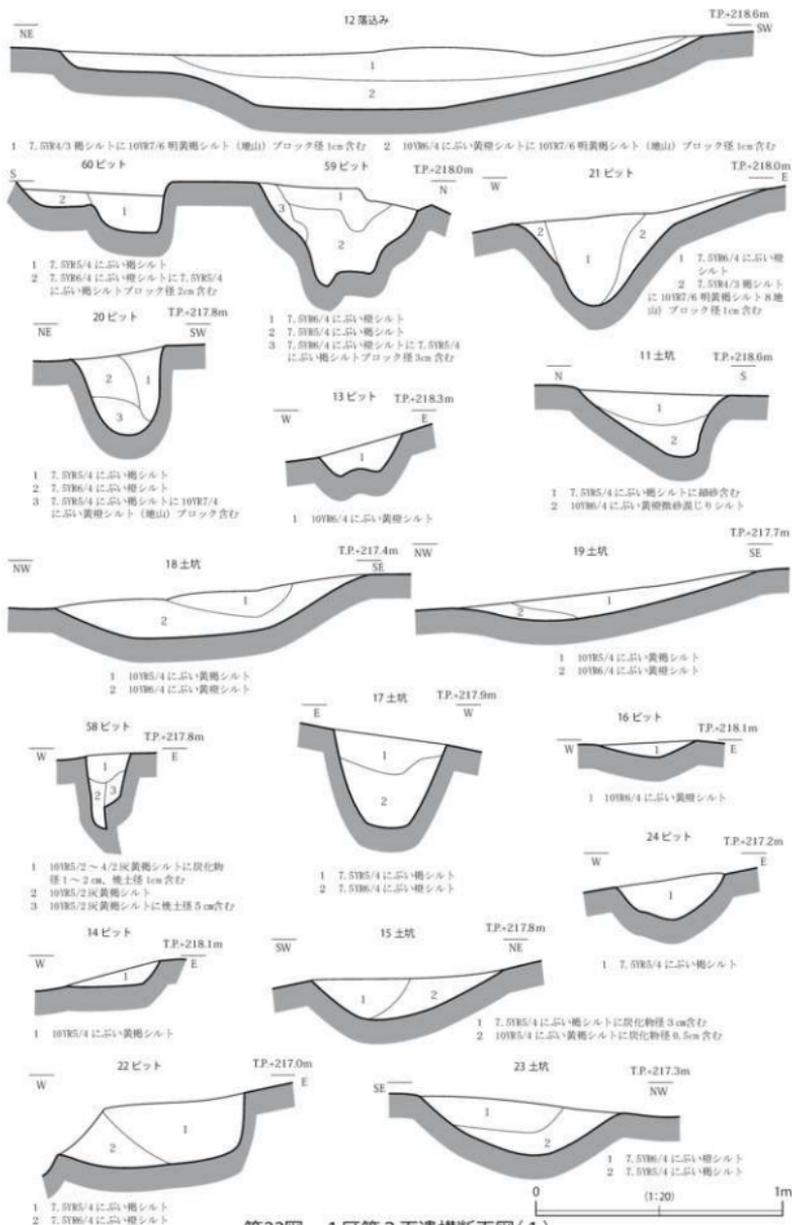
24 ビット(第 22 図) X = -123,790 ～ -123,800 の間、2 段目の段上にある。直径 0.4 m、深さ 0.15 mをはかる。小形の円形である。断面形は碗形である。遺物は出土していない。

22 ビット(第 22 図) 3 段目の段上にあり西半は後世の棚田造成の際に切られる。短径 0.8 m 程度、深さ 0.25 mをはかる。東西に長い長円形と思われる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

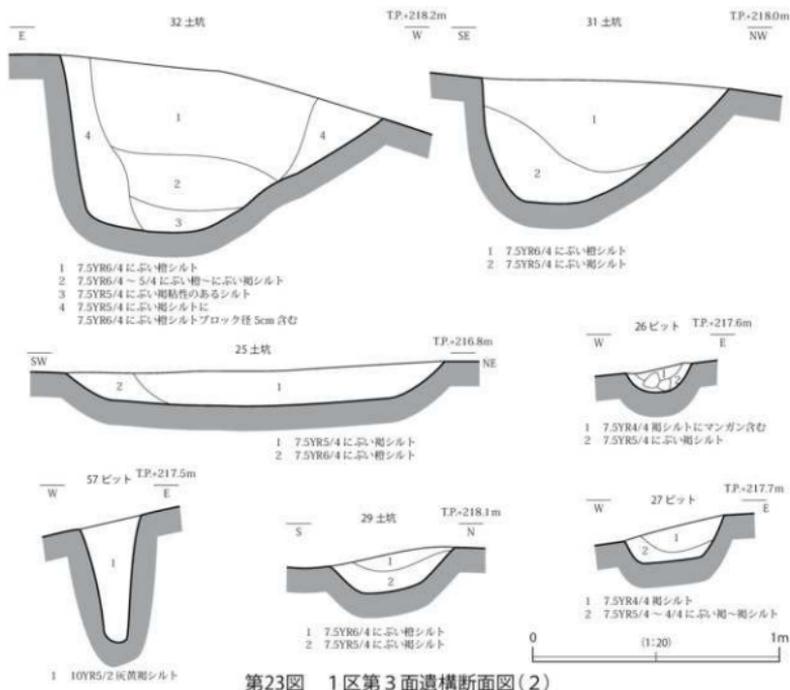
23 土坑(第 22 図) 2 段目の段上、22 ビットの東にある。長径 1.2 m、短径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。南北に長い長円形の土坑である。断面形は碗形である。遺物は出土していない。

32 土坑(第 23 図) X = -123,784、Y = -42,207 付近に存在する。32 土坑のみが他の遺構から離れた、1 段目中央に存在している。直径 1.3 m、深さ 0.7 mをはかる。大形の円形土坑である。断面形は逆台形である。側面には裏込の土が堆積し、中心には 3 層が水平堆積する。遺物は出土していない。

31 土坑(第 23 図) 調査区の北東端にある大形の土坑である。長径 1.2 m、短径 1.0 m、深さ 0.5 mをはかる。



第22図 1区第3面遺構断面図(1)



第23図 1区第3面遺構断面図(2)

隅丸方形の土坑だが、攪乱で西側を切られる。断面形は深い椀形で、遺物は出土していない。

25土坑(第23図) 調査区の中央西端に位置する。長径2.6m、短径1.6m、深さ0.15mをはかる。東西に長い長円形である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

26ピット(第23図) 調査区の北東端にある。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

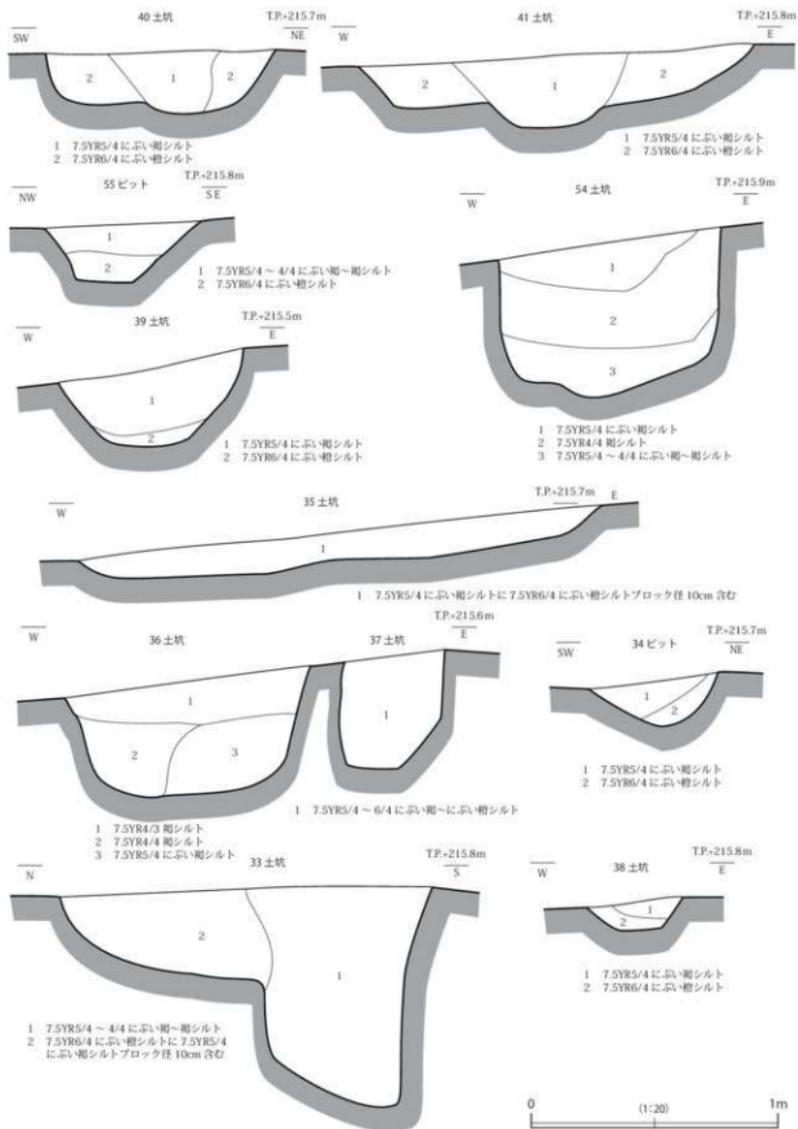
57ピット(第23図) 調査区の北部にある。直径0.25m、深さ0.5mをはかる。ごく小形の円形である。断面形はU字形で、直径に対して深いのが特徴である。遺物は出土していない。

29土坑(第23図) 調査区の北東端、31土坑の北に位置する。長径1.2m、短径0.5m、深さ0.15mをはかる。東西に長い隅丸方形の土坑で、東西軸がほぼ真方位をとる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

27ピット(第23図) 調査区の北東端にある。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。ごく小形の円形である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

40土坑(第24図) 調査区の2段目中央、X=-123.790~-123.800間に位置する。長径1.8m、短径1.0m、深さ0.35mをはかる。南東-北西に長軸をとる隅丸方形の大形土坑だが、42ピットによって南側を切られる。断面形は深い椀形である。遺物は出土していない。

41土坑(第24図) 調査区の2段目中央、X=-123.790~-123.800間の40土坑の東に位置する。長径1.9m、短径1.7m、深さ0.3~0.4mをはかる。不整円形の大形土坑である。断面形は皿形で、中心だ



第 24 図 1 区第 3 面遺構断面図 (3)

けがさらに下がる。石畿が出土した（第58図）。

55ピット（第24図） 調査区の2段目中央、X=-123,790~-123,800間、41土坑の南に位置する。直径0.5m、深さ0.25mをはかる。円形で、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

39土坑（第24図） 調査区の2段目中央、X=-123,780~-123,790間に位置する。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.45mをはかる。南北に長軸をとる不整形の土坑である。断面形は深いU字形である。遺物は出土していない。

54土坑（第24図） 調査区の2段目中央、X=-123,780~-123,790間、53土坑の北に位置する。長径1.0m、短径0.8m、深さ0.65mをはかる。隅丸方形の土坑である。断面形は深いU字形である。遺物は出土していない。

35土坑（第24図） 調査区の2段目北側、X=-123,770~-123,780間に位置する。長径2.8m、短径2.2m、深さ0.1mをはかる。不整形の土坑である。断面形は浅い皿形である。遺物は出土していない。

36土坑・37土坑（第24図） 調査区の2段目北側、X=-123,770~-123,780間に位置する。互いに接する。36土坑は直径1.0m、深さ0.5mをはかる。ほぼ円形の土坑である。断面形は深いU字形である。遺物は出土していない。37土坑は直径0.4m、深さ0.4mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は深いU字形である。遺物は出土していない。

34ピット（第24図） 調査区の2段目北側、X=-123,770~-123,780間に位置する。35土坑の北側にある。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2mをはかる。ほぼ円形の土坑である。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

33土坑（第24図） 調査区の2段目の最北端、X=-123,760~-123,770間に位置する。長辺3.8m、短辺1.6m、深さ0.35~0.9mをはかる。東西に長軸をとる隅丸長方形の土坑である。断面形は西半が浅い楕形であるのに対し、東半は深いU字形を呈する。東半が西半を切るような断面形を呈するので、元来は2つの遺構だったのを一つの遺構として検出した可能性もある。遺物は出土していない。

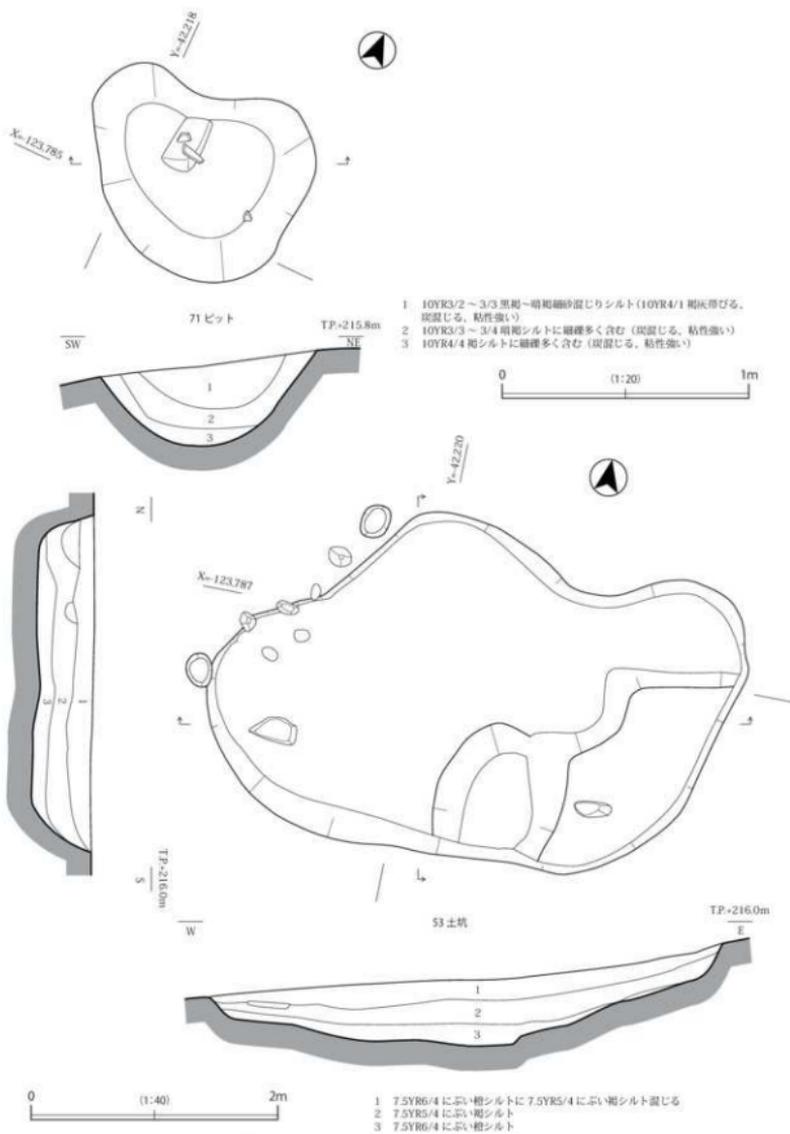
38土坑（第24図） 調査区の2段目北側、X=-123,770~-123,780間、35土坑の南東にある。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。ほぼ円形の土坑で、断面形は皿形である。遺物は出土していない。

71ピット（第25図、写真図版2） 調査区の2段目中央、X=-123,780~-123,790間に位置する。71ピットの周辺のみ3層の堆積が厚かったため、南北10m、東西1、2mの区域を第3面検出後に再掘削した結果、71ピットを検出した。従って、71ピットは1区第3面の中で最も下位に位置する遺構といえる。

長径0.95m、短径0.7m、深さ0.3mをはかる。北西-南東に長軸をとり、北西隅が細くなる不整形である。断面形は楕形である。埋土はピットの形状に沿うように、中心が低く周りが高く3層が累積的に堆積していた。下層は炭混じりとなっており、経年堆積したと考えられる。

71ピットからは遺物が数点出土している。いずれも細片だが、押し引き沈線をもつ縄文時代早期末から前期初頭の縄文土器や、縄文時代中期末の深鉢口縁部などが含まれる（第59図、写真図版33）。時期幅があるが、71ピットは縄文時代中期末以前の遺構と断定できる。

53土坑（第25図、写真図版2） 調査区の2段目中央、X=-123,787~-123,790間に位置する。長径2.1m、短径1.4m、深さ0.25mをはかる。東西に長軸をとる不整形の土坑で、南東部は段をもちくぼむ。断面形は浅い楕形もしくは皿形である。埋土は3つの層に分層できるがいずれも3層に類似し、水平に堆積する。縄文時代早期末から前期初頭の土器胴部片が出土している（第59図、写真図版33）。53土坑は縄文時代早期末から前期初頭の遺構と考えられる。71ピット、53土坑に位置的に近い49土坑、52ピットからも縄文



第25図 1区第3面遺構・断面図



第26图 2区第5面平面图

土器が出土している（第59図、写真図版30）。

以上のように、1区第3面ではいくつかのまとまりをもって、遺構が多数検出された。遺物が出土するのは中央部に集中し、時期は縄文時代早期末から中期末に限定される。よって、縄文時代の遺構面とする。

## 2区第5面の遺構（第26図、写真図版5・6）

第5面では高い部分の北東部から中央にかけての掘削をさらに進め、地山を検出した。その結果、東から西への傾斜がさらに強くなる。最も高い東端中央ではT.P. +214.7mだが、最も低い西南端ではT.P. +213.2mである。調査区の高い区域から土坑、ピットなどを検出した。また、西南部のシルト層をさらに掘削したところ230溝（自然流路か）を検出した。2区の第5面も第3面と同じく西南部は中世以前、北東部から中央にかけては縄文時代の遺構面と考える。

223土坑（第27図） 調査区の東側、X = -123,795、Y = -42,232に位置する。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

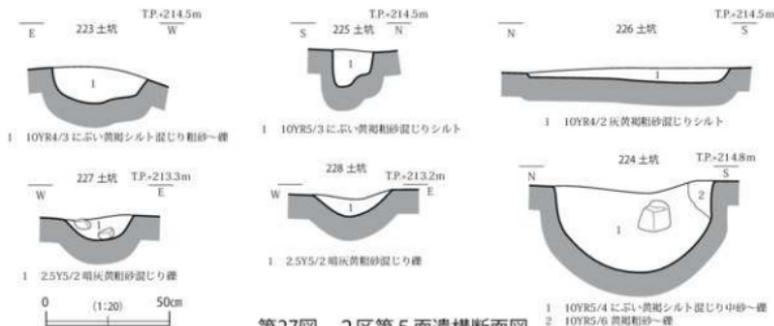
225土坑（第27図） 調査区の最北に位置する。直径0.15m、深さ0.15mをはかる。ごく小形の円形である。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

226土坑（第27図） 調査区の北部、225土坑より7m南下して位置する。直径0.8m、深さ0.05mをはかる。円形土坑で東側は調査区外にある。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

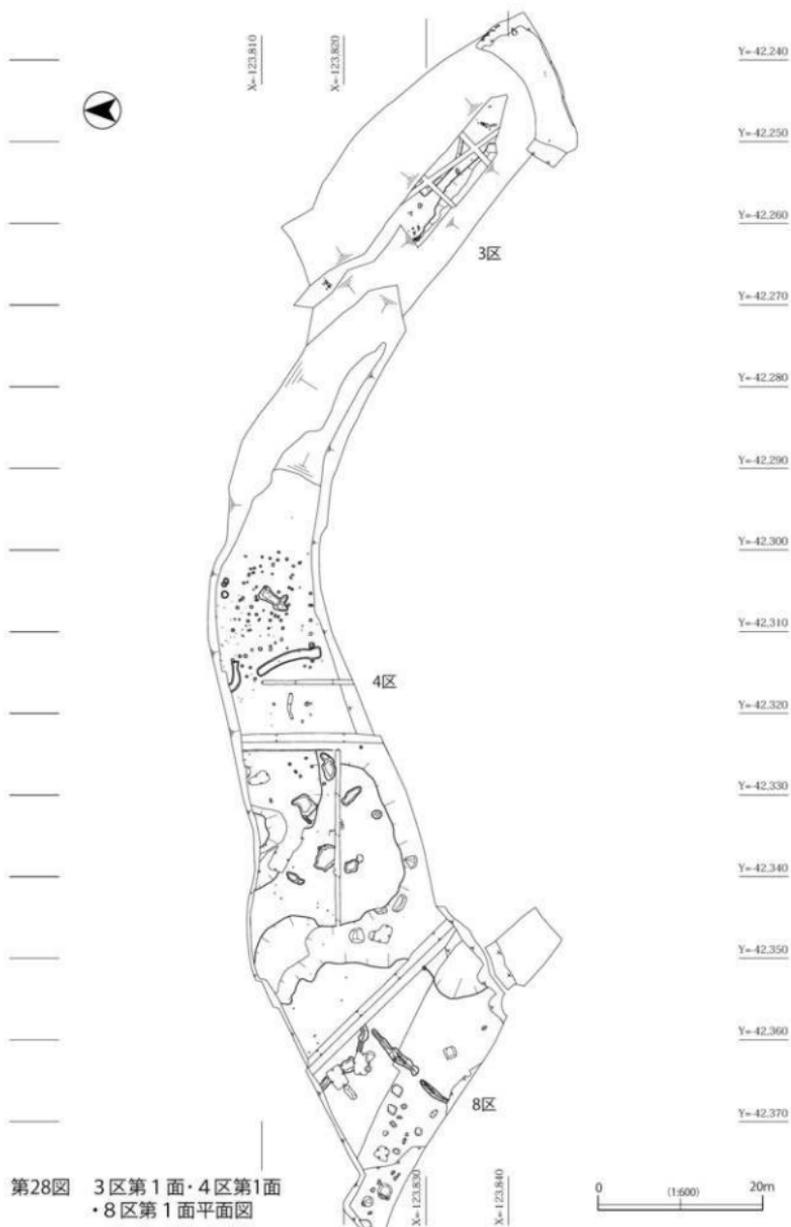
227土坑・228土坑（第27図） 調査区の下段中央、X = -123,800付近に位置する。互いに接する。227土坑は直径0.25m、深さ0.1mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。228土坑は直径0.3m、深さ0.05mをはかる。小形の円形土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

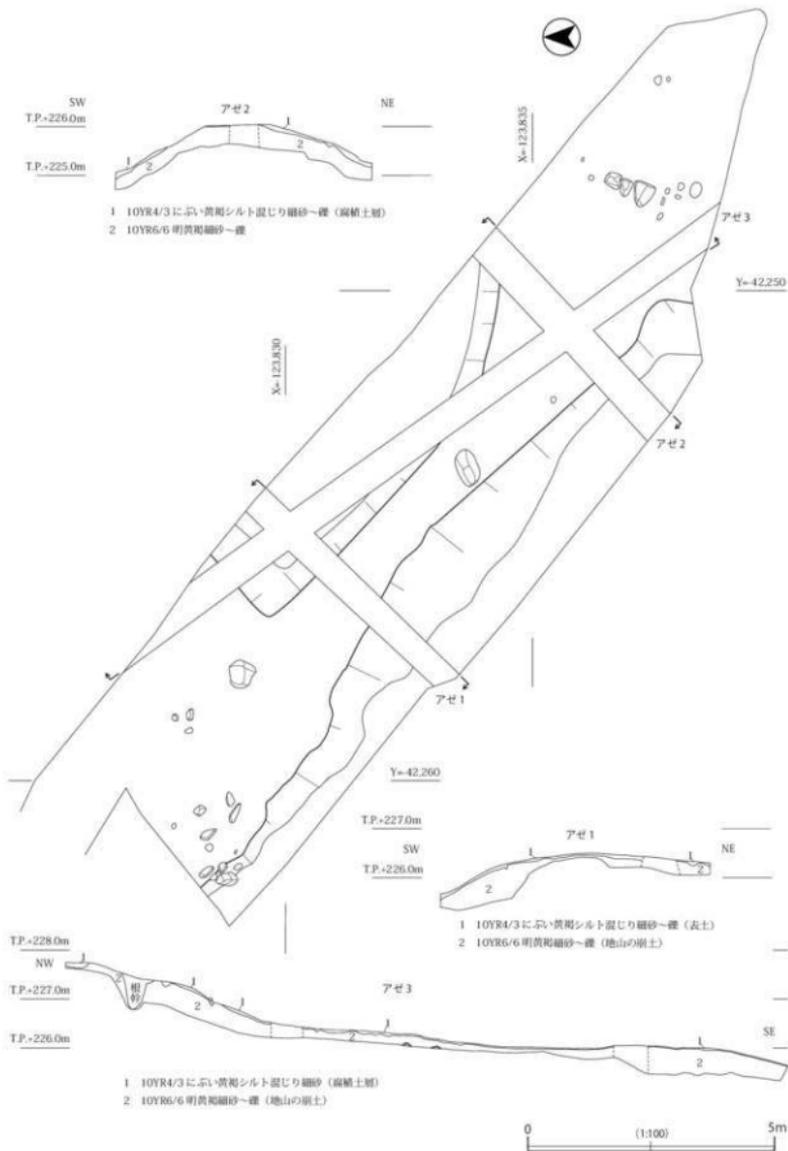
224土坑（第27図） 調査区の東端中央、X = -123,799付近に位置する。長径0.8m、短径0.4m、深さ0.3mをはかる。円形土坑で東側は調査区外にある。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

230溝（第26図） 調査区の南西隅を東から西に流れる溝である。蛇行するように伸びるので、人為的な溝というより自然流路と考えた方がよいかもかもしれない。調査区外の南側に水源があったのだろうか。長さ16m、幅2.8m、深さ0.5mをはかる。遺物が出土せず、中世以前の遺構としか推測できない。



第27図 2区第5面遺構断面図





第 29 図 3 区第 1 面上段平面図・アゼ断面図

## 第2節 中央部（3～8区、13区）の遺構

### 第1項 3区第1面・4区第1面・8区第1面（第28～36図、写真図版8～11）

中央部とは第2章で調査区を大きく東部、中央部、西部と3つに分けた分け方を踏襲し、3区、4区、5区、6区、7区、8区、13区を指す。

中央部はさらに細分できる。東部と中央部を隔てる山の頂部の3区は独立している。その山の山裾から西に広がる丘陵部が4区で、4区の西端から落ちる谷部分が8区である。4区と8区は遺構のつながりから連続した区域と捉えた。4区の南の谷にあたるのが5区と6区である。さらにその南、谷から南側の山にあがる丘陵部が7区である。この小単位で遺構面、遺構の説明を行う。13区は8区の東、5・6区と7区に挟まれた位置で、遺構のつながり具合に応じて5・6区と7区のどちらかで説明する。

#### 3区第1面の遺構（第29図、写真図版8）

3区は1・2区と4区に挟まれた山頂にあたる。当初は、この山のほとんどが調査区として設定されていたが急峻で安全管理上、山頂部の主に東側と、調査区東端平坦部の2箇所のみで調査範囲を狭めた。

山頂部は東半が幅5m、長さ20m、面積にして約100㎡である。東半に東西方向に1本、南北方向に2本のアゼを設定して、表土を徐々に掘削することとした。西半は幅2m程度で面積が狭いため、アゼは設定せずに北端の設置柵のための壁を利用して断面観察を行い、表土を掘削した。

山頂部西半はT.P. + 225.0～228.0mの高さで西から東に下降する地形をとる。急峻なため堆積は進まず、0.2～0.5m掘削すると地山が露出した。堆積していたのは地山が崩れ風化した花崗岩のバイラン土である。北側や南側へ傾斜していく自然地形や自然石などが検出されたが、顕著な遺構は検出できなかった。

東端の平坦部では機械掘削を終えると灰色シルト層（3層上面）の遺構面に相当する面が検出された。石垣を造成した際の攪乱などが南北両端にもつが、顕著な遺構はみあたらなかった。平面の高さは、およそT.P. + 219.7～219.9mである。

遺物は緑釉陶器片（第64図・写真図版36-104）と瓦器片のみである。そのため時期は決定しがたい。

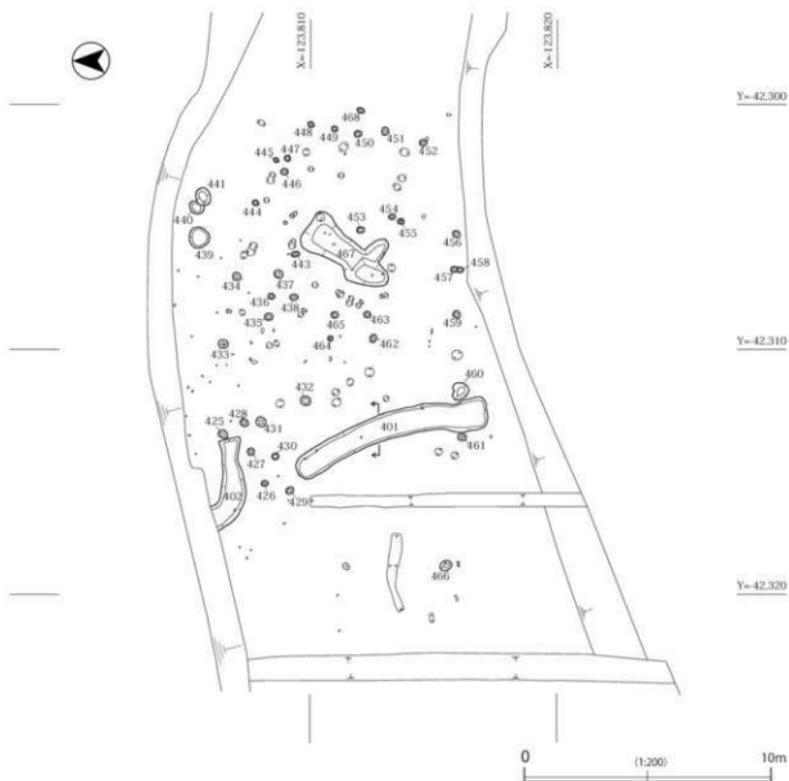
#### 4区第1面の遺構（第30～36図、写真図版9・10）

4区は東西に細長い調査区である。およそY = -42,268～-42,374間の106mにわたって東西に広がる。南北幅は東が狭く、西が広い。最小幅が約8m、最大幅が24mである。東端から3分の1、約30mの東部は3区を山頂とする山裾が広がってきていて、地山がすでに露出している。従って、調査はそれより西に限定して行った。

Y = -42,300～-42,355の区域を中央部とし、これをさらに、Y = -42,324ラインで設けた南北アゼを境に堆積状況が変わることから中央東部、中央西部とした。Y = -42,355より東は谷地形となり、8区につながる。これを西部とする。中央部では2面、西部では4面と各区域によって調査遺構面数が異なるが、本報告では整理して2遺構面として報告する。第2面で航空測量を実施した。

機械掘削終了時の高さは中央東部でT.P. + 222.9m、中央西部でT.P. + 222.9～223.7m、西部でT.P. + 221.5mである。調査区中央東部では溝、土坑、ピットなどを2面にわたって多数検出した。

401溝（第31図）X = -123,810～-123,817、Y = -42,313付近で検出した。長方形の溝だが、やや湾曲する。長さ8.0m、幅1.1m、深さ0.2mをはかる。断面形は皿形で、埋土はシルトがブロック状に含まれており、人為的な埋め戻しがあったことがうかがえる。遺物は出土していない。中央東部の遺構群が一連の関係をもつ柱穴、柵列などならば、この401溝が西端を区画する溝と考えられる。



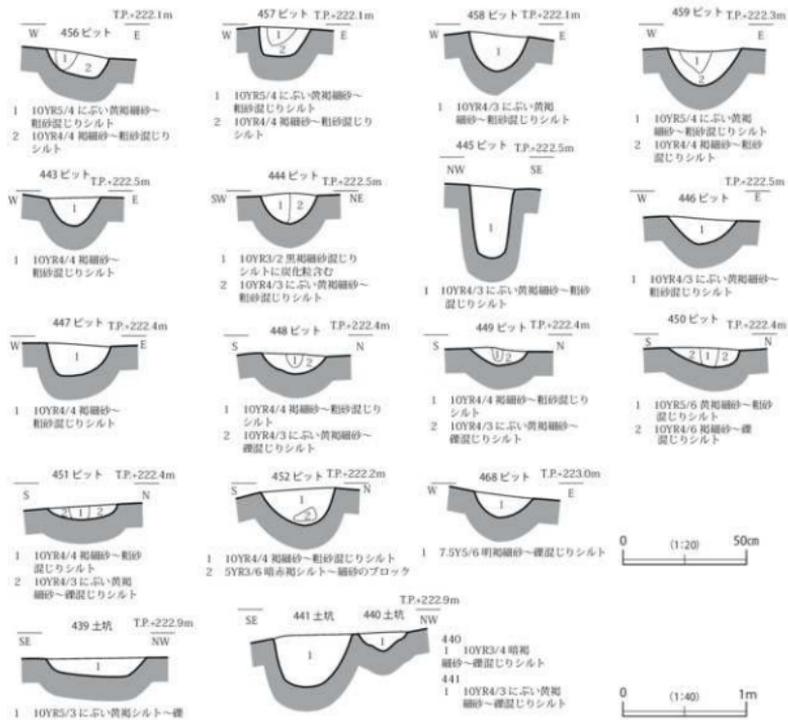
第30図 4区第1面中央東部平面図

460ピット・461ピット(第31図) 460ピットは401溝の南東端に隣接する不整形のピットである。直径0.65 m、深さ0.15 mをはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。461ピットは401溝の南西端に隣接する小形の円形ピットである。直径0.25 m、深さ0.25 mをはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

425ピット・428ピット・431ピット(第31図) 調査区の北端、402溝の東端に位置する。425ピットは不整形のピットである。直径0.35 m、深さ0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。428ピットは円形のピットである。直径0.3 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は皿形で、遺物は出土していない。431ピットは402溝の南東端に位置する。小形の円形ピットである。直径0.4 m、深さ0.15 mをはかる。断面は椀形である。遺物は出土していない。

426ピット・427ピット(第31図) 426ピットは調査区の北端、401溝と402溝の間に位置する。円形のピットである。直径0.2 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。427ピットは426ピットの北東に位置する。円形のピットである。直径0.25 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は逆台形で





第32図 4区第1面中央東部遺構断面図(2)

ある。遺物は出土していない。

429ピット(第31図) 401溝の北西端に位置する。小形の円形ピットである。直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

430ピット(第31図) 401溝の北東端に位置する。小形の円形ピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

432ピット(第31図) 402溝の南東端に位置する。X=-123.810、Y=-42.312で検出した。小形の円形ピットである。直径0.4m、深さ0.15mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

435ピット・436ピット・437ピット・438ピット(第31図) 435ピットはX=-123.808、Y=-42.309で検出した。小形の円形ピットである。直径0.3m、深さ0.2mをはかる。断面形は椀形である。436ピットは435ピットの北に位置する。円形のピットである。直径0.25m、深さ0.15mをはかる。断面形は椀形である。437ピットは436ピットの東に位置する。円形のピットである。直径0.3m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形である。いずれも遺物は出土していない。438ピットは437ピットの南西に位置する。円形のピットである。直径0.2m、深さ0.15mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

433ピット(第31図) X=-123.807、Y=-42.310で検出した。小形の円形ピットである。直径0.3

m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

434ピット(第31図)  $X = -123,809, Y = -42,307$ で検出した。小形の円形ピットである。直径0.35m、深さ0.2mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

464ピット・465ピット(第31図) 464ピットは $X = -123,811, Y = -42,310$ で検出した。小形の円形ピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。465ピットは464ピットの東に位置する。円形のピットである。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

462ピット・463ピット(第31図) 462ピットは464ピットの南に位置する円形のピットである。直径0.35m、深さ0.15mをはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。463ピットは462ピットの東に位置する円形のピットである。直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は楕形で、遺物は出土していない。

466ピット(第31図) 調査区中央部では最も西端、 $X = -123,815, Y = -42,319$ で検出した。円形のピットである。直径0.4m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

467落込み(第31図)  $X = -123,810 \sim -123,813, Y = -42,304 \sim -42,307$ 付近で検出した。不整な長方形の落ち込みで、南西部は2段の落込みとなる。長さ4.0m、幅0.4m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形で、遺物は出土していない。

453ピット(第31図) 467落込みの東に位置する。小形の円形ピットである。直径0.25m、深さ0.15mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

454ピット・455ピット(第31図) 453ピットの南東に位置する。454ピットは円形のピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。455ピットは円形のピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

456ピット(第32図) 455ピットの南に位置する。円形のピットである。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

457ピット・458ピット(第32図) 456ピットの南に位置し、互いに隣接する。457ピットは円形のピットである。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。458ピットは円形のピットである。直径0.2m、深さ0.15mをはかる。断面形は楕形で、遺物は出土していない。

459ピット(第32図) 457・458ピットの西に位置する。円形のピットである。直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

443ピット(第32図) 467落込みの北西隅に位置する。楕円形のピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

444ピット(第32図) 467落込みの北東に位置する。円形ピットである。直径0.2m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

445ピット(第32図) 遺構群の最東端に位置する。円形のピットである。直径0.2m、深さ0.3mをはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。

446ピット・447ピット(第32図) 446ピットは445ピットの南西に位置する。円形のピットである。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。断面は楕形で、遺物は出土していない。447ピットは446ピットの南に位置する。円形のピットである。直径0.25m、深さ0.1mをはかる。断面形は楕形で、遺物は出土していない。

448ピット・449ピット・450ピット・451ピット・452ピット(第32図、写真図版11) 448ピットは



第33図 4区第1面中央西部平面図

円形のピットである。直径0.25 m、深さ0.1 m弱をはかる。断面は皿形で、中心に径0.05 mの柱痕がある。遺物は出土していない。449 ピットは円形のピットである。直径0.25 m、深さ0.1 m弱をはかる。断面形は皿形で、中心に径0.05 mの柱痕がある。遺物は出土していない。450 ピットは円形のピットである。直径0.3 m、深さ0.1 m弱をはかる。断面形は皿形で、中心に径0.1 mの柱痕がある。遺物は出土していない。451 ピットは円形のピットである。直径0.3 m、深さ0.05 mをはかる。断面形は皿形で、中心に径0.1 mの柱痕がある。

遺物は出土していない。452ピットは円形のピットである。直径0.3 m、深さ0.15 mをはかる。断面形は椀形である。中心に柱痕は認められなかった。遺物は出土していない。

448ピットから451ピット、あるいは452ピットまでは約1 mの等間隔でほぼ一列に並ぶこと、中心に柱痕をもつことなどから柵列などだった可能性が高い。

468ピット(第32図) 上記のほぼ一列に並ぶピット群の東、449ピットと450ピットの間に位置する。円形のピットである。直径0.2 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

439土坑(第32図) 中央北端の $X = -123,805$ 、 $Y = -42,306$ で検出した。円形土坑である。直径0.8 m、深さ0.15 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

441土坑・440土坑(第32図、写真図版11) 互いに隣接する。441土坑は円形土坑である。直径0.6 m、深さ0.4 mをはかる。断面形はU字形である。遺物は出土していない。440土坑は円形土坑である。直径0.4 m、深さ0.15 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

中央東部は遺構、包含層共に遺物がほとんど出土していないので、明確な時期は不明である。しかし、遺構(ピット)の大きさや形状から中世の遺構ではないかと推察する。明確な建物などは復元できなかったが、遺構の密集度やピットと溝の組み合わせという遺構の性格、柵田が形成されるシルト層ではなく平坦な丘陵地に立地するなどの条件から、耕作地ではなく集落などの性格が濃いと考える。

中央西部とは $Y = -42,327 \sim -42,355$ の区域を指す。北側の山裾が張り出してきて南に円弧を描くように延びる丘陵の山頂を平らに削った形になっている。中央東部より高く、この丘陵部において試掘調査が行われた際は、縄文土器が出土した。今回の調査では大形の土坑やピットなどを検出した。

411土坑(第34図、写真図版11) 北西部で検出した楕円形の土坑である。長径2.5 m、短径0.7 m、深さ0.2 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

412落込み(第34図) 調査区の中央にあり、 $X = -123,820$ ラインを通る側溝に切られる。長辺2.8 m、短辺2.3 m、深さ0.3 mの不整形の土坑である。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

413土坑(第34図、写真図版11) 412落込みの南にある。一辺1.5 m、深さ0.45 mの隅丸方形の土坑である。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

414土坑(第34図) 調査区の南端にある。長径1.3 m、短径0.4 m、深さ0.35 mをはかる。円形の土坑である。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

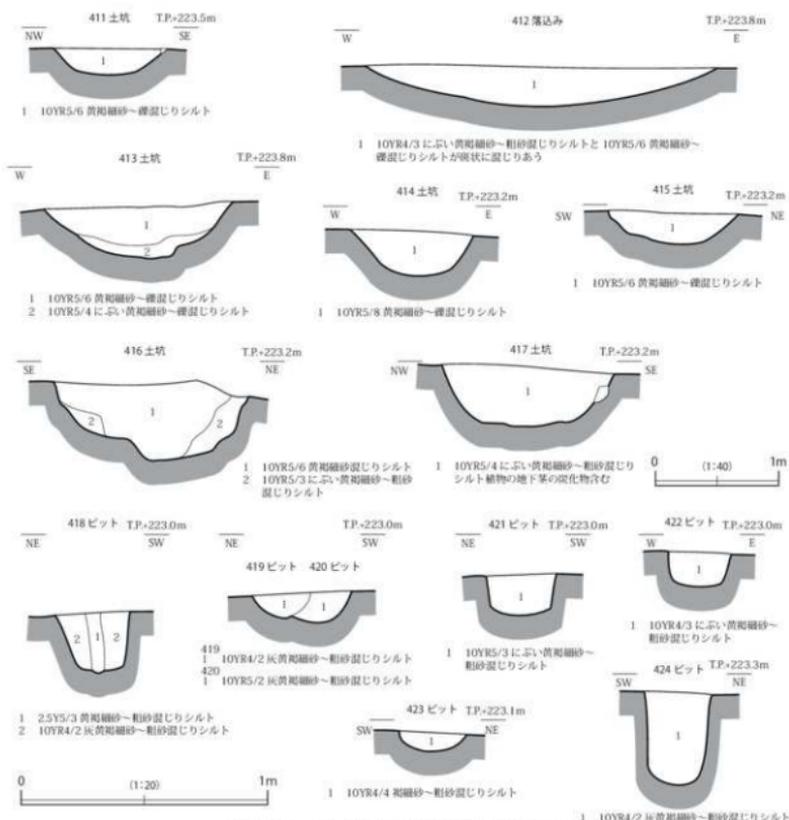
415土坑(第34図) 調査区の南東端にある。楕円形の土坑である。長径3.0 m、短径1.0 m、深さ0.2 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

416土坑(第34図、写真図版11) 調査区の北東にある。不整形の土坑である。長辺2.7 m、短辺1.5 m、深さ0.6 mをはかる。断面形は椀形で、底面、側面の凹凸が著しい。遺物は出土していない。

417土坑(第34図、写真図版11) 調査区の東端にある。不整形の長円形の土坑である。長径3.4 m、短径1.4 m、深さ0.5 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

418ピット(第34図) 418ピットから423ピットは中央西部の北東端で検出されたいずれも小形の円形土坑である。418ピットは直径0.3 m、深さ0.25 mをはかる。断面形はU字形で中心に直径0.05 mの柱痕をもつ。遺物は出土していない。

419ピット・420ピット・421ピット(第34図) 419ピットと420ピットは切り合い関係をもつ。419ピットは直径0.2 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は椀形で、遺物は出土していない。420ピットは直径0.3 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。421ピットは直径0.3 m、深さ0.15 m



第34図 4区第1面中央西部遺構断面図

をはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。418 から 421 ビットは一直線上に並ぶ。

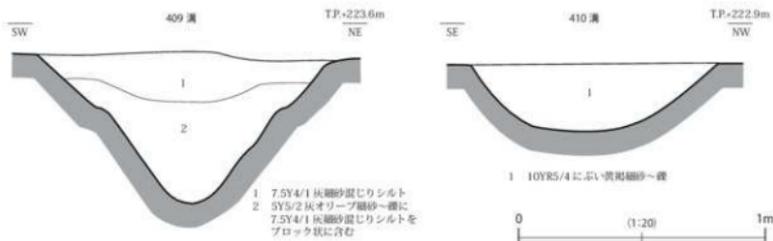
422 ビット・423 ビット (第 34 図) 422 ビットは直径 0.25 m、深さ 0.15 m をはかる。断面形は逆台形で、遺物は出土していない。423 ビットは直径 0.25 m、深さ 0.08 m をはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。422・423 ビットは一列になり、418 から 421 ビット列に 2 m 離れて並行になる。

418 ビットから 421 ビットは約 1 m の間隔で北東-南西を長軸として一列に並び、421 ビットから直角の位置に 2 m 離れて 423 ビットが、さらに直角に北東 1 m 強の位置に 422 ビットが並び「コ」形を示す。柱痕が確認できるもの (418 ビット) や切り合い関係をもつもの (419・418 ビット) もあり、何らかの構造物があったと考えられる。ただし、北東側でビットを確認できず、柱間隔も建物とするには狭い。大形の土坑群のある丘陵部より低い平坦部に立地し、中央東部でみられたビットや土坑、溝などの遺構群に関連すると考える。

424 ビット (第 34 図) 417 土坑の北西隅に位置する。小形の円形土坑である。直径 0.3 m、深さ 0.35 m をはかる。断面形は U 字形である。遺物は出土していない。



第35図 4区第1面西部・8区第1面平面図



第36図 4区第1面西部遺構断面図

4区第1面西部と8区の第1面は、4区の中央西部の丘陵から急激に谷となって下降する、谷に堆積した3層灰色シルト層の最上面である。ほぼ直角に接する溝2条を検出した(第35図、写真図版9)。

また、丘陵部の裾すくにあたる $X = -123.820$ 以東、 $Y = -42.350 \sim -42.360$ の間で宋銭6枚(第66図145～150、写真図版46)と石鉄1点(第67図164、写真図版43)が出土した。

409溝(第36図、写真図版11) 正方位から45度角度を振って、北西から南東に伸びる溝である。2つの攪乱に切られるが、攪乱付近で角度を変えておおむね東に延びる。現存長約9.0m、幅1.0～1.5m、深さ0.6mをはかる。断面形はV字形を呈する。

410溝(第36図、写真図版11) 南西から北東の東西方向に延びる溝である。現存長おおむね13.0m、幅1.0m、深さ0.25mをはかる。断面形は椀形を呈する。410溝からは土師器杯が出土した(第64図101)。410溝は409溝と直角に位置することや規模や形状が似ることから、両者は相関性があると考えられる。この区域が明確な水田とは決定できないが、水路などの耕作に伴う遺構と考える。

この第1面は層中から出土した宋銭などにより、中世前半期、12世紀から14世紀半ばの年代が与えられる。

## 第2項 4区第2面・8区第4面(第37～39図、写真図版9～11)

4区中央東部、中央西部とも第1面の3層を掘削したところ、ほぼ地山を検出した。

中央東部の北側は山裾に沿って、弧を描くように段がつき、下段でピットを数基検出した(第38図)。中央西部も山頂部はほぼ平らとなり、溝状の遺構などが検出される。4区の西部から8区にかけては西へとさらに低くなり足跡なども部分的にみられるが、山から滑落した自然石や礫が広範囲に検出された。

### 4区第2面の遺構(第39図、写真図版9・10)

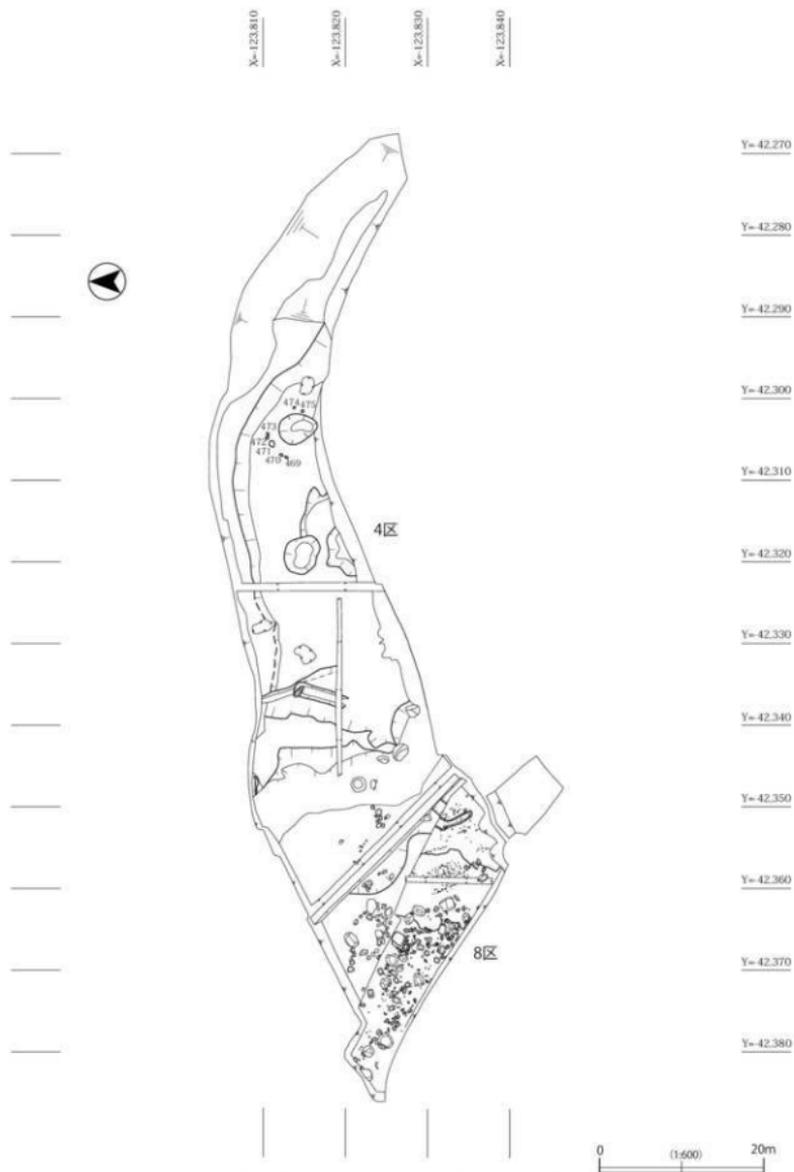
4区の中央東部では上述の北側の段地形のほか、大形の土坑や落込みを検出したが、自然地形と判断した。遺構としては、大形のくぼみを囲むように並ぶ469から475のピットがある。

469ピット(第39図) 469ピットは最西のピットで、 $X = -123.813$ 、 $Y = -42.307$ 付近に位置する。楕円形のピットである。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

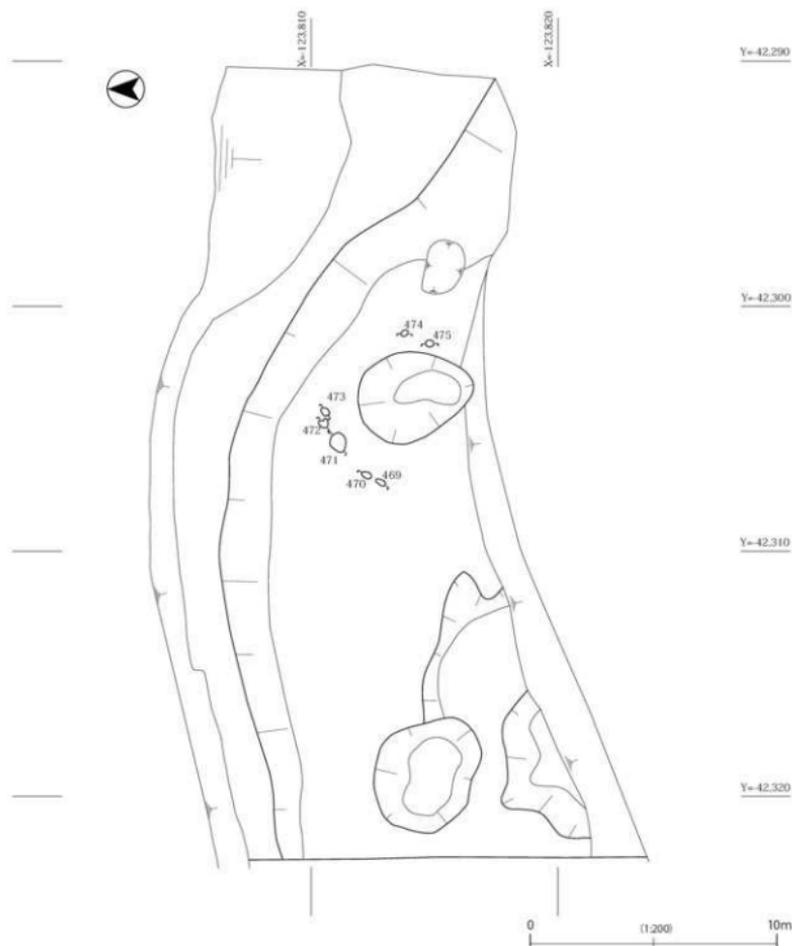
470ピット(第39図) 469ピットの北東にある。楕円形のピットである。長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

471ピット(第39図) 470ピットの北東にある。不整形の大形ピットである。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.2mをはかる。断面形は椀形である。遺物は出土していない。

472ピット・473ピット(第39図) 471ピットの北東にある隣接するピットである。472ピットは不整形の楕円形のごく小形のピットである。直径0.35m、深さ0.1mをはかる。断面形は椀形である。473ピットも不



第37图 4区第2面·8区第4面平面图



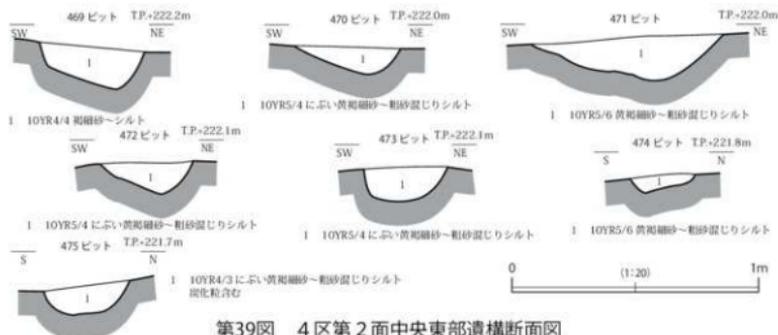
第38図 4区第2面中央東部平面図

整円形のごく小形のピットである。直径0.3 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は楕形である。いずれも遺物は出土していない。

474ピット（第39図） 調査区の東端にある。円形のごく小形のピットである。直径0.25 m、深さ0.05 mをはかる。断面形は皿形である。遺物は出土していない。

475ピット（第39図） 474ピットの南西にある。ごく小形の円形ピットである。直径0.35 m、深さ0.1 mをはかる。断面形は楕形である。遺物は出土していない。

4区は北側の山裾部分では縄文時代早期末、前期、晩期などの土器が破片であるが複数出土している（第



第39図 4区第2面中央東部遺構断面図

63 図、写真図版 35)。縄文時代の土器の出土は 1・2 区を除いてはこの 4 区に限られる。遺構は検出されていないが、おそらく 4 区北側の山などの高い区域に縄文時代の生活痕跡があったと考えられる。

また、主に 4 区の中央東部で検出された遺構群は明確な時期決定はできないが、中世の集落などに関連する遺構と考えられる。1・2 区で縄文時代の遺構を検出した以外は、5 区より南西では谷部分に形成される棚田などの生産遺構がほとんどであるのを考慮すると、4 区が、これより北に生産遺構に伴う居住域が広がっていたことを示す、貴重な資料である。

### 第3項 5区第1面・6区第1面・13区第2面（第40～42図、写真図版12・14・15・29）

4 区の南側に並行して位置する 5 区と 6 区は、調査の工程上 2 つに分割されたが、4 区と 7 区の東側の山に挟まれた谷にあたる、一連の区域として捉えられる。また、13 区は 6 区と 7 区に挟まれ、谷地形の続きである（第 6 図参照）。5・6・13 区とも機械掘削後、3 面にわたって調査を行った。そこで、当項では対応する 5 区第 1 面、6 区第 1 面、13 区第 2 面を 1 つの平面図とした（第 40 図）。

5 区の第 1 面と 6 区の第 1 面はいずれも機械掘削で盛土等を除去し、3 層上面を検出した遺構面である。13 区は機械掘削以後も西側を若干掘削して第 2 面とし、5 区、6 区の第 1 面にそろえた。

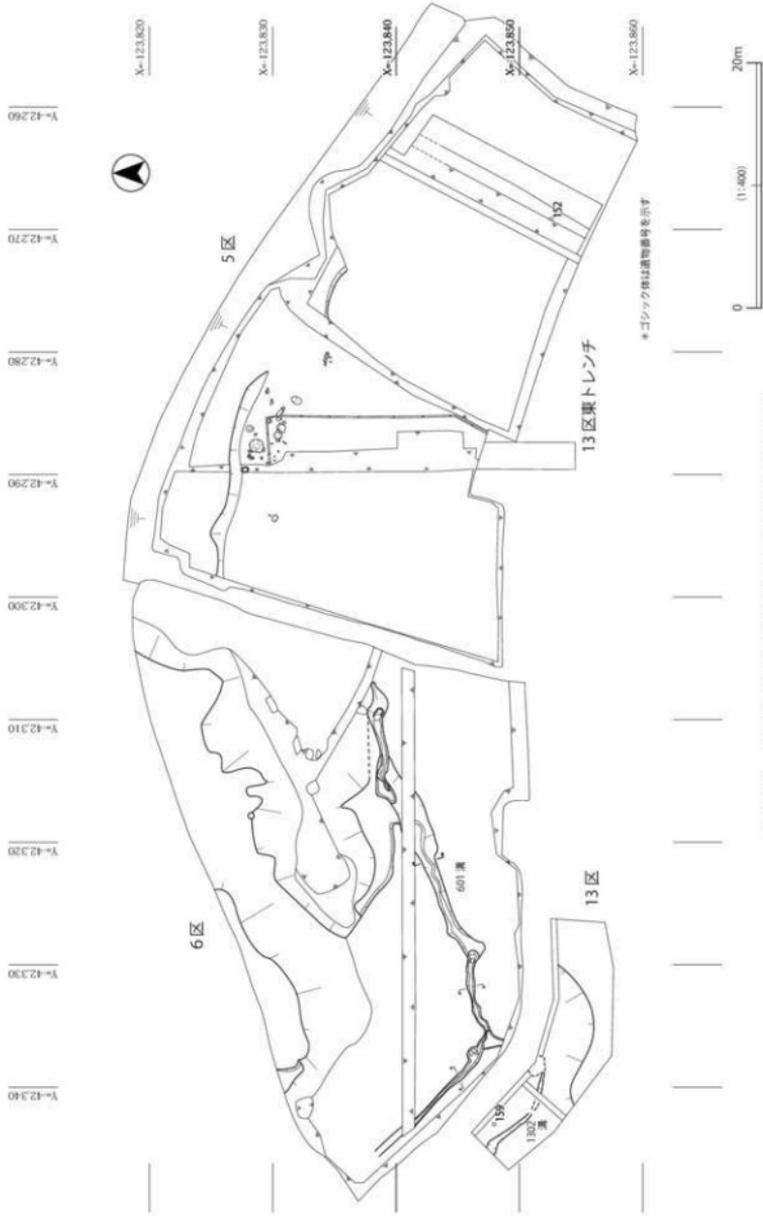
第 1 面の標高は、5 区では  $Y = -42,290$  より西北側で  $T.P. + 220.5 \text{ m} \sim + 220.8 \text{ m}$ 、南西側で  $T.P. + 219.9 \text{ m}$ 、 $X = -123,840$ 、 $Y = -42,270$  付近で  $T.P. + 219.2 \text{ m}$ 、 $X = -123,840$ 、 $Y = -42,280$  付近で  $T.P. + 218.9 \text{ m}$ 、北東側で  $X = -123,850$ 、 $Y = -42,260$  付近で  $T.P. + 218.5 \text{ m}$ 、南東側で  $T.P. + 218.3 \text{ m}$  である。

6 区では、第 1 面の標高は西北 601 溝の始点辺りで  $T.P. + 221.2 \text{ m}$ 、601 溝と東西アゼが交差する  $X = -123,840$ 、 $Y = -42,320$  付近で  $T.P. + 220.7 \text{ m}$ 、5 区との境界にあたる南西側で  $T.P. + 220.0 \text{ m}$ 、地山から 3 層に変わる  $Y = -42,330 \sim -42,320$  ラインで  $T.P. + 220.7 \text{ m} \sim + 221.0 \text{ m}$  である。

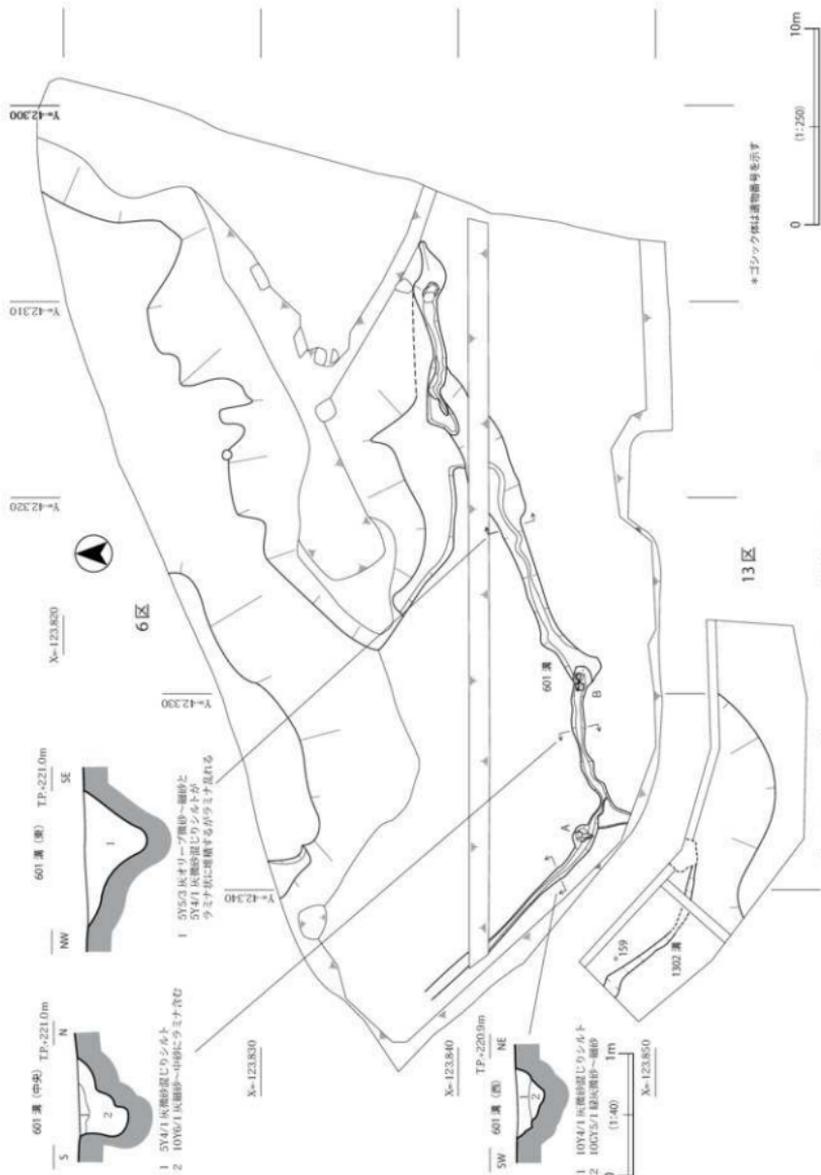
13 区は西端の 1302 溝付近で  $T.P. + 221.5 \text{ m}$ 、中央の  $X = -123,855$ 、 $Y = -42,335$  付近で  $T.P. + 221.6 \text{ m}$ 、東側の  $X = -123,855$ 、 $Y = -42,330$  付近で  $T.P. + 221.6 \text{ m}$  である。

5 区の西半から 6 区全域の北から 3 分の 1 ほどでは、4 区から延びてくる地山が露出しており遺構は検出されない。それより南では褐色土層の 3 層が厚く堆積する。北から南へと傾斜する。13 区はやはり、南東は張り出してきた地山が占め、南東から北西に低くなる。

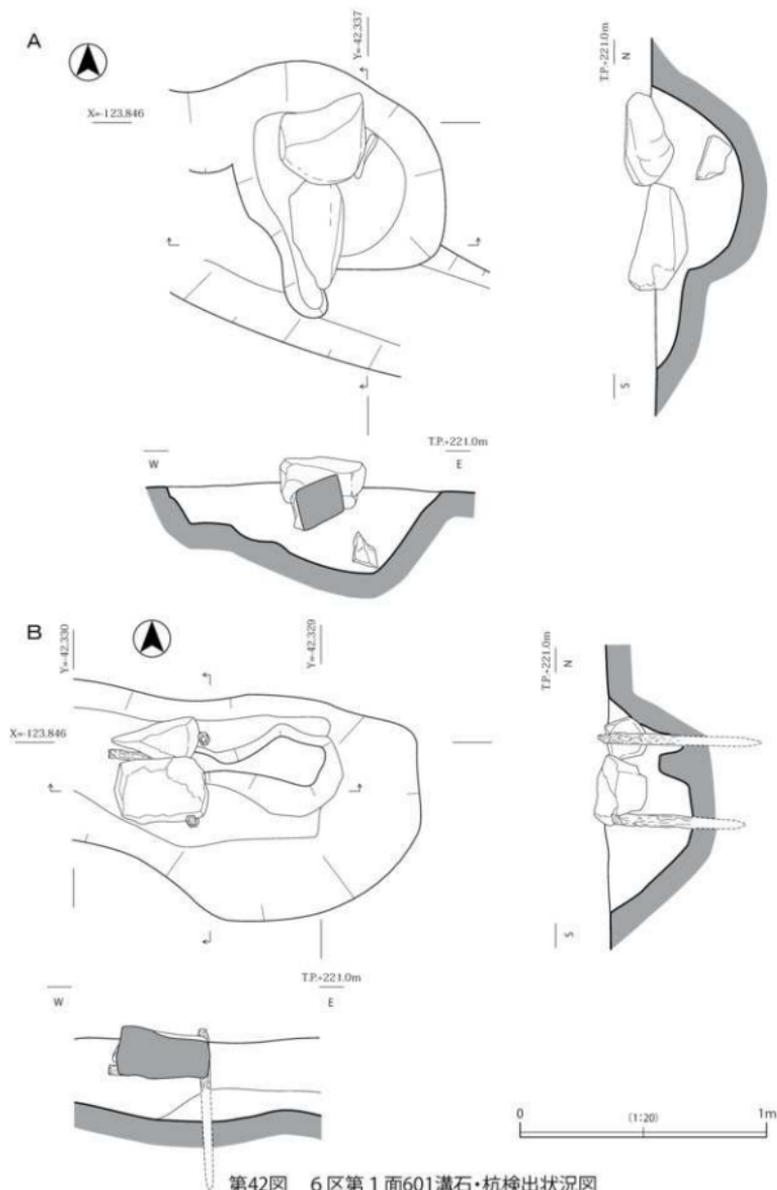
6 区の南西部で 601 溝を、13 区北西部で 1302 溝を検出した。601 溝と 1302 溝はつながる可能性が高い。



第40図 5区第1面・6区第1面・13区第2面平面図



第41図 6区第1面平面図・601溝断面図・13区第2区第2面平面図



第42图 6区第1面601溝・杭検出状況図

5区では地山から3層への境界で、自然石や杭などが検出され、その中には配列したようにみえるものもあった。群などは検出できていないが、これらは耕作に伴う施設と考える。

また、5区の南や6区601溝、13区の西北など複数地点で、銅銭が出土した(第40図)。いずれも宋銭で11世紀初鑄のものを含む。

#### 6区第1面の遺構(第41図、写真図版15)

601溝(第41・42図、写真図版15) 601溝は調査区外から続いており、調査区の南端、 $X = -123.849$ 、 $Y = -42.336$ で現れて、1mほど北に伸びてから二股に分かれる溝である。西に伸びる溝は地形に沿って北上し、10数m先で途切れるが、実際は調査区外まで伸びていたかも知れない。幅0.4m、深さ0.25mで断面はV字形を呈する。途中で石を2、3個並べて溝の幅が広がる箇所がある(第41・42図A)。

もう一方の溝は東に7、8m伸びたところで、両脇に杭を打ち込み、石を並べた箇所(第41・42図B)で一度屈曲し、やや幅を広げて北西へと伸びていく。全長約25mで、幅は0.6~1.1m、深さは0.4~0.5mである。断面はV字形を呈する。A、Bの部分は幅が1.0m程度となり、水勢を調節する水利施設と考えられる。二股の溝は緩やかであるが、調査区を方形に区画することから、溝周辺は水田域と考える。足跡も水田面をかたまって検出できた。

13区の1302溝は、幅0.4m、全長8mほどで北西から東に伸びる。道路や土坑に遮られるが、601溝の西側と約5m間隔で並行なので、601溝の南端に続く溝である可能性があろう。調査区西壁において溝両肩の位置に杭が認められた。

#### 第4項 5区第3面・6区第3面(第43~46図、写真図版13・16・17)

5区、6区とも第1面調査後、東西、南北に側溝を設け確認すると、第1面の地表面から2~3m下で3層が堆積することが分かった(第10・46図)。断面観察で3層の途中には何層かの砂層が間層としてあり、足跡の踏み込みが認められた。つまり、何時期か機能面があったことになる。これを手がかりとして、第2面、第3面を調査した。第2面、第3面ともに第1面と似た様相を呈する。複数の遺構を検出し、空撮を行った5区第3面、6区第3面について記述する。

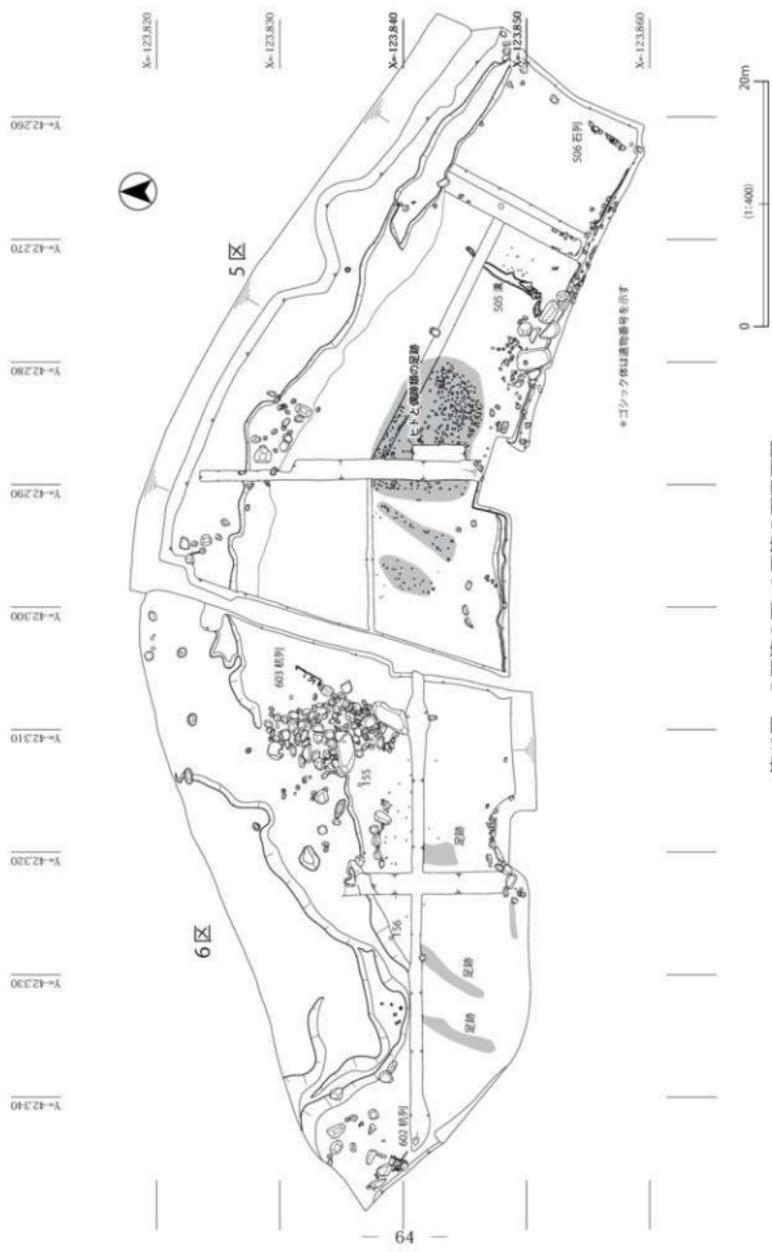
5区では3層を掘り下げるにより、北側の地山の露出はより広範囲に広がり、明瞭となる。東西方向にテラス状に段がつく。それより南では3層のシルト層が広がり、特に南西部では広範囲で足跡が認められた(第43図)。足跡は人以外にも牛などの偶蹄類の足跡がある。南東部では、正方位とは45度の角度だが、調査区の東辺に平行に、南北方向の505溝や506石列を検出した。足跡も南北の列にみえるところもあり、南北を意識した区画割などがあったと推測できる。

標高は北西隅でT.P. + 219.0m、南西隅でT.P. + 219.3m、足跡を検出した中央付近でT.P. + 218.2m ~ + 218.6m、北東隅でT.P. + 218.0m、北西隅でT.P. + 218.0mと、北から南に、西から東に低くなる。

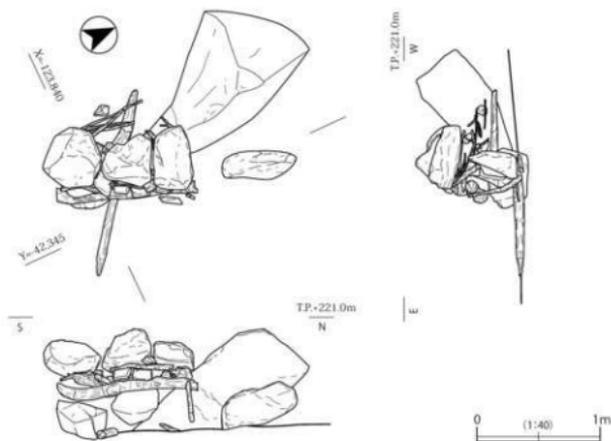
6区は北側の地山の張り出しが $Y = -42.315$ より西になるが、もっとも張り出した部分は $X = -123.840$ 付近まで迫る。西端で602杭列を、北東部で603杭列を検出した。6区の南半では5区と同じく、南北の列状に足跡を検出した。第1面と同様、数地点で宋銭が出土しており、15世紀までのものである。6区の第1面から第3面は11世紀後半から15世紀頃と捉えられる。

6区第3面の標高は、地山から下降する北西隅でT.P. + 220.0m、南西隅でT.P. + 220.0m、中央付近でT.P. + 219.3m、北東隅でT.P. + 219.3m、北西隅でT.P. + 219.1mと、5区より比高差は小さいが、北から南に、西から東に低くなる。

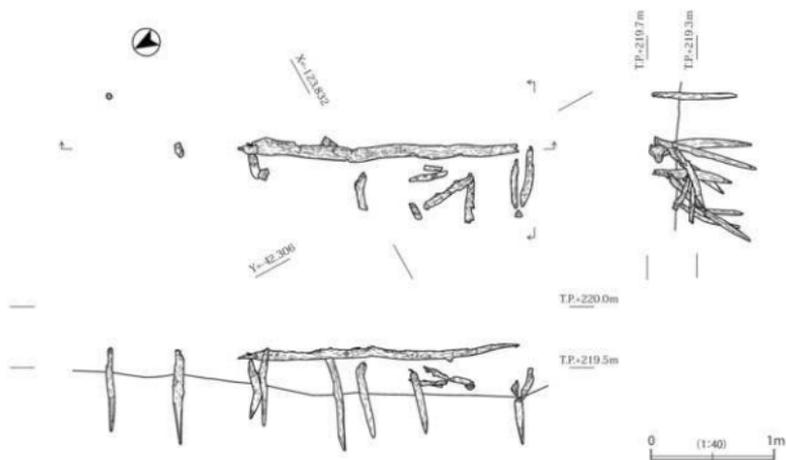
#### 6区第3面の遺構(第44・45図、写真図版17)



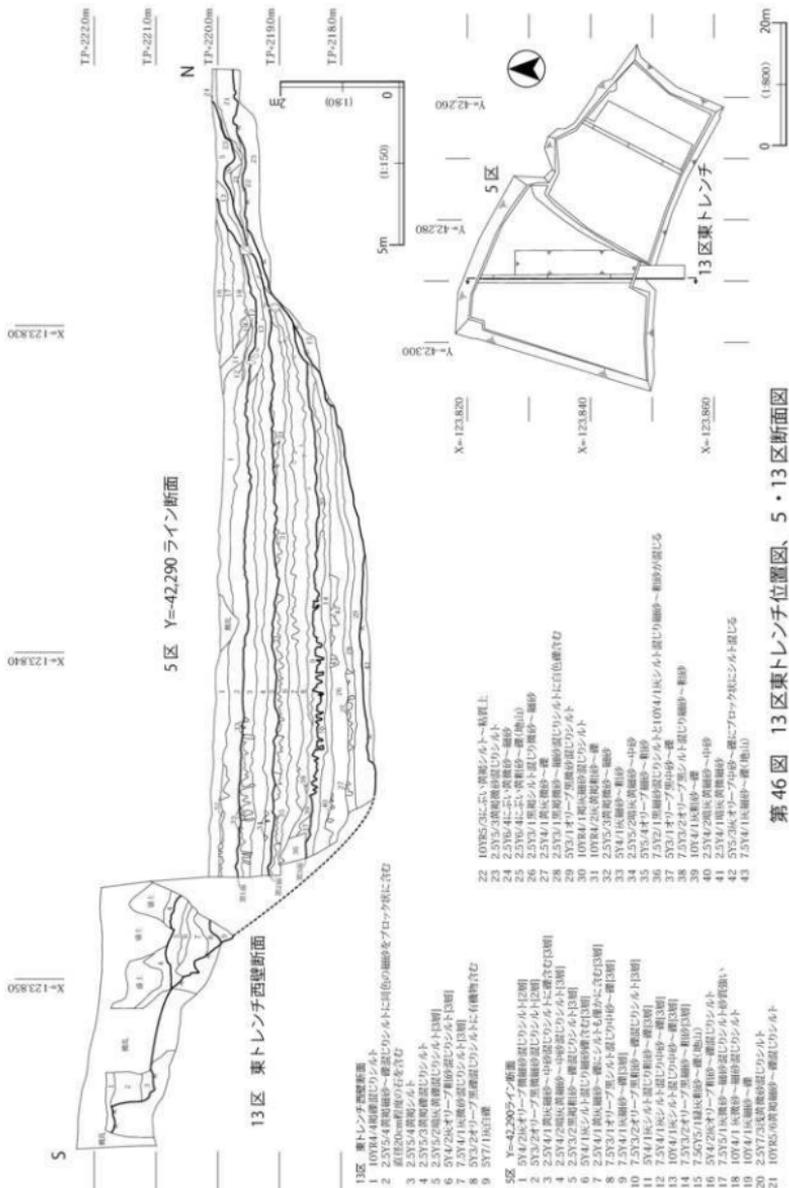
第43図 5区第3面・6区第3面平面図



第44图 6区第3面602杭列検出状況图



第45图 6区第3面603杭列検出状況图



第46図 13区東トレンチ位置図、5・13区断面図

602 杭列（第44図、写真図版17） 調査区の西端、 $X = -123,840$ 、 $Y = -42,345$ 付近で検出した。人頭大の自然石を3列2段に並べ、段と段の間には隙間を埋めるように細かい礫などが並べられる。石に平行な横杭と、それに直交するような杭が地面に突き立てられている。横木の間には細かな木の枝などもみられる。

601 溝中の杭列のように、明確な溝に伴っておらず、杭列も不完全だが、石と木を組み合わせる水勢調節機能を果たせようとした、水利施設と考えてよいだろう。

603 杭列（第45図、写真図版17） 調査区の北東部、 $X = -123,832$ 、 $Y = -42,306$ 付近で検出した。こちらもかつては石が存在していたかと思われるが、調査の課程で取り除いてしまったものもあり、南に平坦に加工された石が残るのみである。南北方向に少なくとも9本の杭が打ち込まれている。杭は残存長0.5～0.8m、直径0.1m未満である。杭と杭の間隔は約0.5mである。縦杭に対して横にも材を組んでいたのか、直径0.1m、長さ2.2mの材を検出した。603杭列は環状の機能をもつ杭列と考えてよいだろう。

5区の $Y = -42,290$ ラインで断面観察用のアゼを設定して、トレンチとして地山までの掘削を行った。しかし、南端については、谷からの上りを確認できなかったため、13区を調査した際に $Y = -42,290$ ラインの南延長線上にトレンチを設けて追加確認することとなった。これを13区東トレンチと名づけた。（第40・46図）。

13区の東トレンチは、現地表はT.P. + 222.0mを超えているが、南の山から延びてくる山裾にあたるため、盛土約1mを掘削すると、 $X = -123,850$ 辺りまでは地山が露出した。この山裾が西に広がっていき、13区トレンチ東南部を占める地山につながると予想される。

それより北では、約1mの厚さで3層の堆積が認められ、急激に地山が下降し、T.P. + 219.7mで地山となることが判明した。この3層の堆積は、踏み込んで残る砂層の間層によって何層かに分層可能で、層界は5区の第1面から第3面に対応すると考えられる。つまり、 $X = -123,850$ 辺りが5区からの谷と、そこに埋積した3層の取込点だといえる。

5区、6区は全調査区のうちでも最も低い谷部分にあたり、谷底はT.P. + 217.5m前後になることや、その低い部分に3層が3m以上にわたって堆積することが確認できた。堆積は一挙に起こったのではなく、長い時間の経過があったと思われる、その途中の段階では低く水が集まりやすい地形を活かして、棚田などの耕作地としての利用がなされていたと考えられる。

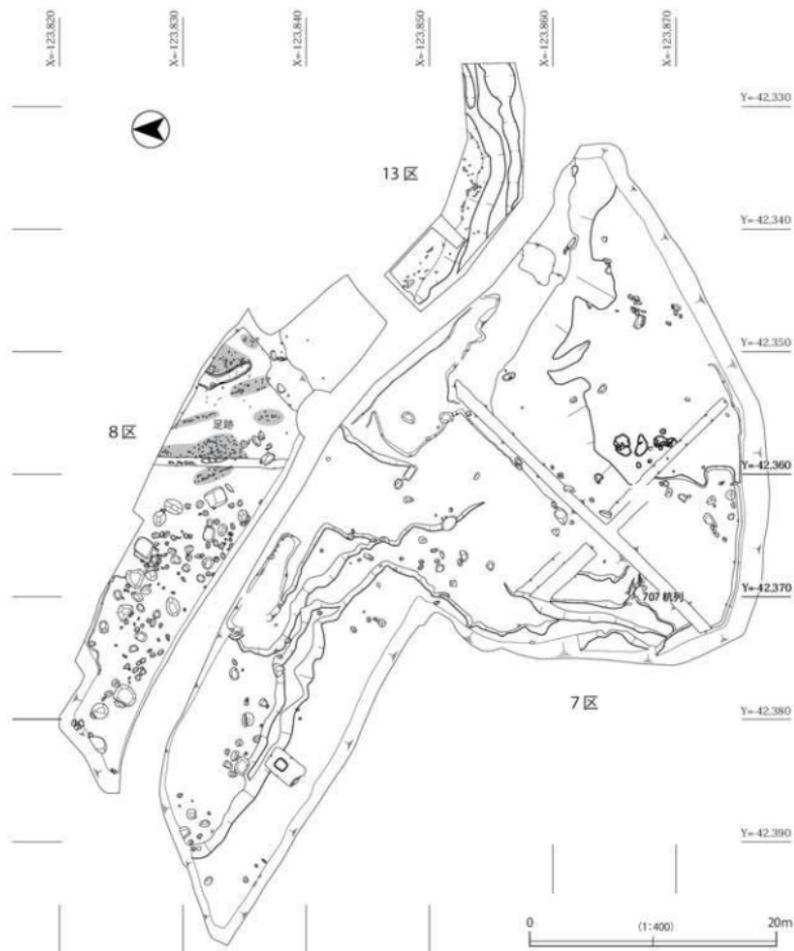
出土遺物から確認できる限りでは、古代末から中世に耕作地として利用され、その後も継続してか断絶があったかは不明だが、近代以降も地形を利用しての造成が行われ、耕作地としての利用が現代まで続いたと考えられる。

#### 第5項 7区第3面・8区第4面・13区第4面（第47・48図、写真図版18～20）

中央部で最も西に位置するのが7区であり、7区と6区ないし7区と4区とに挟まれた道路の付け替え部分に相当するのが、13区、8区である（第6図）。

7区は東半が半長円状で、その西半に平行四辺形か台形がついたような形状である。盛土等を機械で掘削した。機械掘削終了面を第1面とし、その後3層が堆積している部分の掘削を行って第2面とした。中心で深い谷筋を検出したためトレンチで深さを確認した後、可能な限り谷筋に埋積した3層を掘削した。谷筋では地山まで掘削を行えなかったが、両端は地山が露出した。この状態を第3面とし、空撮を行った。アゼ、トレンチの軸線は東半部分で正方位に対して45度振った位置に設定した（第47図）。

8区は第1面から第4面まで存在し、すべて3層に属する。足跡などによる踏み込みが認められる面が耕作地として機能していたと判断し、これを鍵層として分層し、調査した。機械掘削終了面が第1面で、第1



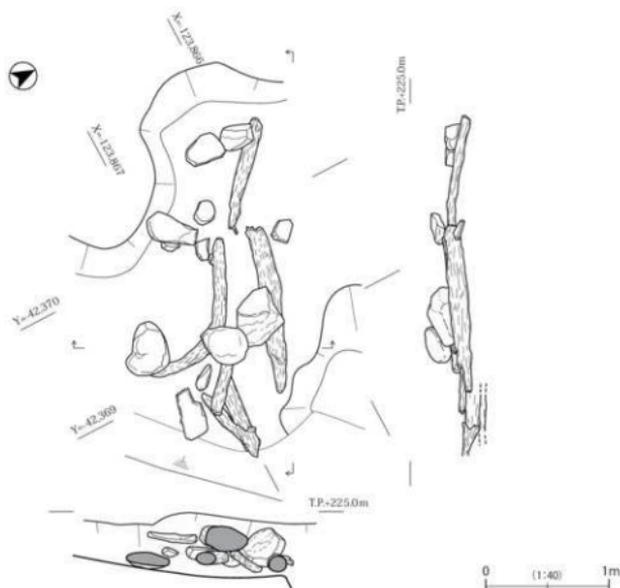
第47図 7区第3面・8区第4面・13区第4面平面図

面は4区と遺構（溝）がつながるため、4区第1面とあわせて掲載した（第35図）。

最終遺構面の第4面については、第37図でも掲載したが、つながりを示すためここでも掲載する（第47図）。第4面で空撮を行った。

8区第4面は西から東へかなりの傾斜をもって低くなる。8区第4面の標高は、西端ではT.P. + 223.6m前後であるが、Y = - 42.355 辺りではT.P. + 221.6 m前後となり、東端になるとT.P. + 220.3 m前後となる。Y = - 42.360 以南では、溝状の窪みのほか人もしくは偶蹄類の足跡を広範囲に検出した。

13区の第2面については、5区と遺構（溝）がつながるため、5区・6区第1面にあわせて記述した（第



第48図 7区第3面707杭列検出状況図

40・41図)。すべて地山が露出した最終遺構面は第4面で、これをこの項で掲載した(第47図)。第4面では、第2面からさらに地山の露出が進み、南側の地山部分と円の中に残る部分との段差が激しくなる。南辺の地山が露出した最も高いところでは、T.P. + 221.6 m ~ + 221.7 m であるが、北辺の最も低いところでは、T.P. + 221.0 m ~ + 221.2 m と、約 0.5 m の比高差がある。段に沿うように自然石や礫などがみられる。

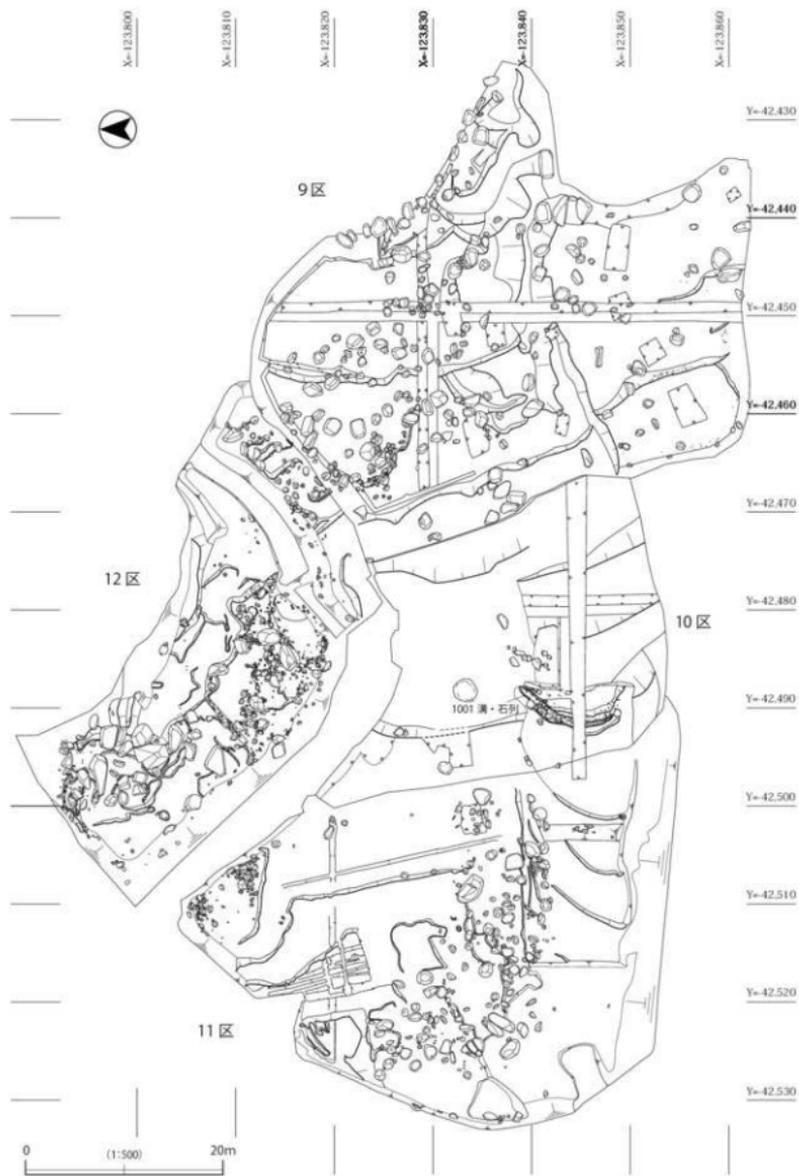
#### 7区第3面の遺構(第48図、写真図版18・19)

7区は前述のように、東側が半長円形の頭で、西側が長方形の胴という、おたまじゃくしのような形状をとる調査区である。半長円の頂点から45度の角度で直線距離15mほどの範囲が谷筋で、最も3層が深く堆積する。ここに軸線(アゼ)を設定した。谷筋は南西から北東に低くなり、北東には幅を増して広がっていくが、西側は軸線(アゼ)にほぼ平行に落ちて広がらず、長方形の部分では段状になった地山が露出する。西側の長方形部は近現代の畑田の形状が残っており、東西に長い長方形の段で2つに分かれていたが、盛土、2層を掘削すると3層の堆積はわずかであった。

東部、谷筋と地山の境界付近では不整形の土坑数基などを検出した。また、谷筋でも最上部のX = -123.866, Y = -42.370 付近で石と杭を組み合わせた707杭列を検出した。

7区は地山が露出している北西部がT.P. + 225.7 m、南西部がT.P. + 224.4 m、北東分がT.P. + 226.8 m、南東部がT.P. + 225.5 m である。南西から北東へのアゼ部でみると、最高部でT.P. + 226.8 m、最低部でT.P. + 222.7 m と比高差は約4mにも及ぶ(第10図)。これはすべて3層の堆積である。

707杭列(第48図、写真図版19-2) X = -123.865 ~ -123.867, Y = -42.368 ~ -42.371 で検出された。直径0.1 ~ 0.2 m、長さ1.0 m ~ 1.3 m の自然木を数本、横木として底面に並べ、あるいは交差さ



第 49 图 9 区第 1 面・10 区第 2 面・11 区第 2 面・12 区第 2 面平面图

せて列を構築していたようである。使用している材は、6区の601溝杭列や603杭列のように、先端を尖らせるなどの加工は行われておらず、自然木のまま使用してある。材の上や材と材の間には補強のためか、人頭大の自然石が積まれている。

明確に配置されておらず、素材の木や石も自然のままであるので、人為的遺構であるかの判断が難しい。しかし、他にはなくここにだけかたまってみられることや、谷筋の中心、水流の通り道に直交することから、やはり水勢を調節するための水利施設と判断した。よって、7区第3面、8区第4面、13区第4面は畦畔などの明確な遺構は検出されなかったが、谷に堆積した土を使用して耕作が行われていたと考えるのが妥当だろう。

7区は2層に含まれる遺物は明確に近世のものである。3層に含まれる遺物は、若干古い時期の瓦器も含むが、おおむね13世紀～14世紀のものになる(第65図)。よって、中世前半期に機能していた遺構面と考えられる。

### 第3節 西部(9～12区)の遺構

第1項 9区第1面・10区第2面・11区第2面・12区第2面(第49～53図、写真図版21・23・24・26・27)

9区から12区は調査区全体中では西部に位置する(第6図)。主に $Y = -42.430 \sim -42.530$ の東西110mの距離に、東から西に9区、10区、11区と3つの調査区が並び、3つの区のにさらに北に12区が位置する(第49図)。12区は一部に8区や13区と同様の道路の付け替え部分を含む。また、11区、12区の西端は、カーブを描きつつも東西付け替え道路と交差する南北道路によって区切られる。南北幅は $X = -123.790 \sim -123.860$ の約70mである。

9区以外は第1面が機械掘削終了面で、第2面を対応する遺構面として合成平面図を示した(第49図)。

第2面は北から南、西から東に傾斜し、標高は最も高い11区西端ではT.P. + 240.4m、最も低い9区東端ではT.P. + 232.0mとその比高差は約8mにもおよぶ(第11図)。12区や9区の北側や11区の中央部は機械掘削を終了した時点で地山が露出する。11区や10区で顕著だが、北端と南端に東西に伸びる2つの深い谷筋が認められる。この谷部分で厚く堆積した3層を数回に分けて調査し、上層から順番に第2面から第4面とした。

10区・11区の南側の谷筋では、3層を順次掘削することによって、南東を要として扇形に広がる棚田数枚や、溝や暗渠などの耕作関連遺構を検出した。12区では、北側の山裾が張り出してきて北半は地山が露出する。よって、3層の検出は地形に沿って南側約半分にとどまる。

9区では10区東端から延長する現行の棚田の造成時の段がそのまま残り、機械掘削後も北西部は一段高くなる。上段部は2層を掘削するとほぼ地山だが、下段部では11区の北端や12区でみられる谷筋と同一かは不明だが西から東へ進むと下降し、3層の堆積がみられる。9区の東半は北から南に伸びる谷筋に3層が堆積する。また、この西部域は西側、北側、南側それぞれを山で囲まれるため、山頂部から滑落した自然の巨石が数多く検出され、下方にいくほど多くみられるのが特徴である。

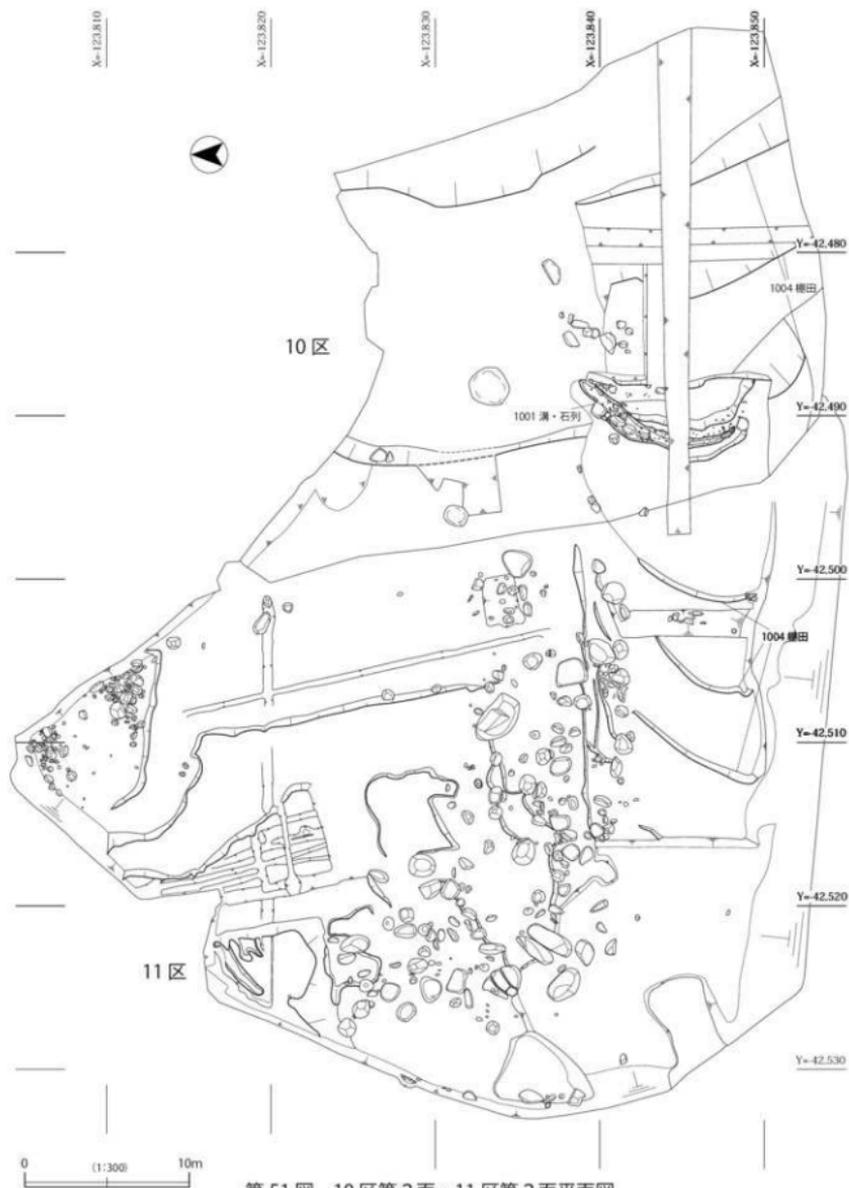
西部の当該遺構面は、9区の上段部では縄文時代早期の有舌尖頭器や弥生土器、須恵器など、比較的古い時期の遺物がみられた。しかし、それ以外は中世の土器が主で12～15世紀の年代が与えられる。



**9区第1面の遺構**（第50図、写真図版21）

9区は北側中央のみが一部突き出し、それ以外は南北に長い平行四辺形の形状をなす。北側が曲線的なのは、北側にカーブを描く道路があるためである。北西辺は12区と、西辺は10区と接する。第1面標高は、南東端でT.P. + 223.5 m、北東端でT.P. + 232.4 m、10区との境界付近でT.P. + 236.0 mである。

北西部約4分の1は、10区から継続する近現代に造成された棚田の段がそのまま段状に残る。当初はこれ



第 51 図 10 区第 2 面・11 区第 2 面平面図

より東や南へ続く緩やかな傾斜の地形だったと推測されるが、後世に人工的に削平されたと考えられる。上段部では2層の堆積が厚かったが、それ以外では盛土を除去するとすぐに3層の堆積が始まる。下段部は西から東に、南から北へ低くなる自然の段地形をとるものの、段は明確でない。この区域に広く3層が堆積していた。

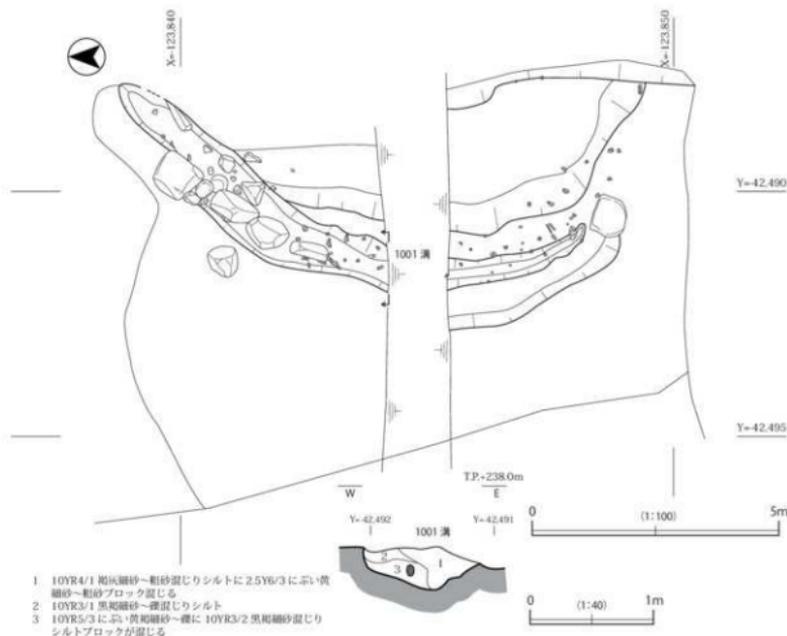
また、11区からの傾斜で落ちてきた自然石がここで集積したとみられ、多数の自然石が検出された。石は人頭大から畳ほどの大きさまで様々である。石の上面を平坦に加工したり、ノミ状工具痕がみられるものがあるが、これは近現代の棚田造成時に盛土してから平らにするため施されたものと考えられる。

**10区第2面の遺構**（第51～53図、写真図版23・24）・**11区第2面の遺構**（第51図、写真図版26・27）

10区の第2面と11区の第2面は調査区をまたがって連続する遺構（1004棚田）を検出したので、各々第2面が対応すると判明した。

11区は $X = -123.825$ 以北、 $Y = -42.515$ 以西では近現代の棚田の段が残り、盛土を除去すると竹管をつないで樋にした暗渠が東西南北に巡らされていた。また、 $Y = -42.515$ 以西の南側部分では機械掘削より下層は脆弱な粘質土となり、地山も検出できない状態になっていた。溜池などがあつたか、西側の道路造成時に大きく攪拌されたためとみられる。よって、調査は $Y = -42.515$ 以東で行うこととした。

$X = -123.810 \sim -123.840$ の間は盛土と2層を除去すると、ほぼ地山となった。棚田の段は消滅したが、西から東へという地形の傾斜はそのまま残る。 $X = -123.810$ より北7、8m幅と $X = -123.840$ より南



第52図 10区第2面1001溝・石列平・断面図



1 10YR4/4 相磯砂～粗砂混じりシルト

第53図 10区第3面平面図・1003暗渠断面図

約 10 m 幅に、西から東への深い谷筋が入る。3 層上面の高さは、中央では T.P. + 239.7 m、西端では T.P. + 239.2 m、北端では T.P. + 238.9 m である。

11 区の北側の谷は、褐灰色シルト層が堆積し、南の地山面より 0.4 ~ 0.5 m 低くなる。谷の下降し始めた地点で、調査区より東に延びていくと予想されるが、道路を隔てた 12 区の南側にシルト層の堆積が認められるので、これが谷の続きとなるのであろう。中央の地山が露出した部分は、そのままほぼ平行に 10 区に続き、11 区から 10 区へと下降していく。

3層上面の高さは、10区の西端ではT.P. + 237.7 m、北東端ではT.P. + 236.2 m、南東ではT.P. + 236.0 mである。11区の南側の谷もほぼ同じ幅のまま10区へと、西から東に下降していく。10区の東端、Y = - 42,480以南では谷はやや広がる。3層上面の高さは、最も高いY = - 42,515地点でT.P. + 239.8 m、10区と11区の境界でT.P. + 237.6 m、10区の東端でT.P. + 236.0 mである。

1004 棚田 (第51図、写真図版23) 南側の谷部分の調査区範囲内で、南東隅を要とする扇形の段が6、7段確認された。段と段の間隔は規則的で5 mが多数であり、Y = - 42,490 ~ - 42,500では10 mとなっているのは、調査区境で1段とんだ可能性が高い。段と段の比高差は0.1 ~ 0.2 m程度である。段の向きは正方位でなく、調査区の自然形状にあわせた結果、やや角度を振って南東を起点としていると推測できる。

段の下方、Y = - 42,490では段のカーブに沿って、1001溝とその中に配列された石列や杭列を検出した(第52図)。形状、水利施設をもつことから、これらの段遺構は棚田と判断し、1004 棚田と呼称する。

11区の棚田の上段部で、黒色土器A類碗や瓦器碗が出土している(第69図191、192)。瓦器碗の年代から棚田は13世紀初めに降と考える。同じ第2面でも、地山部分上の包含層では、13世紀以降の青磁碗などの陶磁器が多く出土している(第69図)。地山部分は南の棚田部分より長期間存続していたか、棚田廃絶後に造成が行われた際に、新しい時代の遺物が混入したと考えられる。

1001 溝 (第52図、写真図版23) 棚田の5段目から6段目に落ちるX = - 123,840 ~ - 123,850、Y = - 42,490付近で検出した。段のカーブに沿って東を中心として、南北に弧を描くように延びる溝である。全長11.0 m、最大幅0.9 m、深さ0.3 mをはかる。断面は逆台形で、埋土は上層の上(2層)に粘土ブロックを含み、人為的な埋め戻しがあったことが分かる。溝の中には礫や自然石があり北側の石は配列しているようにも見えるが、それ以外は不明である。溝の中や周辺には木杭が突き立っていた。また、杭と杭の間に横木とみられる木もみられた。1001溝は、畔と畔の間に設けられた、排水の機能を兼ね備えた溝だったと判断する。

#### 10区第3面の遺構 (第53図、写真図版24)

11区は第2面で調査を終了した。それに続く10区は南側の谷部分が急激に深くなっていき、3層が約3 m堆積する。断面観察からも数時期にわたって棚田の形成が確認された。あるいは、足跡の踏み込みによって生じる砂層が残る機能面が認められたため、第4面まで調査を行った。しかしながら、掘削を繰り返したの南谷部分に限定されるため、第3面はその部分のみの図示にとどめた。

第2面の1001溝とほぼ同じ位置で、1002石列と1003暗渠を検出した。

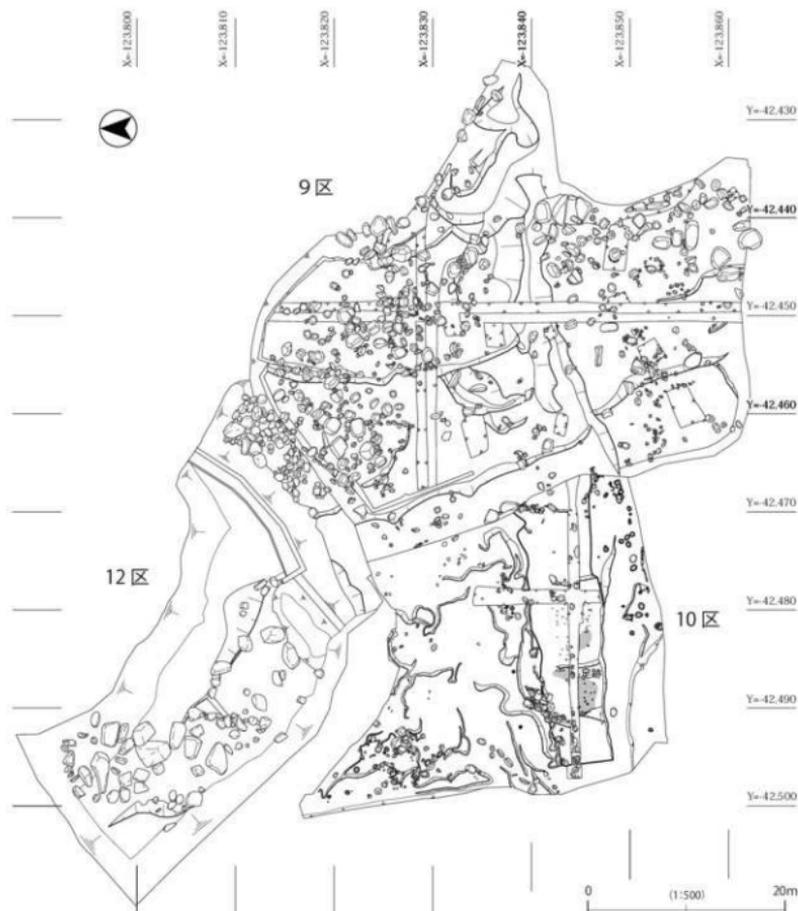
1002石列・1003暗渠 (第53図) X = - 123,840 ~ - 123,843、Y = - 42,487 ~ - 42,490付近で検出した。1001溝と同じく段のカーブに沿って、円弧を描くように石が配列されるのが1002石列である。長さは1001溝の北半分ほど、約5 mである。石は人頭大ほどの石を並べた後、隙間や下方に小石や礫を敷き並べているようである。

1002石列の東側は段をなし、段の落ちで第2面1001溝の名残のくぼみか、あるいはその下層に作られた溝を検出した。溝の最下層には細い木が並べられ暗渠を構築していた。

10区の第3面も第2面ほど明確ではないが、西から東に下降する段をもち、棚田を形成していたと思われる。また、棚田の平面部分にはところどころで足跡がかたまってみられた。

#### 12区第2面の遺構 (第49図)

12区は11区と道路を挟んで北に位置し、東辺は9区の北西部と接する。北側の山の山裾がおおよそ半分のところまで迫り、地山が露出していた。また、道路や水路の造成により、大きく擾乱を受けていた。調査



第54図 9区第2面・10区第4面・12区第3面平面図

区の南半でみられた3層は西から東へ下降し、11区の北端で検出した谷の続きと思われる。青磁や須恵器が出土した。

第2項 9区第2面・10区第4面・12区第3面（第54～56図、写真図版22・25・28）

11区は第2面が最終遺構面だが、それ以外の区では第49図の遺構面以降、9区は第2面、10区は第4面、12区は第3面まで調査を行った。地山までを検出し、遺構面として捉え一つの平面図にまとめた（第54図）。地山を検出した面という点では11区の第2面も対応することになるが、南西部にある棚田遺構の連続性を表現するため、第49図にまとめた。

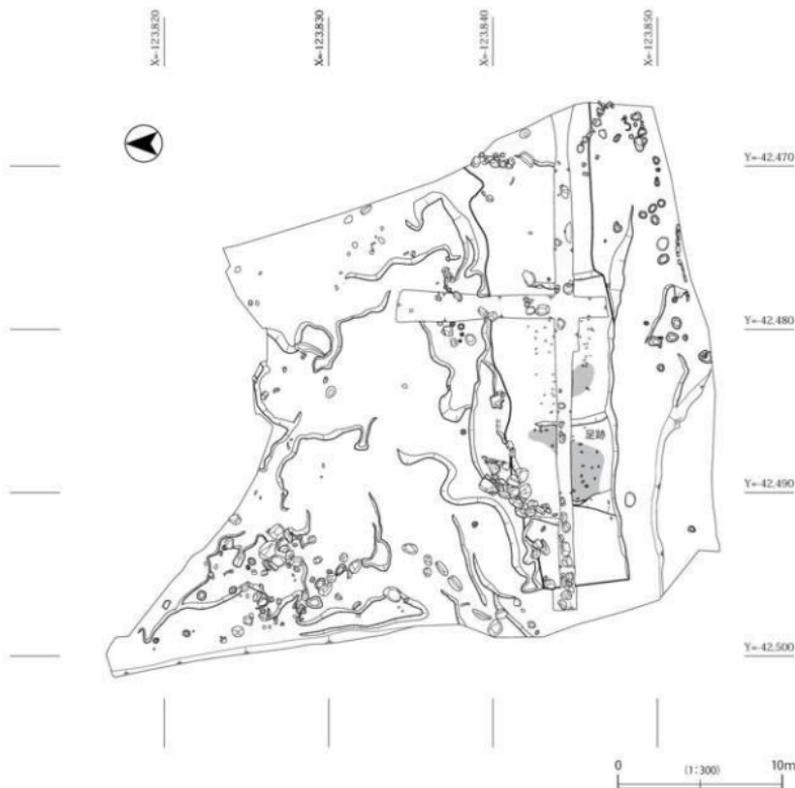


第55図 9区第2面平面図

11区や12区の西側から東に低くなる地形をとる。10区の南半、12区の南半に谷が走り、9区に入るとそれが合流したように、 $X = -123,840$ 以南や $Y = -42,455$ 以西の段上に高い部分を残しながら、3層が一面に広がって堆積する。10区の南半で棚田の名残を検出した以外は、顕著な遺構は検出できなかった。

**9区第2面の遺構**（第55図、写真図版22）

上述のように $X = -123,840$ 以南は自然地形を活かして、段状に高くなる。さらに、 $Y = -42,455$ 以西の部分がある上に棚田が造営されていたようで、東西幅5～9mのテラス状に段を形成する。この高い部分



第 56 図 10 区第 4 面平面図

には 2 層が堆積し、近世の陶磁器などが多く含まれていた (第 69 図)。

9 区第 2 面の標高は、上段北西部では T.P. + 234.6 m、南西部では T.P. + 234.5 m あるが、北端 Y = - 42,460 あたりでは T.P. + 232.3 m となり、中央部では T.P. + 232.2 m である。北東部では T.P. + 231.7 m に、東端では T.P. + 232.9 m に、南東部になると T.P. + 231.6 m になる。

段の下部、X = - 123,840 以北では 3 層が一面に広がったように堆積するが、厚さは一定でなく、3 層を掘削していくと、10 区の北半に続く中央部分は地山が早くから露出し、X = - 123,830 位から北側では 3 層が 1 m 以上堆積する谷となる (第 11 図参照)。

南北方向でも Y = - 42,455 ~ - 42,470 でみられたテラス状の段の次に、Y = - 42,455 ~ - 42,440 あたりにも比高差 0.1 ~ 0.2 m の段が認められる。これも近現代以前の、棚田の名残と考えられる。

9 区では棚田の段以外は自然地形の傾斜や窪みが認められたのみで、顕著な遺構は検出してない。しかし、小石、礫から、長さ 2、3 m の巨石と呼べるほどの自然石が多数検出された。特に低いところに密集しており、これは 9 区より高い 12・11・10 区か、さらにその上から落ちてきた石が 9 区に自然と集まったためと

考えられる。大きな石の中には、上面にノミなどの加工痕が残されているか、平たく切断されたものもあった。これは後世棚田を造成する際に、盛土をかぶせ平坦面を作る際に、石を除去する代わりに飛び出る部分を切断したものとと思われる。

出土遺物は同じ上段部からは、2層で近世の陶磁器が出土していたのが、3層では弥生土器や須恵器などが出土し、古代・中世の土器が少ないのが特徴である(第69図)。対して、下段部では中世の土器や、砥石、開元通寶や紹聖元寶などの10世紀から11世紀初鑄の銅銭が含まれる(第70・71図)。よって、9区第2面は11世紀以降の遺構面と思われ、他の調査区、例えば5・6区の第3面よりやや古いと推測できる。

なお、包含層中から縄文時代早期の有舌尖頭器が1点出土した(第71図210)。上からの流れ込みであろうが、1～4区で出土した縄文土器と同時期か、先行する集団のものである。9区の南側や11区の東側に縄文時代早期から人が住んでいたことを示唆するものである。縄文土器は出土していない。

#### 10区第4面の遺構(第56図、写真図版25)

10区は第3面と同じく北半分は第2面掘削時に地山まで到達しており、遺構面として第4面を確認したのは南半の谷筋の部分のみとなる。

この谷部分で第2面や第3面とほぼ同じ位置にやはり段が確認され、少なくとも4、5枚の棚田があることが分かった。段の上段数段には人の足跡も確認できた。

段は西から東に低くなる。段と段の比高差は0.1m前後で、最上段ではT.P. + 236.4mあるが、中段のY = - 42.485あたりになるとT.P. + 235.8m前後となり、最下段のY = - 42.470あたりになるとT.P. + 235.2m前後になる。

地山から谷への境界では上から滑落してきたような自然石がみられたが、第2面や第3面のような人為的に配された石列や溝などの遺構はみられなかった。また、11区、10区から下降してくる棚田の続きは9区の最終面までいたっても確認できなかった。ただし、9区の西端、Y = - 42.460辺りでは、自然地形としても南北方向に大きな段がついており、ここまでは棚田が連続していた可能性はある。

第4面の遺物は9区に近い下段部から多く出土している(第69図)。近世の杓付磁器は混入と考えると、白磁碗や緑釉陶器なので古代末から中世前半の遺構面と考えられる。

#### 12区第3面の遺構(第54図、写真図版28)

3層の掘削を進めると、北側の山裾はより中心まで延びてきてX = - 123.810を越えた辺りまでは、地山が露出する。傾斜はよりきつくなり、北から南、西から東にかなりの勾配をもって傾斜する。西端でT.P. + 239.0m、中央でT.P. + 237.5m、南東隅でT.P. + 236.0m、東端中央でT.P. + 234.0m、北東隅、9区との接点ではT.P. + 231.2mである。山裾近くでは長さ3、4mの巨石もみられるが、3層の堆積が残る部分では拳大や人頭大の石が南北の列に並ぶところも見受けられる。これは棚田などの段や縁部の石と考えられ、耕作地として利用されたことを示すものだろう。

12区は3層掘削中に須恵器などの比較的古い時期の土器が若干出土している(第69図)。ただし、12区は東西南北とも後世の道路や用水路造成工事の際に大きく攪拌を受けて、包含層でも上層の土は除去されており、比較的下層の土やそれに含まれる遺物が残っていたためとも考えられる。他の調査区と同様、第3面は主に中世に機能した遺構面だろう。

## 第4章 調査成果（遺物）

### 第1節 1・2区の遺物（第57・58図、写真図版30～37）

1・2・11は機械掘削中に出土した。

1は1区で出土した陶器製のミニチュア播鉢である。ロクロ成形される。復元口径6.0cmの小片であるが、片口や内面の播目が確認でき、備前などの当時広く普及していた播鉢を模倣した製品と思われる。2は2区耕土層で出土した、陶器碗底部である。胎土や色調から唐津系陶器であろう。11は2区耕土層から出土した、瓦質土器羽釜の口縁部から罅部である。罅部から上の口縁部が短く、内傾する。機械掘削した耕土層（1層）に含まれる遺物は中世後半から近世のものである。

3から10、12、13は2区の第1面から第3面、2層から出土した遺物である。

3は白磁碗底部である。底部から体部が外に向かって直線的に開く。4は陶器おろし皿底部である。内面底部に4列のおろし目が確認できる。全体に緑灰色の釉薬で施釉され、内面見込みに鉄釉で文様が描かれるがわずかしか残っていない。

5は陶器碗底部である。すべてロクロ成形される。全面浅黄色の釉薬で施釉されるが、高台は露胎で成形時の粘土の削りカスがつくなど、やや粗雑なつくりである。

6は灰釉陶器底部である。胎土は須恵器より軟質で灰黄色を呈し、精良である。高台と底部の境目は明確でなく、断面三角形の高台がつく。

7は陶器皿底部である。素地は淡赤褐色を呈し、淡緑色の釉薬で内外面とも施釉される。胎土や釉薬の色調から伊賀や信楽など東海系陶器と思われる。底部外面にはヘラケズリが認められる。

8は須恵器杯底部である。胎土は精良で暗青色を呈する。断面が平行四辺形の高台がつく。

9は瓦器碗である。口径が小さく、器高が低く、外面、内面見込みのミガキもみられないことから、和泉型IV-1～2型式、13世紀前半の年代が与えられる。10は土師器皿である。底部から口縁部は緩やかにたちあがり、端部は丸くつまみだす。12は土師器甕である。口縁部は体部から直角に近い角度で屈曲し、口縁端部は上につまみあげる。内外面ともタテハケメの後にナデを施す。

13は須恵器のこね鉢口縁部である。いわゆる東播系須恵器で、口縁部の肥厚具合から第Ⅲ期1段階、13世紀初めから前半のものと考えられる。

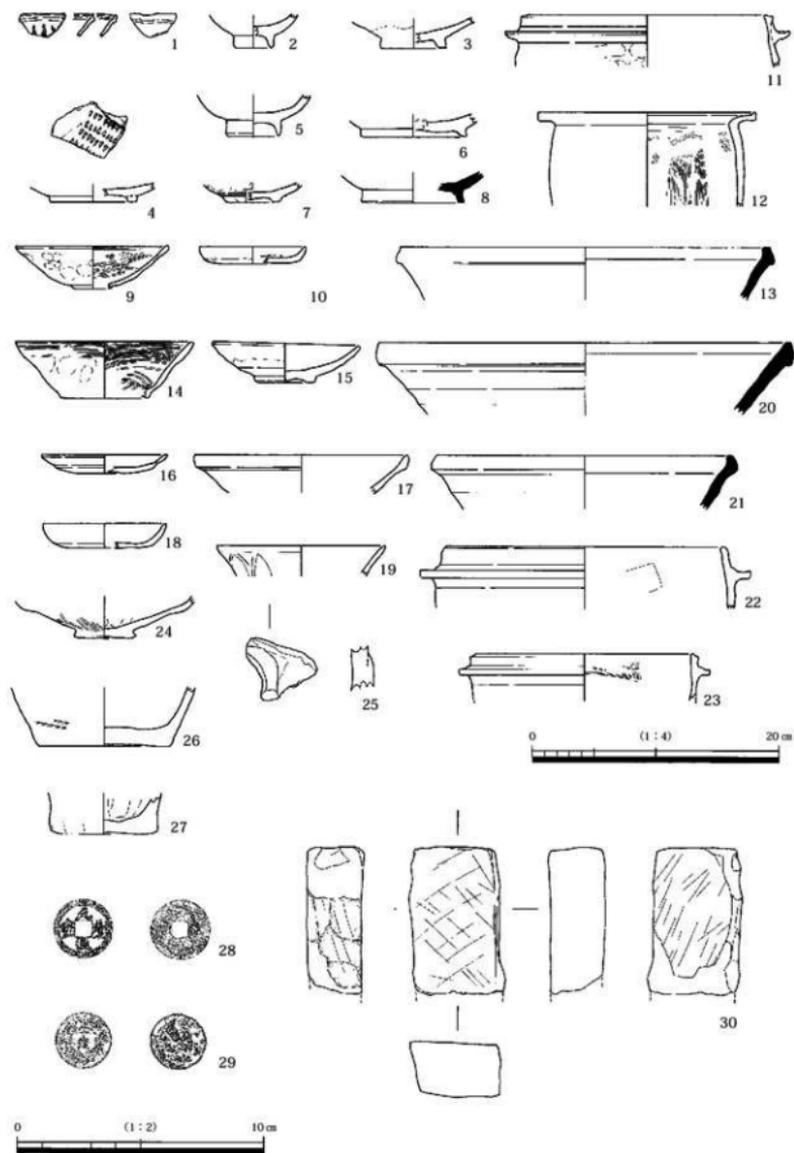
以上の土器は主に2区の西側下段部、2層が厚く堆積し、上面に鋤溝などの耕作遺構が認められた範囲から出土した。よって、2区の2層は13世紀から近世までの間に堆積した包含層といえる。

14から23は2区の3層下部、第4面から第5面で出土した。

14は瓦器碗である。口径、器高ともかなり大きく、碗より鉢と呼んだほうがいいかもしれない。口縁部から底部にかけて直線的であり、底部で急激にすぼまる器形をとる。形骸化した高台を貼り付けた痕が残る。内面は体部上半2分の1位までと、見込みにミガキが認められる。外面は口縁部にのみミガキを施す。和泉型Ⅲ-2型式相当か。

15は陶器皿である。口径12cm弱で、底部は厚く、削り出し高台である。にぶい黄色の釉薬を流しかける。唐津系陶器であろう。

16・18は土師器皿である。16は体部から口縁部が緩やかにたちあがる。16と18は口径がほぼ同じで、



第 57 图 1·2 区出土文物实测图

16は口縁部を斜めにつまみあげる。18は器高が深く、底部から垂直に体部がちあがる。

17は白磁碗口縁部で、白磁碗Ⅳ類である。いわゆる玉縁口縁だが、さほど肥厚しない。もう一片白磁碗口縁部が出土している（写真図版36-4）。

19は青磁碗である。端反口縁で体部外面に陽刻で蓮弁文を施す、龍泉窯系の輸入磁器である。

20・21は須恵器こね鉢である。東播系須恵器で、2点とも口縁端部が丸くおさまり、20はやや肥厚する。Ⅱ-2段階、12世紀末から13世紀初め頃の時期が与えられる。

22・23は瓦質土器羽釜である。22は口縁部がやや内傾し、体部は外に膨れ気味である。23は口縁部がほぼ直立し、体部はすばまる器形をとる。内面にはヨコ方向のハケメの痕跡が残る。

24・26は1区西側下段部、3層から出土した。

24は弥生土器の底部である。底部から急激に広がる体部下半をもち、中期から後期の壺の一部と思われる。外面にはハケメの後ナデを施し、内面には工具痕が残る。

25は2区の3層（第4～5の間）から出土した。小形品（ミニチュア）土師質土器甕の底の一部と思われる。

26は弥生土器甕底部である。長石、石英等を含み胎土が粗い。調整不明瞭だが、弥生時代中期から後期のものか。27も弥生土器底部である。内面に粘土の絞り痕が残る。弥生時代中期から後期のものか。3層下部、第4～5の間から出土した。

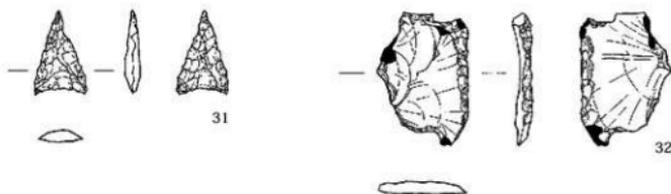
28は2区の2層、第1～2の間より出土した。北宋銭で行書体の元豊通寶（初鑄1078年）である（写真図版46）。元豊通寶は皇宋通寶に次いで多く出土する渡来銭である。

29は1区の機械掘削中に出土した。一銭青銅貨である（写真図版46）。錆や腐食が激しいが、表面は「一銭」の文字の周りを草花文が巡り、裏面には桐文が描かれる。一銭貨幣は青銅貨、銅貨、黄銅貨、アルミ貨、錫貨とあわせて7種発行されているが、この桐文青銅貨は大正5～13年、昭和2年、昭和4～13年の鑄造が確認されている。しかし、29は磨滅のため鑄造年は不明である（写真図版46）。

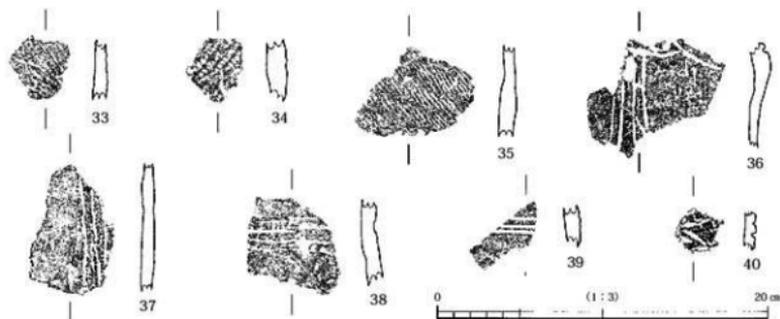
30は1区の北側で機械掘削中、2層から出土した。長方形の砂岩製石製品で、途中から欠損する。表裏、側面4面共に擦痕があり、砥石と考えられる。

31は1区の第3面41土坑から出土した。チャート製の平基無茎石鏃である（写真図版43）。長さ2.4cm、最大幅1.6cmをはかる。先端は細いが鋭利ではないのは、磨滅によるか。チャート製の石器も縄文時代に特有のものである。石材中に赤鉄鉱を含有しているため赤色がかってみえる。

32は2区の第1面～第2面間、2層より出土した。サマカイトの石器未製品状のものである（写真図版



第58図 1・2区出土石器実測図



第59図 1区遺構出土縄文土器実測図

44). 長辺の一方方向にのみ細かく打ち欠き、刃部調整を施した痕跡が認められることから、スクレイパーなどの製作段階の未製品の可能性がある。ただし、このままで使用されていたとも想定できる。

33から40は1区の遺構から出土した縄文土器である(第59図、写真図版33)。

33は第3面の49土坑から出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。右下がりの縄文を施す。

34は第3面52ピットから出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。左下がりの縄文を施す。

35は第3面の53土坑から出土した。深鉢もしくは浅鉢の胴部片と考えられる。右下がりの縄文を施す。

縄文時代早期末から前期初頭のものであるが、器壁が厚いことや胎土の砂粒の含有状態が早期末より前期に近い特徴をもつ。

36から40は1区第3面71ピットから出土した。いずれも深鉢もしくは浅鉢の口縁部である。

36は深鉢口縁部と思われる。4から6個の突起状山形口縁をもつ深鉢の口縁部分の1つにあたると思われる。口縁端部は欠損し外に膨らむが、胴部に移るに従いすぼまる。外面は口縁部に沿って波状の沈線と、その下の胴部に4条の垂下沈線をもつ、縄文時代早期から前期のものである。

37も胴部の破片で36と同様、外面に不均等でいびつな垂下沈線があり、3条みてとれる。縄文時代早期である。

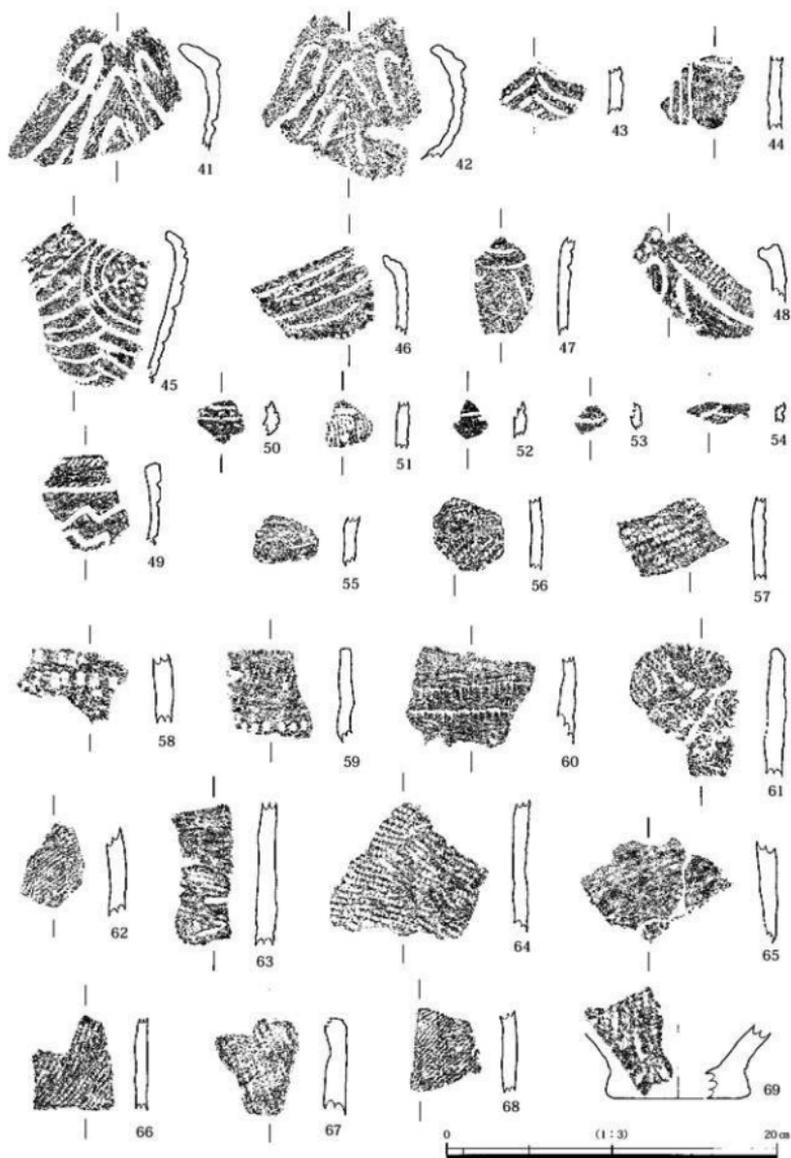
38は外面に、半裁竹管による2段の平行な押し引き沈線をもつ胴部の破片である。縄文時代早期末から前期初頭になる。1区の包含層から出土した土器に同様のものがある(第60図60)。

39、40も同様の小破片であり、39は水平な沈線が3条、40は横位の、波状あるいは花卉状の文様が2帯みられる。縄文時代中期か。1区の第3面の遺構から出土した縄文土器は、縄文時代早期末から前期初頭を主とすると言える。

41から69は1区の包含層中から出土した縄文土器である(第60図、写真図版33・34)。

41と42は正確な出土位置等は不明であるが、同一個体の可能性が高い。縄文時代中期末の北白川C式土器で、深鉢の突起状山形口縁部である。口縁端部が斜め内側に折り曲げられ、41の胴部は垂直に近く、42の胴部は内側へ湾曲しながら延びていく。燃糸縄文の後、口縁部は突起にそって1条の曲線状の沈線が入る。外面は太い沈線で山形の線が2条入る。器壁が薄く、滑らかに仕上げられている。

43は口縁部片で、上端は欠損する。外面に山形の沈線を3条ないし4条施す。縄文時代中期末の北白川C式土器である。



第 60 图 1 区包含層出土繩文土器実測図

44は深鉢で、第59図36と同様に胴部外面に1条の横位沈線とその下に3条の垂下沈線をもつ。縄文時代早期か前期の土器である。

45・46は深鉢口縁部で、口縁部は内側に短く折り曲げられる。45は波状口縁をもつ深鉢で、外面は口縁部と胴部の間に多重沈線による連弧文を巡らし、楕円形の区画内と口縁部との3条の沈線の間には細かな刺突文がみられる。縄文時代中期でもやや古いものとなる。

46は口縁部に水平な沈線が3条施され、1本目と2本目、2本目と3本目の間に刺突文が認められる。その下にはわずかに連弧文がみられる。45・46とも下段部、3層よりの出土である。45と46は同一個体の可能性が高い。50も45・46と同一個体の破片と考えられる。

47は41・42と同じく縄文時代中期末、北白川C式土器深鉢の突起状山形口縁部と思われる。2条の平行な沈線の下に「ハ」の字状の沈線がみてとれる。

48は41・42と同様の深鉢山形口縁の一部と思われる。口縁先端が凹み、縄文施文後に、端部に沿った太い曲線沈線が入る。41から43、45、46同様、縄文時代中期末、北白川C式の土器である。上段3層から出土した。

49は口縁部片で、端部隆帯に左下がりの刻み目文を施し、その下には1条の水平な沈線と2条の直線的な波状沈線を巡らす。縄文時代中期の土器だが沈線の入れ方などに、41、42、45～48などと比較してやや新しくなる要素をもつ。

51から54も縄文時代中期末の深鉢の口縁部の破片である。ごく小片だが、口縁部付近に水平な直線もしくは波状の沈線がみてとれる。

55から57は縄文時代中期土器の胴部片である。摺糸縄文を施す。48を除き、41から55までは下段3層から出土した。また、49と56、57は第3面の下層から出土した。

58から68は縄文時代早期末から前期初頭の土器である。

58から60は口縁部片である。58・59は下段部、3層より出土した。いずれも口縁部と胴部の境にあたる場所に押し引き文をもつ。縄文施文後に58は押し引き文を2段に施す。59は右下がりに縄文を施した後、口縁部から4cm下の口縁部と胴部の境界になる屈曲点直下に押し引き文をもつ。58・59は縄文時代早期中葉の栗津S Z式か。栗津S Z式土器は滋賀県の栗津貝塚などに出土例をもつが、大阪全域をみても出土点数が少ない。

60は2層下部より出土した。平行な押し引き沈線を2段にもつ。58・59の押し引き刺突文が丸いのと比べて、直線的なのが特徴である。これも縄文時代早期末から前期初頭の土器である。第59図38に似る。試掘調査でも縄文時代早期末とみられる押し引き沈線の土器が出土している。

62から68は胴部片である。中期の土器と比べると早期末から前期の土器は器壁が厚く、胎土に角閃石などが含まれ、赤褐色から黄褐色を帯びるのが特徴である。多くは左下がり斜め方向の縄文がみられる。61・63・64は器壁が厚く、早期末から前期初頭と思われる。ただし、64は角閃石が含まれていないことから、早期でも前期に近い時期になるとと思われる。

69は深鉢底部である。底部から胴部は大きく開く。前期の土器である。第3面の下層から出土した。

3層の下層からは前期の土器が出土するが、その上層は早期末から前期の土器と中期末の土器が出土するなど、各時期の土器が混在している。1区包含層に含まれる縄文土器は、層の上下関係と土器の時期区分が必ずしも一致していない。かなりの長期間にわたって地山の直上で機能していた遺構面があったと考えられる。

第 61 図 70 から第 62 図 81 は 2 区の 215 土坑から一括出土した縄文土器である（写真図版 30～32）。いずれも縄文時代中期末、北白川 C 式の深鉢と考えられる。

口縁部、あるいは口縁部から胴部、と器形を一定程度に復元できたのは 70、71、78 と 79、80、81 である。70 はもう一連の口縁部帯を接合復元したが、図化せず写真の掲載のみにとどめた（写真図版 32）。78 と 79 は同一個体の可能性が高い。

72 から 77 は口縁部の文様体の破片であり、一定程度に復元可能な 5 個体のいずれかに属する可能性もある。ただし、接合点が見つけれなかったため、文様の特徴的なものを抽出し、図化した。他の胴部片にも接合不能なものがあったが、ほとんどは 81 の一部と思われる。従って、215 土坑から出土した土器は、口縁部付近から胴部下半位までほぼそろった 81 の個体と、主に胴部の 78、79・80、口縁部の 70、71 となる（第 61・62 図）。いずれの個体も底部は存在せず、復元しても完形にはならなかった。これにより 215 土坑には完形の土器が埋納されたか、あるいはそのまま投棄されたのではないと判断できる。これはこの土坑の性格を考える上で興味深い。以下、個別に記載する。

70 は深鉢口縁部である（第 61 図、写真図版 32）。口径 40.4 cm、残存高 7.5 cm をはかる。内外面ともに灰色味を帯びた黄色を呈し、口縁部はまっすぐで、胴部は緩やかに内湾する。口縁部と胴部を隆帯で区分する。口縁部外面は縄文を施した後、太い沈線が水平線と楕円形になる区画文をめぐらす。楕円形の区画の下にはさらに沈線がめぐり、連弧文になる可能性が高い。内面にはユビオサエが残る。

71 は口縁部が反り気味である（第 61 図、写真図版 32）。外面は口縁部隆帯の下に文様を巡らす。文様の構成は 70 に似るが、水平線、半円状の区画帯とがあり、区画帯の下に 3 条の連弧文が認められる。70・71 と同沈線の下には左下がりの縄文を施す。縄文の撚りは L R である。

72 も 71 と同位置、同様の文様の口縁部片である。2 条の円もしくは半円状の区画帯の下に連弧文が認められる。

73 から 77 は楕円形区画帯の破片である。いずれも 2 条の沈線に囲まれた刺突文がみられる。刺突文の文様は施工を垂直に突き立ててつけたため円に近いものと横に引いているため文様が流れるものがある。楕円形の区画にも縦長と横長の 2 種類あったと推察できる。

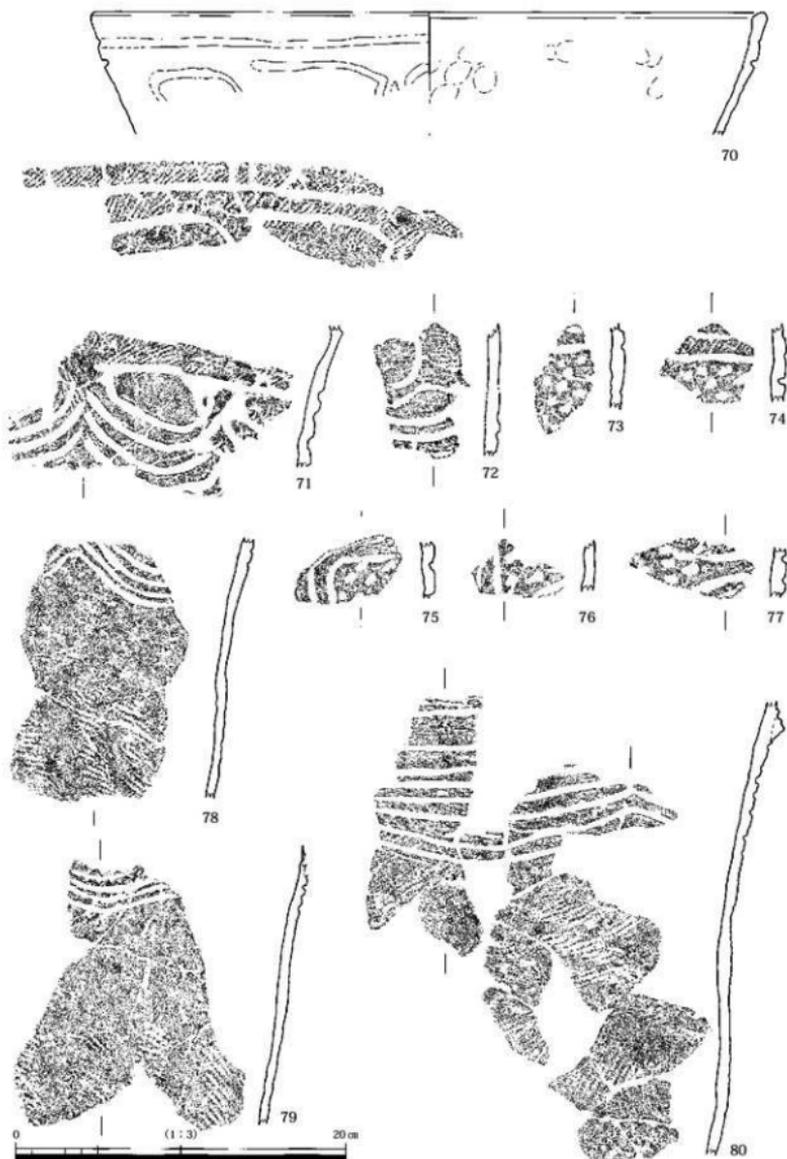
78 と 79 は深鉢の口縁部下部から胴部の部分である。いずれにもぶい黄橙色を呈し、器壁が 0.8 cm と薄い。4 条の連弧文をめぐらす。胴部は右下がりの縄文を施す。79 は右端に他の部分と異なる、縦方向の縄文が認められる。

80 は口縁部付近から体部下半まで残存するが、口縁部と底部は欠損する。口縁部は隆帯を施し、少なくとも 8 条の平行な直線もしくは曲線の沈線がみられる。体部は左下がりの縄文を施す。縄文の撚りは L R である。

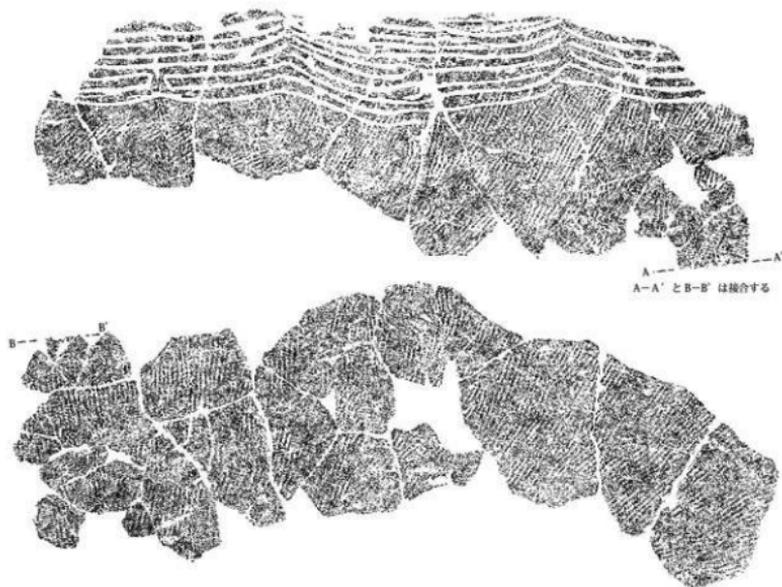
81 は 215 土坑出土土器中、もっとも残存状況がよくほぼ器形を復元できる個体だが、口縁部と底部は欠損する。残存部最大径 41.2 cm、残存高 45.1 cm をはかる。口縁部には 7 条から 8 条の沈線を巡らす。沈線は横位で一周を 3、4 分割する波状文の連続が主であるが、下方は長方形の方形区画や曲線を折り曲げて下の線を続けて描くところもみられる。胴部は左下がりの縄文で、縄文の撚りは L R である。内面はユビオサエのあとがみられる。従来の星田式と呼ばれていた土器である。

82 から 86、88 から 90、92、96、97 は 2 区の包含層より出土した縄文土器である（第 63 図）。82 から 84、90 が 2 層から、85、86、88、89、92、96、97 が 3 層から出土した。

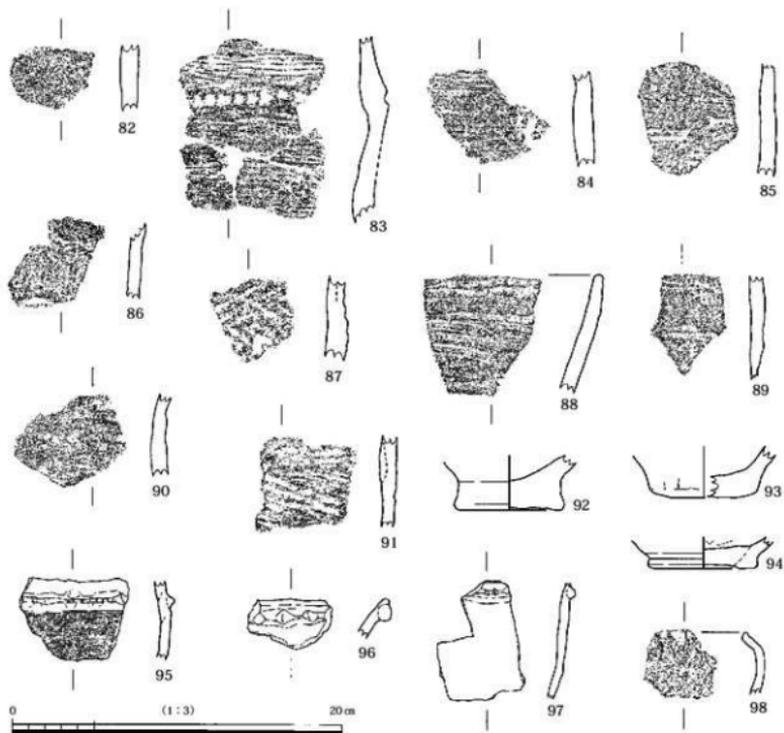
87、91、93、94、95、98 は 4 区から出土した。



第61图 2区215土坑出土绳文土器实测图(1)



第 62 図 2 区 215 土坑出土縄文土器実測図 (2)



第63図 2・4区包含層出土縄文土器実測図

88・89は縄文時代中期末から後期の口縁部片と胴部片である。

83は口縁部付近から胴部の破片で、境界が「く」の字に屈曲し、境界線上には半截竹管側面による押し引き文が施される。器壁が厚く、赤褐色を呈する。縄文時代早期末から前期初頭のものだろう。

84から87も胴部片である。87は縄文を施す。82から87が縄文時代早期末から前期初頭の土器である。

88から91も胴部片である。角閃石の含有率がわずかで、縄文時代中期末から後期の土器である。

92から94は深鉢の底部である。92は2区3層、93・94は4区2層からの出土である。いずれも前期の土器である。

95から97は縄文時代晩期の土器である。95は胴部片で、貼付け突帯文に刻み目をもつ。4区の2層、第1～2面間から出土した。96は口縁部で幅0.8cmの貼付け突帯に刻み目をもつ。97は貼付け突帯文に刻み目を施す。96・97は2区の3層、第4面～第5面より出土した。

98は口縁部片である。口縁部に刻み目突帯をもち、器壁が薄い。縄文時代前期、北白川下層Ⅲ式にあたりと考えられる。

## 第2節 3～8・13区の遺物(第64～68図、写真図版36～39)

99から126は3区から6区で出土した土器である。

99・100は4区3層より出土した瓦器碗である。99は口径12.9cm、器高3.5cmをはかる。和泉型Ⅲ-3型式である。外面口縁部と体部の境目に工具痕が残る。100は4区の3層下層から出土した。99より新しく、終末期の瓦器碗だろう。

101は土師器杯、102は土師器皿である。101は第2面410溝から出土した。底部から体部が朝顔形に大きく開く器形をとる。

103は土師器甕の口縁部から体部である。古墳時代以降の甕である。外面はハケメのちナデである。内面もナデであるが、調整がやや雑で粘土紐の縞目痕が残る。

105・106は3層より出土した。105は東播系須恵器こね鉢である。口縁部は大きく折り返し、端部は丸みを帯びる。第Ⅱ期第2段階、12世紀末から13世紀初めのものか。106は瓦質土器羽釜である。口縁部が大きく内傾する。4区に含まれる遺物は、弥生土器などを除くと主として13世紀代の年代が与えられる。

104は3区山頂部付近の地山の風化した土層から出土した。陶器皿である。浅く、平たく、皿よりは盤に近い器形をとる。淡緑色の釉薬で内外面とも施釉され、胎土が緻密なことから京都産の緑釉陶器で、10世紀代のものと思われる。3区からの出土遺物はこれ1点のみである。

107から113は5区、3層から出土した。107は瓦器碗である。法量が小さくて高台がなく、ミガキもみられないことから和泉型Ⅳ型式終末期の瓦器碗である。108は瓦器皿である。厚みがあり、ミガキも内面見込みまでみられることから和泉型Ⅱ型式初め段階、12世紀初めのものである。

109・110は土師器皿である。口縁部をつまみあげ、ヨコナデを施す。12世紀後半から13世紀のものか。

111は陶器甕口縁部片である。胎土・色調から備前焼と思われる。112は土師質羽釜、113は瓦質土器羽釜である。112は罎部より少し上に穿孔をもつ。焼成から土師質土器としたが、器形は瓦質土器であり、焼成不良品の可能性が高い。112・113とも直立する口縁部と段状の罎部をもつ。

114から126は6区3層より出土した。114、116から118は瓦器碗である。114はミガキが判別しがたいが、口径15.4cmと大きく、和泉型Ⅰ型式の瓦器碗であろう。118も内面見込みまでミガキが入り、高台が四角形で張り出すことから同時期のものである。117はそれよりやや口径が小さくなる和泉型Ⅲ-3型式段階のものである。115は土師器碗である。

119は青磁碗底部である。高台、底部とも厚いのが特徴である。

120から122は土師器皿である。120は底部から口縁部のたちあがり直線的である。いずれも口径8.0～9.0cm、器高1.2cm程度である。

123は瓦質土器の甕口縁部である。頸部から口縁部への屈曲が著しい。

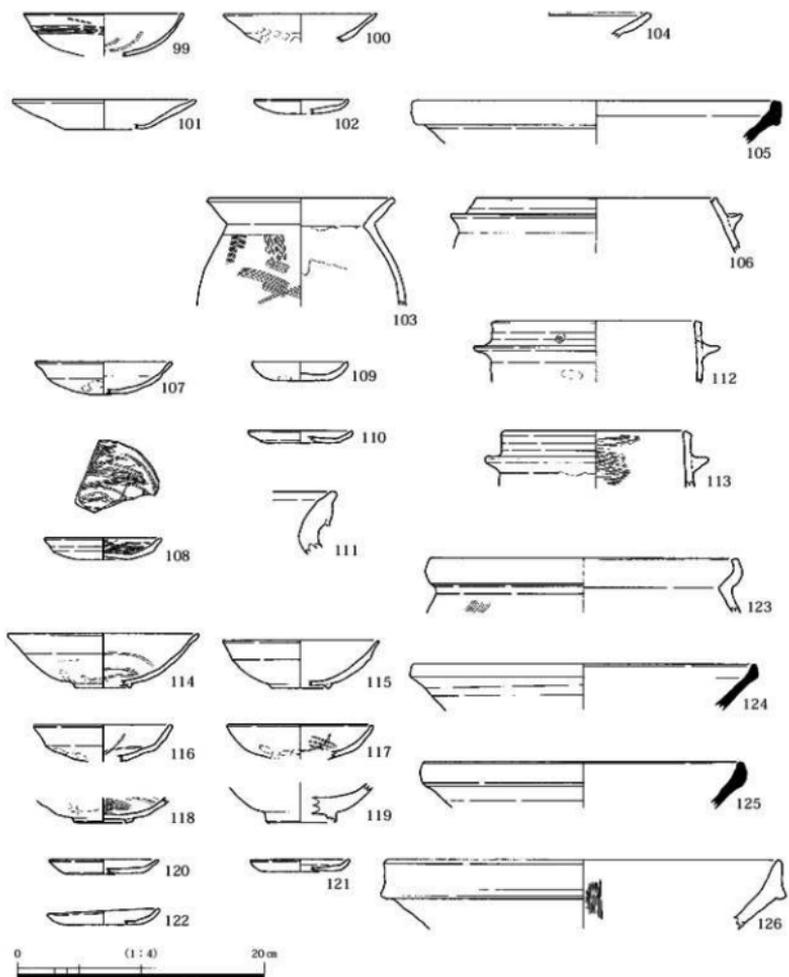
124・125は東播系須恵器こね鉢である。124の口縁は断面三角形を呈する。125は口縁部がやや肥厚する。いずれも12世紀末から13世紀前半のものである。

126は陶器播鉢である。7条か8条で1対の播目をもつ。口縁の折り返しが厚い。備前焼である。

127から144は7、8、13区から出土した土器である(第65図、写真図版38・39)。

127から138が7区から出土した。

127は磁器碗である。国産の染付磁器で、口径10.0cm、器高5.5cmをはかる。体部外面にかすかに團縁が絵付けされる。128は陶器甕口縁部である。口縁部は段をもって折り返し、外側にむかって開き気味である。

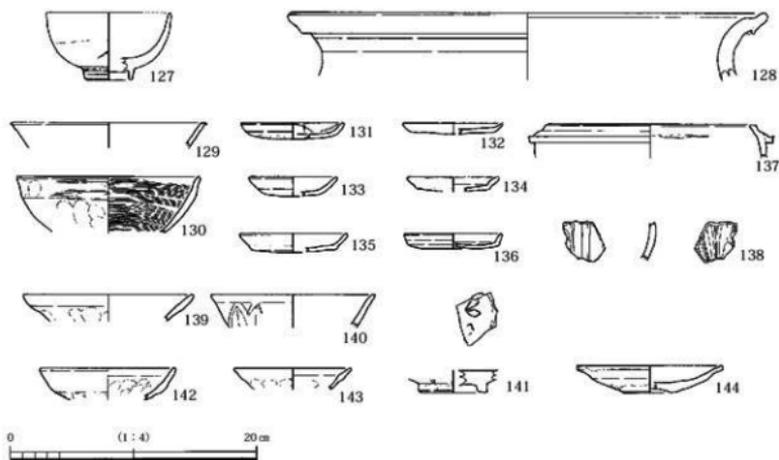


第 64 図 3～6 区出土土器実測図

備前焼である。127・128 は 2 層からの出土であり、近世の遺物と思われる。

129 は 2 層ないしは 3 層で出土した。白磁碗口縁部である（白磁碗Ⅶ類かⅨ類か）。138 は青磁碗である。口縁部の細片だが、龍泉窯系の鎗連弁文碗である。

130 は瓦器椀である。口径 14.8 cm、器高 4.6 cm をはかる大形の瓦器椀で、内面の見込み近くまでミガキが等間隔に密に描かれる。外面は口縁部のみミガキが認められる。ミガキの幅は細い。口縁部内面の沈線は



第65図 7・8・13区出土土器実測

みられず、桶葉型Ⅱ-3型式、12世紀中頃から後半のものである。

131から136は土師器皿である。3層の上層から下層まで層の上下にわたって出土する。ただし、法量は口径8.0～8.5cm、器高1.5cm程度におさまり、上層と下層でも大きな時期差はないといえる。13世紀代のものである。137は瓦質土器羽釜である。口縁部と跨部の間隔が短く口縁部が大きく内湾する。

139から141が8区、142から144が13区から出土した。

139は土師器杯である。体部外面には強くユビオサエが残り、口縁部は外に大きく開く。

140は青磁碗の口縁部である。体部外面に鶺鴒弁文をもつ。141は青磁碗の底部である。底部が厚く、高台には縦方向のケズリ工具痕がみられる。見込みには花卉状の文様が施される。

142は瓦器椀である。口径が10.7cmと小さく、ほとんどいぶし焼もされない。終末期のものだろう。143は土師器杯である。口縁部に強いヨコナデが入る。

144は陶器皿である。ロクロ形成で、見込みには重ね焼の砂目が残る。灰白色の桶葉が内面と外面口縁部に流しかけられる。144は近世の国産陶器、おそらく唐津焼であろう。視乱ぎわの出土であり混入と考えられる。8区と13区の遺物は、144以外は12世紀から14世紀、中世前半期の年代が与えられる。

第66図では4区から8区、13区で出土した遺物を示した。145から150は4区の西部、3層上部より出土した銅銭ですべて渡来銭である。出土位置は第35図に示し、法量等の詳細は表6にまとめた。

145は明銭の洪武通寶(初鑄1368年)である。無背である。146は北宋銭の皇宋通寶(初鑄1038年)である。一部欠損する。同種銭には真書と篆書があるが、これは真書である。皇宋通寶は日本に最も多く渡来する北宋銭である。147は北宋銭の元豊通寶(初鑄1078年)である。同種銭には隸書、行書、篆書があるが、これは篆書である。148は北宋銭の治平元寶(初鑄1064年)で真書である。英宗の即位により治平と改元され、治平元寶と治平通寶が鑄された。149は北宋銭の皇宋通寶(初鑄1038年)である。真書である。150は北宋銭の元豊通寶(初鑄1078年)である。行書である。4区の銅銭は初鑄期が11世紀後半から14世紀後半

におさまる。

151・152は5区から出土した。151は2層、152は3層からの出土である。151は南宋銭の紹定通寶(初鑄1228年)である。背文は「三」である。152は北宋銭の元豊通寶(初鑄1078年)である。行書である。5区の銅銭は初鑄期が11世紀後半から13世紀前半におさまる。

153から156は6区から出土した。153は第1面601溝、154は盛土層、155・156は3層、第1～2面からの出土である。

153は北宋銭の熙寧元寶(初鑄1068年)である。真書である。154は北宋銭の熙寧元寶(初鑄1068年)である。真書である。155は北宋銭の太平通寶(初鑄976年)である。真書である。156は明銭の永樂通寶(初鑄1408年)である。真書である。6区の銅銭は初鑄期が10世紀、11世紀、15世紀と時期が混在する。

157は7区の3層中部から出土した。北宋銭の嘉祐通寶(初鑄1056年)である。篆書である。

158は8区の第2面から出土した。北宋銭の皇宋通寶(初鑄1038年)である。篆書である。

159は13区の3層(第2～3面間)から出土した。不明瞭で、○○○寶と読み取れる。

160は8区の耕土層(1層)もしくは2層から出土した。一銭銅貨である。直径27mmをはかる。銅に錫と亜鉛がわずかに混じる銅貨である。表面には「一銭」、明治の字の周りを菊花と草文が巡り、裏面には中央に竜の鑄刻と時計回りに「大日本 明治十年 N E S I」の鑄造年銘がある。一銭貨は7種あり、竜鑄刻の一銭銅貨は明治6年から21年まで存在する。

161は6区の3層上部、第1～2面間と機械掘削で出土した、木製品の曲物底板である(写真図版42)。底板の中央部分で2枚に分かれて出土したが、2枚の側面に木釘の接合痕がみられることから、出土時の割れではなく割れたものを補修して使っていたことが分かる。左右の両端部分は欠損する。片面には黒漆が塗布された痕が残るが、もう片面には漆の痕跡がない。また、円周側縁に底板と側板を接合する木釘痕が残る。よって、黒漆が外面にのみ塗布された容器の底板と判断できる。さらに、漆を塗布した面にのみ斜めの刃物痕が複数みられ、容器としての役割を終えた後に、組板に利用された転用品と判断できる。

162は用途不明の金属製品である。7区の3層上部から中部で出土した。残存長12.5cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmをはかり、両端は欠損する。上部が幅広く、下部が先細りになる。鉄製と思われる。上端が折り曲げられているのは、後からの圧力による。

163は土鍾である。7区の2層から出土した。長さ4.1cm、最大幅1.4cm、厚さ1.6cm、重さ7.2gの鈴鐘形で、中心に直径0.4cmの孔を穿つ。ナデで仕上げられている。

164から169は4区および13区で出土した石器である(第67・68図、写真図版43～45)。

164は凸基有茎石鐮である。4区の第1面、3層上部から出土した。長さ4.8cm、最大幅2.0cm、厚さ0.8cmをはかる。左右に細かな刃部調整を施す。サヌカイト製である。弥生時代前期から中期のものである。

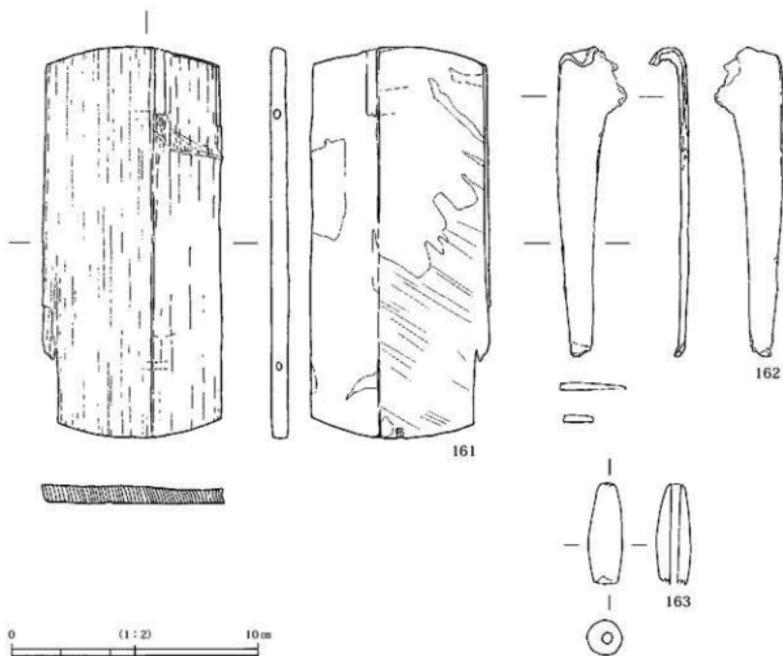
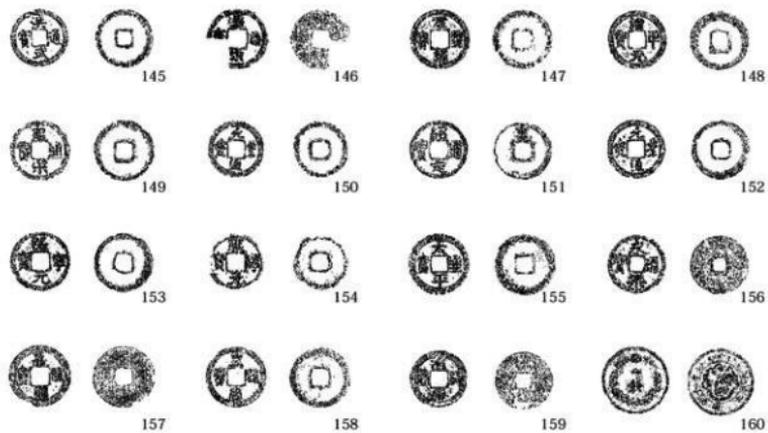
165は4区の2層、第1～2面間で出土した。サヌカイト製の凹基無茎石鐮である。縄文時代早期のものである。先端を欠損する。

166は13区中央部の3層上部から出土した。サヌカイトの剥片である。1面は大きく石を剥離した3面ないし4面がみてとれるが、他面の大部分は自然面をそのまま残す。形状からはスクレイパーの未製品か。

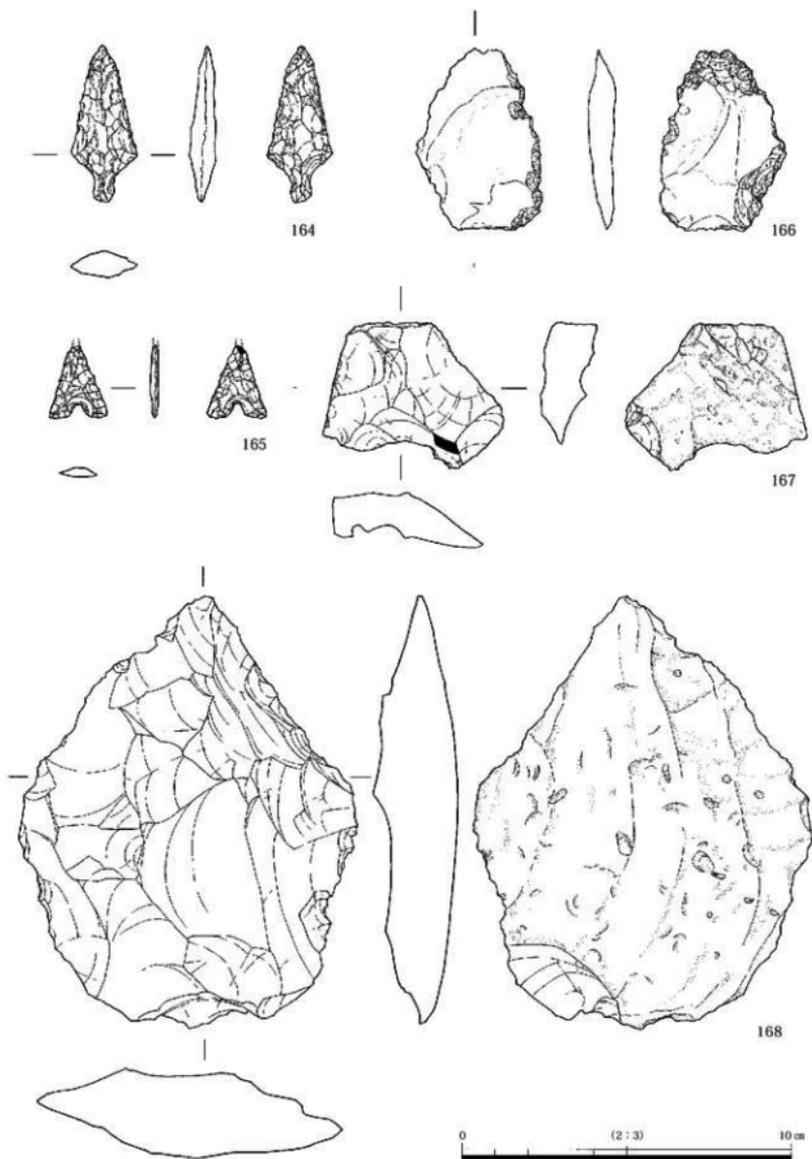
167は4区の2層で出土した。サヌカイトの剥片である。

168は4区中央部の2層から出土した。サヌカイトの石核である。片面は風化自然面を残し、他面は大きく打ち欠かれる。

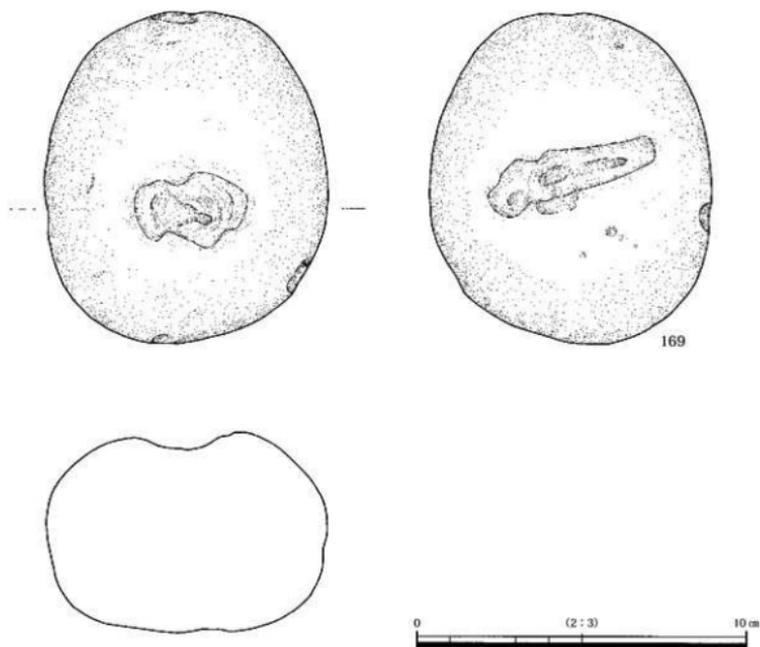
169も4区中央部の2層から出土した。砲丸状の石を磨いており、磨石とした。長さ10.2cm、最大径8.6



第 66 图 4~8·13 区出土遺物実測図



第 67 图 4·13 区出土石器实测图



第 68 図 4 区出土石器実測図

cmのやや長円形を呈する。中央には使用によると思われるくぼみがみられる。

### 第 3 節 9～12 区の遺物（第 69～71 図、写真図版 40～43）

170 から 178 は 9 区からの出土である。

170 は盛土層より出土した。陶器碗の底部である。削り出しの高台をもち常滑、瀬戸など東海系陶器と思われる。

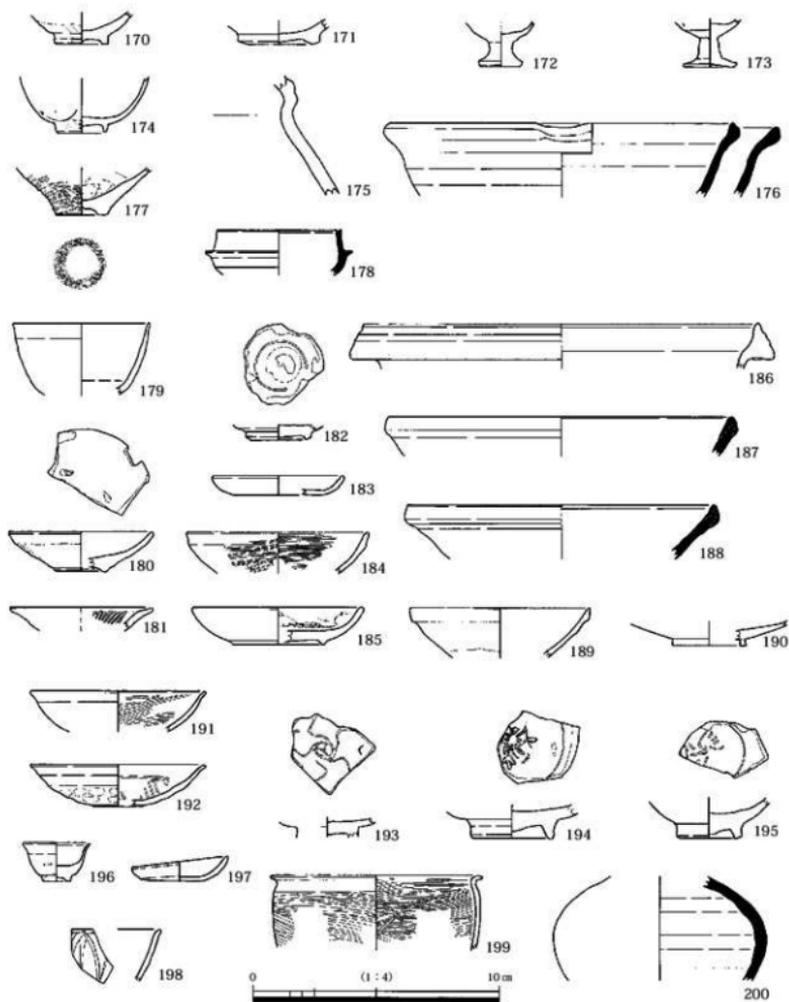
171 は白磁碗の底部である。断面台形の高台をもつ。2 層から出土した。

172・173 は陶器と磁器のミニチュア高杯である。どちらも体部下半から脚部が残り、ほぼ同じ法量である。172 は陶器製で、素地は赤橙色の土師質である。底部には回転糸切痕が残る。2・3 層からの出土である。

173 は染付磁器で、体部下半と脚部と底部の境界に手描きの細い圈線がみられる。3 層から出土した。

174 は染付磁器碗で、口縁部は欠損するが、それ以外は完存する。残存最大径が 10.5 cm、残存高が 4.5 cm の深い碗器形をとる。体部外面下半に草花文だろうか、曲線状の文様が描かれる。内面見込みには重ね焼痕が残る。側溝トレンチからの出土であるので、2 層か 3 層いずれかからの出土である。

175 は陶器甕の頸部から体部である。常滑焼の甕と思われる。3 層からの出土である。176 は東播系須恵器こね鉢である。片口部分が残る。口縁端部は肥厚せず、比較的古い段階（11～12 世紀）のものである。



第69図 9～12区出土土器実測図

いずれも3層からの出土である。

177は弥生土器甕の底部である。体部下半にタタキが残り、底部には、土器成形時に木の葉を敷いた葉脈痕が残る。弥生時代後期の土器である。178は須恵器杯身である。口縁部は内傾し、かえりは水平に横にのびる。TK 47 型式で5世紀後半から末である。いずれも3層からの出土である。

179から190は10区からの出土である。

179 は青磁もしくは白磁の碗である。底部と高台を欠損する。口径 11.0 cm、残存高 5.9 cm を測る。口径に比して深い器高をとる。3 層上部からの出土である。

180 は陶器皿である。削り出しの蛇の目高台をもち、朝顔形の浅い椀器形をとる。内面見込みには重ね焼の砂目が 2 点残る。器形、胎土から唐津焼Ⅱ-1 期、17 世紀前半のものであろう。

181 は陶器皿である。底部を欠損する。口縁端部は端反で、内面は菊花状の陰刻文が刻まれる。内外面ともにオリブ黄色の釉薬で施軸されるので、瀬戸系の陶器と思われる。180・181 とも 3 層上部からの出土である。

182 は青磁碗の底部である。削り出し高台で、内面見込みには重ね焼した結果、釉薬の剥がれた箇所がみられる。

183 は土師器皿である。3 層上部から中部で出土した。184 は瓦器椀である。口径 14.6 cm、器高 3.4 cm をはかる。口縁部内面に沈線をもち、内面のミガキが密で、外面はやや疎らになる。桶葉型Ⅰ-3 型式、12 世紀初めの瓦器椀である。3 層中部から下部から出土した。

185 は染付磁器皿である。内面口縁部には草花文が、口縁部と見込みの境には二重圏線が描かれる。内面見込みにはおそらく 5 弁の花文が描かれる。底部は蛇の目高台で軸割れである。地山の直上から出土した。

186 は機械掘削で比較的上層から出土した。陶器播鉢である。備前焼と思われる。187・188 は東播系須恵器こね鉢である。3 層上部、第 1～2 面間から出土した。

189 は白磁碗である。口縁部を折り返す玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類である。

190 は緑釉陶器皿である。胎土はきわめて精良で器壁も薄く、高台も断面四角形の貼付けの輪高台である。10 世紀前半と思われる。

191 から 197、199 は 11 区から出土した。193 以外はいずれも 3 層より出土した。191 は黒色土器 A 類椀である。口径 14.2 cm、器高 3.3 cm をはかる。園化していないが、10 区よりもう 1 点黒色土器 A 類椀が出土している（写真図版 40-6）。192 は瓦器椀である。口径 14.2 cm、器高 3.4 cm で、191 とほぼ同じ法量である。高台がほとんど形骸化して、和泉型Ⅲ-3 型式、13 世紀初め頃の時期を示す。

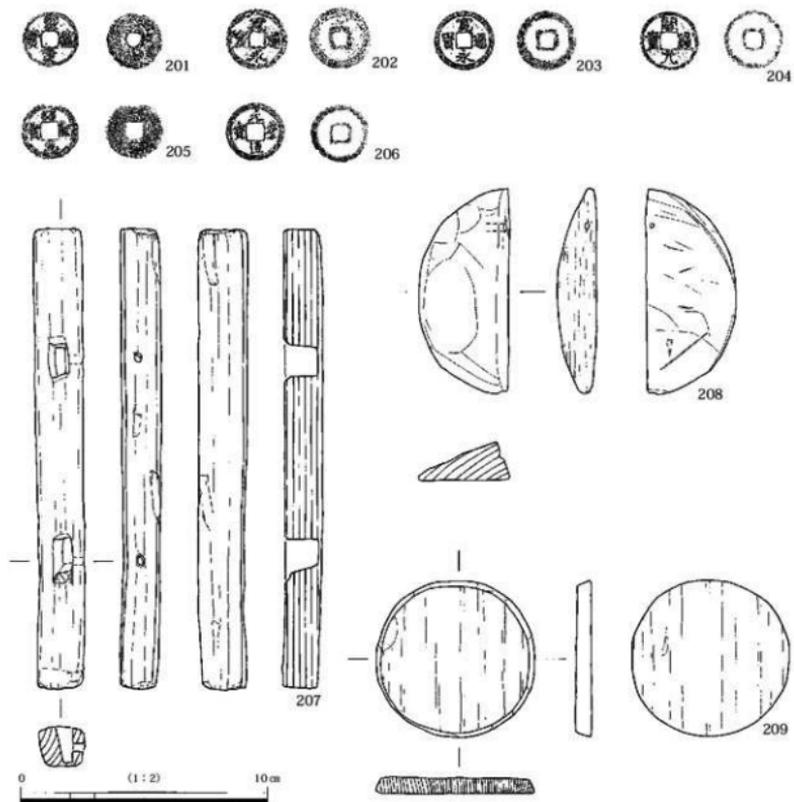
193 から 195 は青磁碗である。いずれも底部の破片である。193 は削り出し高台で、内面見込みに陰刻で雷文か、不均等な放射状にのびる曲線の文様をもつ。龍泉窯系の青磁と思われる。194 は削り出し高台で、見込みに花文が刻まれる。龍泉窯系の青磁碗Ⅳ類である。高台裏は鉄軸が蛇の目状にかかる。195 も削り出し高台で、見込みに花文もしくは雷文をもつ。龍泉窯系の青磁である。194 がやや大きく、时期的にも新しくなる。

196 は陶器の盃である。ほぼ完形である。灰白色の釉薬が施されるが、外面体部下半から高台は無釉である。おそらく唐津焼である。

197 は土師器皿である。ほぼ完形である。左右で高さが極端に違い、いびつな器形をとる。199 は黒色土器 B 類の裏である。口径 16.3 cm をはかる。口縁部はヨコナデによりくぼみ、端部は短くつまみあげる。内面にはハケメを、外面にはミガキを密に施し、器壁は薄く仕上げられている。

198、200 は 12 区から出土した。198 は青磁碗の口縁部片である。龍泉窯鎔蓮弁文碗である。2 層より出土した。

200 は須恵器壺である。体部上半のみで、口縁部から頸部および底部を欠損する。体部最大径が約 17.0 cm で、横に膨らみ、下半はすぼまる断面楕円形状の形をとる。外面はなめらかだが、内面には回転ロクロナデの段が残る。



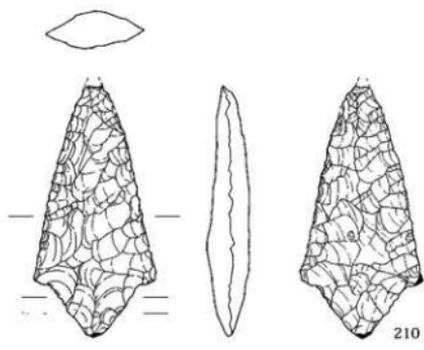
第70図 9～12区出土銭貨・木製品実測図

201 から 205 は 9区から出土した銅銭である (第70図、写真図版46)。

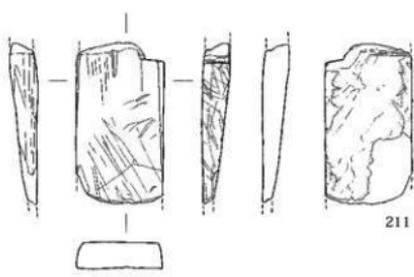
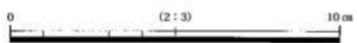
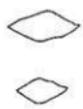
201 は 2層から出土した。北宋銭の熙寧元寶 (初鑄 1068年) である。篆書である。202 は 2層から出土した。寛永通寶 (初鑄 1636年) である。203 は第1面上面から出土した。寛永通寶 (初鑄 1636年) である。202・203 とも無背で、書体から 1668年以降に鑄造された新寛永と思われる。

204 は 3層から出土した。南唐銭の開元通寶 (初鑄 960年) である。真書である。205 は 3層から出土した。北宋銭の紹聖元寶 (初鑄 1094年) である。行書である。206 は 11区の3層から出土した。北宋銭の元豊通寶 (初鑄 1078年) である。行書である。出土銭貨の詳細は表6にまとめた。

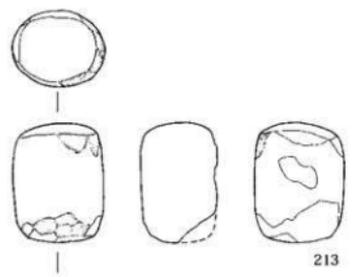
207 から 209 は木製品である (第70図、写真図版42)。207 は 9区の2層から出土した。何らかの部材の一部と考えられる角材状製品である。残存長 20 cm弱、幅、厚みが約 2.0 cmの角材で、1面に長さ 2 cm、深さ 1.5 cm程度のほぞ穴を上下 2箇所穿つ。ほぞ穴に別の角材を組みあわせて使っていたと思われる。この面を表面とすると側面1面には木釘が表面の穴とほぼ同じ位置に 2箇所みられる。



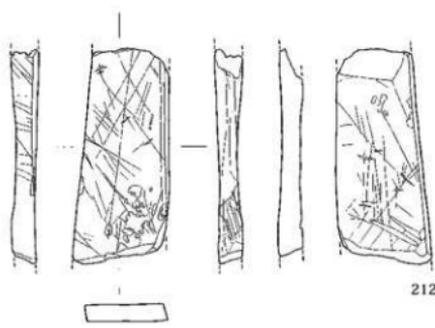
210



211



213



212



第71图 9区出土石器·石製品実測図

208・209は11区の3層より出土した。208は円形の板で約2分の1が残る。直径8.4cmの円形に復元できるが、平らではなく中央が最も高く周縁が最も低い断面凸レンズ形をとる。表面には木を削った加工痕が広く残り、特に周縁は薄くそいで、側板を装着するためかと推定できる加工が施される。

209も円形の板でほぼ完存する。直径6.4cmと208よりやや小さい。208と違ってほぼ平らであるが、上底と下底では下底がやや大きい。曲物底板かと考えられるが、側面に木釘穴が認められない。

210は9区の3層を除去して地山を検出中に出土した。3層中からの出土だが、9区より南の丘陵から谷に向かって流入したと思われる。サヌカイト製の有舌尖頭器である(第71図、写真図版43)。完形で、長さ7.7cm、最大幅3.7cm、厚さ1.3cmをはかる。舌部のつくりだしが明らかになっており、縄文時代早期のものである。有舌尖頭器は縄文時代草創期から早期前半にみられ、槍先に使用したと思われる。身部から茎部へはわずかに内湾しながら移行する。左側縁は両面から、右側縁は片面から縁辺調整をしている。茨木市の塚原B地点遺跡や高槻市の群家川西遺跡から、同様の有舌尖頭器が出土している。

211から213は9区の3層から出土した石製品である(第71図、写真図版45)。

211は砥石で長方形の板状だが、上下端とも欠損する。残存長6.6cm、幅3.5cm、厚さ1.1cmと手に握れるほどの大きさで、目の細かい砂岩なので仕上げ用の砥石と思われる。表面や、2側面には細かい擦痕が多数残る。

212は砥石で長方形の板状だが、上端が欠損する。残存長8.7cm、幅3.6cm、厚さ1.0cmと小さく、目の細かい砂岩なので、仕上げ用の砥石と思われる。法量は213に類似する。表裏面、側面の4面すべてに細かい擦痕が多数残る。

213は小さな円柱状の製品である。長さ4.9cm、幅3.6cm、厚さ3.1cmをはかる。目の詰まった石を上下は縁をつくるよう加工し、磨いて成形したと考えられる。ところどころに剥離がみられる。握るにはやや小さいが、叩き石として使用としたと考える。蓆網の錘(石錘)とも考えられるがその場合は中心に紐を結束する為のくびれや、使用による擦痕が認められるはずだが、見当たらないので、この用途は推測の域をでない。

#### <参考文献>

- 泉拓良・家根祥多 1985 「第3部 考察編 第1章 北白川追分町遺跡出土の縄文土器1 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告書—北白川追分町縄文遺跡の調査—』 京都大学埋蔵文化財センター
- 伊藤栄二 2000 「第12節 栗栖山南墳墓群出土石器の検討」『栗栖山南墳墓群』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博 2008 『讃良部条里遺跡VI』(財)大阪府文化財センター
- 岡田憲一 2008 「編年研究の現状と課題④」『縄文時代の考古学2 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系』 同成社
- 新海正博他編 2003 『粟生間谷遺跡—旧石器・縄紋時代編—』(財)大阪府文化財センター
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 柏書房
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 森原美佐子・合田幸美他編 1992 「小坂遺跡—近畿自動車道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—」 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集4』

## 第5章 総括

### 第1節 千提寺南遺跡における土地利用

これまで第3・4章で千提寺南遺跡の調査成果を大まかに3つの区域に分けてみてきた。そこで、この章では全体を通して、検出した遺構・遺物から千提寺南遺跡の特徴や性格、どういった土地利用をされてきたかをみていきたい。

前述のように、各区によって2面から5面と、調査した遺構面数が異なる。また、遺構面の呼称も調査順にそのつど与えているので、隣接する調査区の対応する遺構面でも名称が異なる。一例を示せば、対応する遺構面が1区第3面と2区第5面となっている。

そこで、各区の遺構面の対応関係をまとめた(表9)。遺構面の呼称は基本的には調査時のままである(4区のみ、東部、中央部、西部と1つの区を3つに細分したため、区の中でも遺構面数が異なる。本書掲載時に4区西部の第4面を第2面として表記した)。対応する遺構面は、隣接する区同士、大きな区域では遺構のつながり具合と層位によりおおよそ判断できたが、それより離れた区域同士になると明確には判断しがたい。

また、表示した遺構面の時期についても、耕土や2層が近世を主体とし、3層が古代末から中世、堆積を除去した地山上の遺構面が縄文時代というおおまかな区別はできる。が、出土遺物が少ないことや、3層の堆積が厚いが、その層の上下に明確な時期差がみられないことなどから、厳密な時期決定はできなかった。

表9 調査区遺構面对応表

東 部			中 央 部									西 部			
1区	2区	3区	4区東部 ～中央東 部	4区中央 西部	4区西部	8区	5区	6区	7区	13区	9区	10区	11区	12区	
第1面 中世～近世	第1・2面 中世～近世 陶器、溝	第1面 近世								第1面 中世～近世	第1面 中世～近世	第1面 近世	第1面 近世	第1面 近世	
第2面 縄文～近世 陶器、土坑	第3面 中世以降 229石列		第7面 中世 溝、ピット 、土坑	第7面 中世 土坑	第1面 中世 410溝、柱	第1面 中世～近世 430溝	第1面 中世 溝	第1面 中世 瓦列	第2面 中世	第2面 中世 1302溝	第1面 中世～近世	第2面 中世 1004藤田	第2面 中世 1004藤田	第2面 中世 1001石列	
	第3面下層 縄文～中世 215土坑物				第2面 中世	第2面 中世									
					第3面 中世	第3面 中世	第2面 中世 土坑	第2面 中世		第3面 中世		第3面 中世 掘削、1002 石列			
	第4面(第 4面下層) 縄文～中世 ?		第2面 中世以前 4ピット、土 坑	第2面 中世以前 4ピット、土 坑	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世以前 4ピット、溝	第2面 中世	第2面 中世	第2面 中世	第3面 中世以前	
第3面 縄文 瓦、土坑	第3面 縄文～中世 瓦、土坑、ピ ット														
第4面 縄文 1ピット															

太字が掲載遺構面、斜字は空欄面

各区の主要遺構面を調査前の地形図に組み込んで、1つの図にまとめた(第72図)。薄いアミフセの部分  
が谷にあたり、3層が厚く堆積していた。それ以外は地山が露出した状態の遺構面の平面図が主である。また、  
縄文時代の遺物が遺構・包含層に限らず複数出土した区域を破線で囲って表した。

これを見ると、調査区が谷部をのぞいて元来山と山間の比較的平坦な地域だったことがよく分かる。また、  
3層の堆積が山裾の伸びてくる狭い範囲に限られることも一目瞭然である。調査対象外となっている箇所は  
地形に沿って棚田が形成されており、1区から13区も調査前はそうであった。近現代の棚田は調査区全域で  
形成されていたが、遺構面のみで見られる中世以前の棚田は部分的に限られる。しかしながら、棚田1枚の区画  
や形状は近現代の棚田とほとんど相違ない。中世やそれ以前からの生産地としての土地利用があり、後世に  
なると整地してその範囲を広げていったといえる。

現代の棚田の水利状況を総合調査において調査し、図示したものがある。この図の水利の方向(青い矢印  
で示してあるもの)だけを抽出し、千提寺南遺跡の調査区と重ね合わせてみた(第73図)。その際、水利に  
関連すると思われる遺構(溝や杭列など)のみを図上におとした。

すると、図中の水の流れは現代の棚田に即したものであるにも関わらず、調査で検出した中世の水利遺構  
とびつたりと合致する。道路など調査区外から調査区内に取水する箇所に、603杭列や707杭列などの水勢  
を調節するための遺構がみられるのである。また、229石列や10・11区の棚田の位置も現代のそれと寸分  
違わないことが分かる。つまり、地形の形状や高低を利用して耕作地を作った結果、中世以降現代まで連続  
して、ほぼ同じ位置に棚田が形成され、取水、排水施設が作られてきたといえる。

耕作遺構の時期決定は難しいが、出土した瓦器や陶磁器、宋銭の年代から、東部の1・2区よりは中央部(3  
~8区、13区)がやや新しく、西部の9~12区はそれよりさらに新しい印象を受ける。つまり、調査区全  
域が一斉に耕作地として土地利用されていたのではなく、東から西へと移動したとも考えられる。それぞれの  
耕作域に対応する生活区域が同時併行していたのではなく、時期を違えて移動していたとも推測できる。

しかし、3層が累層的に堆積し、各区によって検出した遺構面が異なっていたり、銅銭などは使用時期に  
幅があるので、小地区毎に断絶があったのではなく、連続的に耕作地として利用され、近代以降には盛土や  
造成によってよりその面積を広げたと考えられる。ただし、今回の調査地では耕作地ばかりで住居地の検出  
には至らなかった。より離れた地域に当該期の住居地は求められるのだろうか。

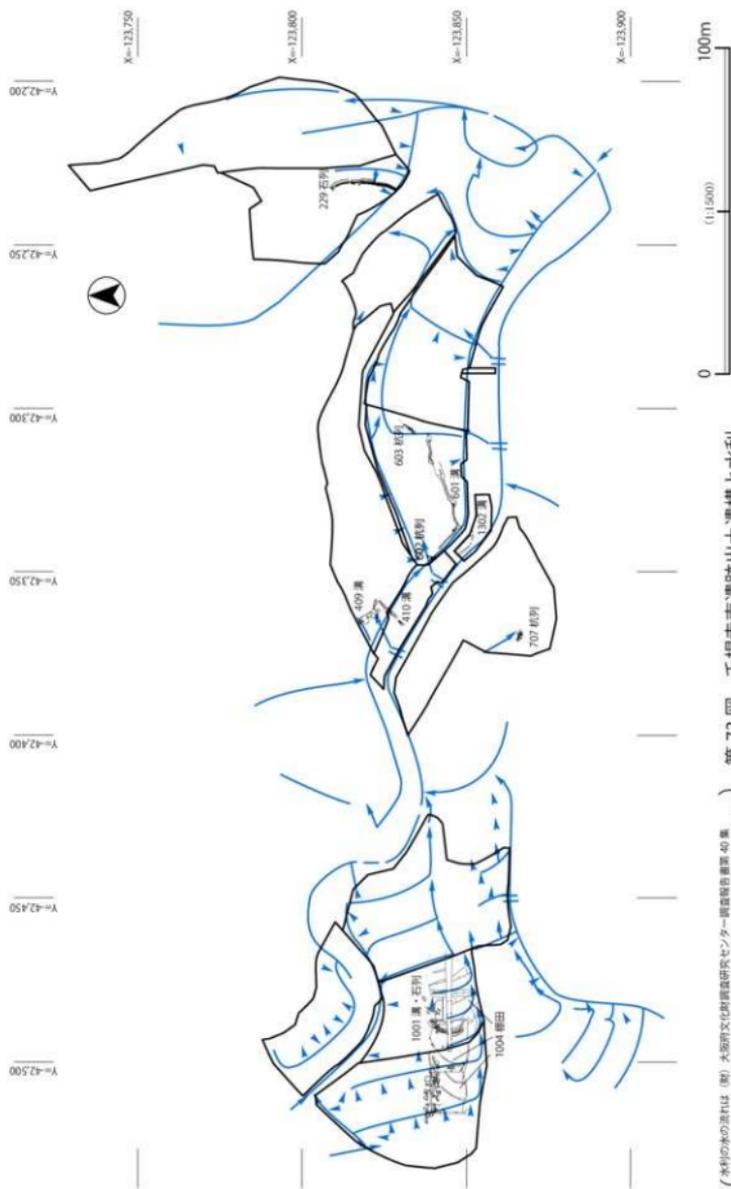
縄文時代の遺構・遺物がみられるのは1区全域と2区の北東部、4区の中央北側、9区の一部に限られる。  
いずれも山に隣接した丘陵地の高いところである。丘陵地を選んで縄文時代の生活区域が形成されていたと  
考えられる。

ただし、1・2区では溝や土坑などの遺構が多数検出され、遺物も土坑中に縄文時代中期末の遺物がまとま  
てみられるが、前期や晩期の土器も出土している。4区ではやや古く、縄文時代早期末から前期初頭の土器  
が主である。9区にいたっては、縄文時代早期の石器が出土したが、土器は皆無で遺構も検出されていない。  
また、土器があることから生活区域と考えるが、検出された遺構は土坑や溝であり明確な住居地などではない。  
本来の住居区域は隣接する山のもっと高いところにあったと考えるのが妥当だろうか。より高い地域で  
の遺構、遺物の有無等は今後の確認調査などの結果を待ちたい。なお、11区や12区に比較的近い、千提寺  
西遺跡の浄土墓地区では、山の山頂部に近世以降集落の土葬墓が形成されていたが、そのために削土等があっ  
たのか縄文時代の遺構、遺物は検出されていない。

縄文時代より後、古代末、中世までは、わずかに弥生土器や古墳時代の須恵器が出土するのみである。こ  
の間は千提寺南遺跡においては、人が積極的に利用する環境になかったといえる。



第72图 全体平面图



第73図 千提寺南遺跡出土遺構と水利

(水利の木の深さは 8m) 本図は文化財調査研究センター調査報告書第 40 巻

(京都 国府文化財部) 南近畿地域の歴史・文化調査報告書「付図No4 水利図より抜粋」

## 第2節 千提寺南遺跡出土縄文土器の評価

### 第1項 215土坑出土縄文土器について

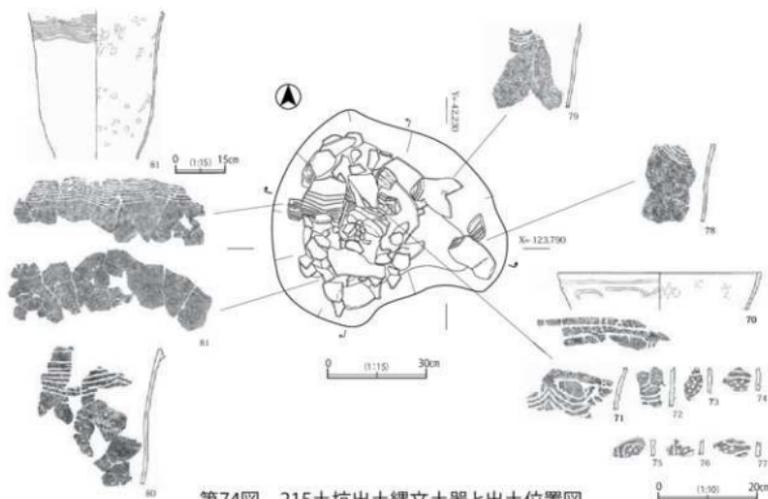
第4章で述べたように、2区の215土坑から数個体の縄文土器深鉢がまとまって出土した。

215土坑は2区の第3面で検出した。位置は2区の北東部、 $X=-123,790$ 、 $Y=-42,230$ 付近で、地山から急激に下降する谷の始まり部分にあたる。周辺には他にも土坑数基が検出されている(第12・16図)。215土坑は長径0.7mで長円形の南東部が抉れたような、不整形形の土坑である(第18図、写真図版7)。検出時の深さは0.15mだが、同位置の上層包含層からも215土坑の遺物と接合する土器が出土しているのので上層は削られ、実際はこれより深かったと思われる。

出土状況図に示した様に、土器がやや西側にかたよって、破片の状態で多数出土した。破片は数cm大のものも、口縁部から胴部へと続いて数十cm大のものもあった。土坑内には焼土や炭化物は認められなかった。

この土坑から複数個体の縄文土器が出土し、あらためて出土状況を図に示した(第74図)。文様のある口縁部が中心に集まっているように見受けられるので、直立正置していた土器が中に倒れこんだ推測が一応は成り立つ。可能性がある79と78は同一個体の可能性が高いので、近い場所にあるのも納得できる。

ところが、これらの土器を復元したところ、最低5個体あることが確認出来た(第61・62図、写真図版30～32)。加えて、遺物を接合してみると、最も器形を復元できた81でも口縁部から胴部下半までしか残っておらず、他のものも口縁部から胴部上半と、底部は全く出土していない。つまり、完形ではない土器が215土坑に入っていたと考えられる。また、口縁部と胴部の間に巡らされた波状文あるいは連弧文と口縁上端との間の区画帯が、70や71のような半円状のもの他、72から77のような刺突文で表現された文様帯の破片も出土している。これらは70や71の一部になる可能性も否定できないが、70や71との接合点がみつけられず、また、これに接合する体部もなかった。つまり、完形の土器が埋納後破損したのでなく、破



第74図 215土坑出土縄文土器と出土位置図

片の状態で215土坑に入れられたと考えられる。

また、215土坑周辺の他の土坑から遺物は出土していない。これらのことから、215土坑は意図的に土器を埋納した土坑でも、土器箱などの性格をもった土坑ではない、と考えるほうが妥当だろう。それでは、215土坑は土器を廃棄するための土坑、あるいは破損した土器を埋めた土坑だったのか。これも全くバラバラの状態では埋まっていたのではないため、一概に言えない。出土した土器はすべて胴部下半や底部がないので絶対的でないが、残存する部位には煤や炭化物の付着は認められず、使用した痕跡がなかった。

なお、215土坑から出土した縄文土器は、いずれも縄文時代中期末の北白川C式に相当する深鉢である。時期的にも揃った、きわめて良好な一括資料と言えるだろう。2区からは遺構、包含層共に縄文時代早期末から前期初頭、あるいは前期、晩期など様々な時期の縄文土器が出土している。また、同じ縄文時代中期末の北白川C式土器は1・2区から数点出土している(第60図、写真図版23)。ただし、出土位置が不明確なものや遺構に伴わないものばかりで、215土坑との関連を認めるのは難しい。

215土坑のみが一括性のある土器を検出した土坑として他の土坑と区別されるが、遺構の性格や機能は現状において、不確定といわざるを得ないだろう。

## 第2項 千提寺南遺跡出土縄文土器の時期細分と特徴

大阪府下における縄文土器の出土量は、東日本に比べるとときほど多くない。良好でまとまったあり方を示す縄文土器資料はなおさらである。それは大阪府下の大規模発掘が河内平野の低湿部に集中していたことや、縄文時代の遺跡は大阪平野をとりまく山地周辺で発見されることも関係していよう。北河内や生駒山麓を中心とする地域などで、比較的好データの縄文遺跡が知られていたが、山間部でも北摂山地は報告資料も少ない。これまで今回の調査地近隣では、試掘や採取による資料しかなかった(第75図)。千提寺南遺跡からほど近い茨木市の泉原の大中第1地点、大中第2地点、堂の前地点や佐保の田中代地点で縄文土器が免山篤氏によって採取され、資料として紹介されている(『粟生間谷遺跡』2003大阪府文化財調査研究センター)。

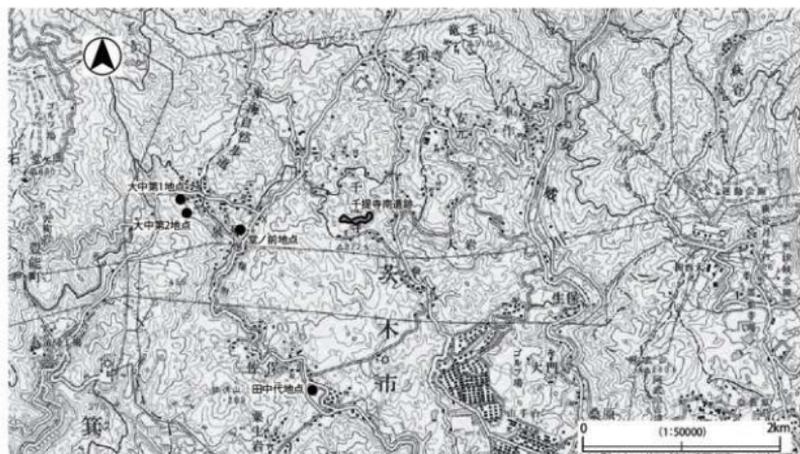
今回の新名神高速道路建設に伴って、箕面市、茨木市、高槻市という大阪府北部の北摂地域で大規模な発掘調査が行われた。それらの調査によって、当地域の縄文時代遺跡の解明が進むこととなった。この項では出土した縄文土器の特徴や時期的な変遷を、近隣で出土した資料と対比して総括したい(第76図)。

千提寺南遺跡周辺では、縄文時代早期後半、高山寺式の体部小片が田中代地点や大中地点から確認されているのが最も古い。次いで、堂ノ前地点や田中代地点で押し引き刺突文の穂谷式の体部小片が、堂ノ前地点では黄鳥式の体部小片が出土している。綾杉押型文であり、千提寺南遺跡のとは時期幅を考慮すべきでやや異なる。

千提寺南遺跡出土資料では縄文時代早期末から前期初めの土器がまとめて出土している(58・59・83・61・63など)。胴部は厚く、角閃石を含み赤がかってみえるのが特徴である。角閃石が少なくなるので前期に近いものもある(64)。また、口縁部で垂下沈線を3条もつもの(36・37・44)も早期から前期と時期幅を考慮すべきものでやや新しくなる。

縄文時代前期では前期後葉の北白川下層Ⅲ式の口縁部小片が1点出土している(98)。また、底部片が数点出土する(69、92～94)。堂ノ前地点でも前期の破片が出土している。

やや時期的な断絶があって、縄文時代中期末は前述の215土坑から北白川C式深鉢の一括資料があげられる(70～81)。他にも1区や2区の包含層などからも北白川C式の土器が出土しており、沈線の入れ方にやや新しい様相をもつものもある(49)。胴部は前期に比べると薄くなり胎土も細かくなって、黄褐色から茶褐色を呈するものが多い。北白川C式の土器は、田中代地点や大中地点でもみられる。いずれも多重沈線による重弧文状の文様や波状沈線をもつ。



(国土地理院50,000分の1地図「京都西南部」を使用)

第75図 国際文化公園都市試掘地点及び免山氏遺物採集地点(センター報告書第84集144をもとに作成)

千提寺南遺跡では、縄文時代後期においては口縁部片などがみられる(88～91)。田中代地点では後期初頭の深鉢口縁部や中津式、北白川上層式の破片が出土している。口縁部などでは、千提寺南遺跡の土器とよく似る資料がみられる。

続いて千提寺南遺跡では、縄文時代晩期において突帯文土器の口縁部等が3点出土している(95～97)。

縄文時代晩期の土器を保留にするならば、周辺の遺跡から採集された縄文土器は細片ながら、千提寺南遺跡のものに似た様相、似た時期を示すことが分かった。つまりは、この周辺一帯の普遍的状況を千提寺南遺跡でもほぼ示していることが解明できた。また、前期と中期末の間などに一部断絶はあるものの、早期末という早い段階からほぼ継続して人間の生活痕跡が確認できた。今後、住居跡などの遺構が発見できれば、より遺跡の解明につながるであろう。なお、田中代地点ではサヌカイト製の石鎌が、堂ノ前地点では平基無茎式石鎌や尖頭器が、大中地点でもチャート製の平基無茎式石鎌などが出土している。石器においても同様の状況を示しているといえるだろう。

〔註〕縄文土器の時期細分については、河本純一(公益財団法人大阪府文化財センター)の教示を得た。

〈参考文献〉

井口直司 2012 『縄文土器ガイドブック』(株)新泉社

泉拓他編 1985 『京都大学埋蔵文化財調査報告書—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財センター

井上智博 2008 『(財)大阪府文化財センター調査報告書第173集 讃良部条里遺跡VI』(財)大阪府文化財センター

新海正博他編 2003 『第12章 試掘・免山氏資料』(財)大阪府文化財センター調査報告書第84集 粟生間谷遺跡—旧石器・縄紋時代編—(財)大阪府文化財センター

免山馬 1999 『第8章 考古資料よりみた清漢周辺』『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター

森屋美佐子・合田幸美他編 1992 『小阪遺跡—近畿自動車道松原京津線建設に伴う発掘調査報告書—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター



表1 縄文土器観察表

( ) は報告者、( ) は得持名を添す

図号 番号	得持 番号	調査 区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	構成	色調	備考
—	59	33	1	第3層 49土坑	縄文土器	13.8	3.7	0.8		胎 径2mm以下の胎土、径1mm以下の 胎土、赤褐色を含む	良	外：7.5954黄褐色 内：10964 IC II-1黄褐色	
—	59	34	1	第3層 52ピット	縄文土器	13.9	3.3	1.2		胎 胎土の胎土、径2mm以下の赤褐色 を含む	良	外：7.5954黄褐色 内：7.5954黄褐色	
33	59	35	1	第3層 53土坑	縄文土器	15.4	3.9	1.3		胎 径1mm程度の胎土を少し含む	良	外：5954 IC II-赤褐色 内：2.5944 IC II-赤褐色	早期～前期
33	59	36	1	第3層 71ピット 上位 (上面)	縄文土器	16.3	7.8	1.2		胎 径2mm以下の胎土、赤褐色、径 1.5mm以下の胎土、胎土の胎土を含む	良	外：10964 IC II-黄褐色 内：10964 IC II-黄褐色	早期～前期
33	59	37	1	第3層 71ピット 上位 (上面)	縄文土器	7.8	15.0	0.8		胎 径3mm以下の胎土、チャート、径 2mm以下の胎土を含む	良	外：7.5953 IC II-黄褐色 内：10964 IC II-黄褐色	早期
33	59	38	1	第3層 71ピット 付出	縄文土器	15.2	15.6	1.0		胎 径1～4mm程度の胎土を含む	良	外：5954 IC II-赤褐色 内：5954 IC II-赤褐色	早期～前期
—	59	39	1	第3層 71ピット 上位 (上面)	縄文土器	2.5	13.0	1.0		胎 径2mm以下の胎土、胎土の胎土、 径3mm以下の赤褐色を含む	良	外：10964 IC II-黄褐色 内：10953 IC II-黄褐色	
—	59	40	1	第3層 71ピット 上位 (上面)	縄文土器	12.3	12.6	0.8		胎 径2mm以下の胎土、径1mm以下の 胎土を含む	良	外：10973 IC II-黄褐色 内：7.5954黄褐色	
34	60	41	1	機材掘削	縄文土器	3.9	15.7	1.0		胎 胎土～径7mm程度の胎土、チャート を含む	良	外：10963 黄褐色～灰白色 内：10974 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	42	1	機材掘削	縄文土器	7.8	7.3	1.3		胎 胎土～径3mm程度の胎土を含む	良	外：2.5953 黄褐色 内：10964 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	43	1	下段3層	縄文土器	13.7	15.1	0.8		胎 胎土～径3mmの胎土、径1～2 mmの胎土を多く含む	良	外：10964 IC II-黄褐色 内：10964 黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	44	1	下段3層	縄文土器	14.4	14.7	0.9		胎 胎土～径3mmの胎土、径1～2 mmの胎土を含む	良	外：10954 黄褐色 内：10974 IC II-黄褐色	
34	60	45	1	下段3層	縄文土器	18.5	17.0	0.8		胎 胎土～径2mmの胎土、径2～5 mmの胎土を多く含む、径3mmの 胎土を含む	良	外：10964 黄褐色 内：10963 黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	46	1	下段3層	縄文土器	15.9	17.3	0.8		胎 胎土～径3mmの胎土を含む、胎土 ～径4mmの胎土を多く含む	良	外：10964 黄褐色 内：10974 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	47	1	下段3層	縄文土器	15.9	13.6	0.7		胎 胎土～径3mmの胎土を多く含む、 径1～3mmの胎土を含む	良	外：10964 IC II-黄褐色 内：10973 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	48	1	上段3層	縄文土器	15.4	16.7	1.2		胎 径3mm以下の胎土、胎土の胎土、 径2.5mm以下の胎土を含む	良	外：7.5954黄褐色 内：7.5954黄褐色	中期末、北山川C式
34	60	49	1	第3層下層 ～5～10cm	縄文土器	15.9	14.9	0.9		胎 径1～3mmの胎土を含む、胎土 の胎土を少し含む	良	外：2.5944 IC II-黄褐色 内：10964 IC II-黄褐色	中期、やや新しい*
—	60	50	1	下段3層	縄文土器	12.6	12.8	0.8		胎 胎土の胎土、径2mmの胎土を含む	良	外：10974 IC II-黄褐色 内：10973 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
—	60	51	1	下段3層	縄文土器	13.0	12.9	0.7		胎 径1mmの胎土を含む	良	外：10951 黄褐色 内：10941 黄褐色	中期末
—	60	52	1	下段3層	縄文土器	12.4	12.3	0.7		胎 胎土～径1mmの胎土、径1～2 mmの胎土を含む	良	外：10954 黄褐色 内：10974 黄褐色	中期末、北山川C式
—	60	53	1	下段3層	縄文土器	11.8	12.2	0.6		胎 胎土～径1mmの胎土、径1mmの 胎土を含む	良	外：10964 黄褐色 内：10974 黄褐色	中期末、北山川C式
—	60	54	1	下段3層	縄文土器	11.5	14.2	0.5		胎 胎土～径1mmの胎土、径1mmの 胎土を含む	良	外：10964 黄褐色 内：10974 IC II-黄褐色	中期末、北山川C式
—	60	55	1	下段3層	縄文土器	13.4	14.0	0.8		胎 胎土の胎土、胎土～径1mmの胎土を 多く含む、胎土の胎土を少し含む	良	外：7.5974黄褐色 内：7.5954黄褐色	中期
34	60	56	1	第3層下層 ～5～10cm	縄文土器	14.2	14.3	0.7		胎 径1～3mm程度の胎土を少し含む	良	外：2.5944 IC II-黄褐色 内：2.5953 黄褐色	中期
—	60	57	1	第3層下層 ～5～10cm	縄文土器	15.0	16.4	0.8		胎 胎土～径2mmの胎土を含む	良	外：10964 黄褐色 内：2.5944 IC II-黄褐色	中期
34	60	58	1	下段3層	縄文土器	14.2	16.0	1.3		胎 径3mm以下の胎土、径2mm以下の 胎土を含む	良	外：5954 黄褐色 内：7.5964 黄褐色	早期～前期
34	60	59	1	下段3層	縄文土器	15.8	15.2	0.8		胎 径1～2mm程度の胎土を少し含む	良	外：5954 IC II-赤褐色 内：5954 IC II-赤褐色	早期～前期
34	60	60	1	下段2～1、2～2 層群をはずし	縄文土器	16.4	17.1	0.9		胎 胎土の胎土、胎土を含む	良	外：5954 黄褐色 内：5954 黄褐色	早期～前期
—	60	61	1	下段3層	縄文土器	17.8	16.7	1.2		胎 胎土	良	外：2.5954 黄褐色 内：7.5954 IC II-黄褐色	早期末
—	60	62	1	下段3層	縄文土器	15.2	13.6	1.3		胎 胎土の胎土を含む、胎土の胎土を少し 含む	良	外：5954 黄褐色 内：5954 黄褐色	早期～前期

初期 番号	種別 番号	階数 番号	出土位置	基礎 種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	口径 (cm)	高さ (cm)	仕様	材料	色番	備考
34	60	03	1	下段3層	碇文土留	38.5	13.7	1.3		部 鋼線-1mm幅の鋼線を少し含む	鉄	内:15964 4.2.2.1-黄色 内:15964 4.2.2.1-黄色	甲種土-1前期
34	60	04	1	第3面	碇文土留	38.4	38.8	0.9		部 径4mm以下の石を少含む	鉄	内:15964 4.2.2.1-黄色 内:15964 4.2.2.1-黄色	甲種土-1前期
34	60	05	1	第3面	碇文土留	3.8	9.0	1.1		部 径3mm以下の石を、径4mm以下 の角石、鋼線の鋼線を少含む	鉄	内:15964 4.2.2.1-黄色 内:15964 4.2.2.1-黄色	甲種土-1前期
-	60	60	1	第3面	碇文土留	5.8	15.0	0.8		部 径1mm幅の鋼線を少含む	鉄	内:17394 4.2.2.1-褐色 内:15964 4.2.2.1-黄色	甲種土-1前期
34	60	07	1	第3面下層	碇文土留	6.3	5.1	1.3		部 径3mm以下の石を、径2.5mm以下 の角石、径2mm以下の鋼線を 少含む	鉄	内:17394 4.2.2.1-褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	甲種土-1前期
34	60	08	1	第3面下層 第3面-20cm	碇文土留	5.2	4.2	0.9		部 径3mm以下の角石、鋼線の鋼線を 少含む	鉄	内:15964 4.2.2.1-黄色 内:15964 4.2.2.1-黄色	甲種土-1前期
33	60	09	1	第3面下層	碇文土留				(6.5)	(3.7)		内:12395 4.2.2.1-黄褐色 内:12392 4.2.2.1-黄褐色	鉄鋼
32	61	70	2	第3面 215土坑 深鉄	碇文土留 深鉄				90.0	37.5		内:12391 黄褐色 内:12392 黄褐色	中級土、北山川C式
32	-	-	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄							内:12391 黄褐色 内:12392 黄褐色	
32	61	71	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	38.9	17.5	0.8				内:10951 黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
32	61	72	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	38.1	15.2	0.9				内:10952 黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
32	-	-	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄							内:10951 黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	
32	-	-	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄							内:10951 黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	
33	61	73	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	5.4	13.5	0.9				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	74	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	4.9	15.4	0.8				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	75	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	3.5	15.8	0.8				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	76	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	3.3	15.6	0.7				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	77	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	3.4	17.5	0.9				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	78	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	15.6	10.2	0.8				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	79	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	15.9	14.0	0.7				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
33	61	80	2	第3面 215土坑	碇文土留 深鉄	20.5	10.3	1.5				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
30	62	01	2	第3面 215土坑 深鉄	碇文土留 深鉄				81.2	45.1		内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	中級土、北山川C式
-	63	02	2	2層 (第2~3面間)	碇文土留	4.0	4.9	1.1				内:17394 4.2.2.1-褐色 内:10942 4.2.2.1-黄褐色	
35	63	03	2	2層 (第2~3面間)	碇文土留	11.5	3.8	1.6				内:17394 4.2.2.1-褐色 内:17394 4.2.2.1-褐色	甲種土-1前期
35	63	04	2	2層 (第2~3面間)	碇文土留	6.0	6.9	1.2				内:17394 4.2.2.1-褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	甲種土-1前期
35	63	05	2	3層上段 (第3~4面間)	碇文土留	7.0	6.0	1.0				内:17394 4.2.2.1-褐色 内:17394 4.2.2.1-褐色	甲種土-1前期
35	63	06	2	3層 (パンダン-埋め込み)	碇文土留	5.2	4.7	0.7				内:17394 4.2.2.1-褐色 内:17394 4.2.2.1-褐色	甲種土-1前期
35	63	07	4	2層 (第1~2面間)	碇文土留	5.3	5.7	1.0				内:10944 4.2.2.1-褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	甲種土-1前期
35	63	08	2	3層 (第4~5面間)	碇文土留	7.6	7.1	0.9				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	甲種土-1前期
35	63	09	2	3層 (第4~5面間)	碇文土留	5.3	5.6	0.9				内:10950 4.2.2.1-黄褐色 内:10950 4.2.2.1-黄褐色	甲種土-1前期

( ) は発見済、〔 〕 は保存済を意味す

図面番号	採出場所	遺物番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎土	構成	色調	備考
35	63	90	2	2層 (第2～3層間)	縄文土器	5(3)	3(6)	1.0			灰 厚1～2mmの表面を多く含む。底1mmの底面を含む。	灰	外: 10B57に似る褐色色 内: 10B42 灰黒褐色	中期末
35	63	91	4	2層 (マンガン含有、中央部1層目)	縄文土器	5(8)	6(1)	1.0			灰 緑色、角閃石を含む。	灰	外: 10B65～10B63に似る褐色色 内: 10B43に似る褐色色	中期
33	63	92	3	3層 (第4～5層間 (マンガン層付表面))	縄文土器 深鉢				13.4	16.4	中中層 胎壁一帯3mmの表面を多く含む。胎壁一帯3mmの胎面を多く含む。	灰	外: 10B94に似る褐色色 内: 10B54に似る褐色色	前期
33	63	93	4	2層 (マンガン含有、中央部1層)	縄文土器				14.2	18.0	灰 厚1mm大の胎底、胎面を含む。	灰	外: 10B54に似る褐色色 内: 10B43に似る褐色色	前期
33	63	94	4	2層 (第1～2層間)	縄文土器				12.2	18.0	灰 胎壁一帯3mmの表面、胎底、胎面、厚1～2mm大の胎底、胎壁の表面を含む。	灰	外: 10B57に似る褐色色～10B65 明褐色 内: 10B54に似る褐色色～10B43 灰黒褐色	前期
35	63	95	4	2層 (第1～2層間)	縄文土器 深鉢	4(9)	6(6)	1.3			胎 胎壁一帯3mmの表面を含む。胎壁一帯3mmの胎面を多く含む。	灰	外: 10B64に似る褐色色 内: 10B54に似る褐色色	前期
35	63	96	2	3層 (第4～5層間)	縄文土器	3(0)	3(0)	1.3			中中層 厚1～2mmの表面、厚1～2mmの胎面を含む。	不詳	外: 10B72に似る褐色色 内: 10B62 灰褐色	前期
35	63	97	2	3層 (第4～5層間)	縄文土器	7(3)	3(0)	0.8			胎 胎壁一帯3mmの表面を多く含む。胎壁一帯3mmの胎面を少し含む。	灰	外: 10B57 灰褐色 内: 10B63 オリーブ色	前期
35	63	98	4	2層 (第1～2層間)	縄文土器	4(2)	14(3)	0.5			胎 厚1～3mm大の胎面を含む。	灰	外: 10B54 黄褐色 内: 10B66 明褐色色	前期か

表2 土器観察表

口径、底径の ( ) は発見済、〔 〕 は保存済、胎土の ( ) は保存済を示す

図面番号	採出場所	遺物番号	調査区	出土位置	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口径率	胎土	構成	色調	備考	
36	57	1	1	1層 (南平) (焼結部なし)	陶器 ミニチュア鉢鉢	(約) 6.0	(約) 1.9		口径率小	灰	胎	外: 10B46 赤褐色 内: 10B43に似る褐色色	ロクロ形成	
36	57	2	2	2層 (焼結部なし)	陶器 皿	(2.7)	(2.8)	1.4		灰	胎 胎壁の表面をわずかに含む。	灰	外: 10B74 黄褐色 内: 10B54 黄褐色	回転ロクロ手形成
36	57	3	2	2層 (第1～2層間)	磁器 (白磁) 皿	(2.5)	(5.4)	1.4		灰	胎	外: 胎壁20% 灰白色、胎底20% 灰白色 内: 10B22 灰白色		
36	57	4	2	2層 (第1層付表面)	陶器 おろし皿	(1.6)	(7.0)	1.9		灰	胎	外: 10B73 緑オリーブ灰色 内: 10B67 明褐色色		
36	57	5	2	2層 (第2～3層間)	陶器 皿	(3.4)	4.2	1/2		灰	胎	外: 10B74 黄褐色 内: 10B74 黄褐色	内外面ともロクロナデ	
36	57	6	2	2層 (第2～3層間)	民陶陶器	(3.8)	3.6	1/3		不詳	胎	外: 10B62 灰褐色 内: 10B71 灰白色		
36	57	7	2	2層 (第2～3層間)	陶器 皿	(3.7)	(4.4)	1/2		灰	胎	外: 胎壁70% オリーブ灰色、胎底10% 灰に似る褐色色 内: 10B43 緑オリーブ色		
36	57	8	2	2層 (第2～3層間)	灰土器 鉢	(2.5)	(8.4)	1/4		灰	胎	外: 灰白色 内: 灰白色	胎台部に工具痕有り	
36	57	9	2	2層 (第2～3層間)	瓦器 鉢	(2.4)	(3.5)	(3.2)	1/6	灰	胎	外: 灰白色 内: 灰白色		
36	-	-	2	2層 (第2～3層間)	磁器 (白磁) 皿		(3.2)		7	灰	胎	外: 10B75 黄褐色 (胎面褐色が著しく黄褐色を帯びる) 内: 10B72 灰褐色		
-	57	10	2	2層 (第2～3層間)	土師器 皿	(8.6)	(1.4)		1/3	灰	胎 胎壁の表面を少し含む。	灰	外: 10B43に似る褐色色 内: 10B66 褐色	
-	57	11	2	2層 (焼結部なし)	縄文土器 瓦器 鉢	(9.2)	(4.2)		幅小	灰	胎 厚2mm以下の表面を含む。	灰	外: 10B62 灰黒褐色 内: 10B62 灰黒褐色	
37	57	12	2	2層 (第2～3層間)	土師器 鉢	(7.6)	(7.7)		口径率1/7	灰	胎 胎壁の表面、厚1mmの胎面を少し含む。	灰	外: 10B76 褐色 内: 10B66 褐色	
-	57	13	2	2層 (第2～3層間)	灰土器 鉢	(30.0)	(4.3)		口径率1/70以下	灰	胎	外: 灰白色 内: 10B61 灰白色	灰土器に似る	
36	57	14	2	3層 (第4～5層間)	瓦器 鉢	(4.3)	(4.6)		1/4	灰	胎	外: 灰白色 内: 灰白色		
36	57	15	2	3層 (第4～5層間)	陶器 皿	(11.9)	(3.4)	(4.9)	1/3	灰	胎	外: 胎壁10% 灰に似る褐色色、胎底25% 灰褐色 内: 10B64に似る褐色色		
-	57	16	2	3層 (第4～5層間)	土師器 皿	(10.0)	(1.5)		1/3	灰	胎 胎壁の表面、厚2mmの胎面を少し含む。	灰	外: 10B74に似る褐色色 内: 10B75 褐色	
36	57	17	2	3層 (第4～5層間)	磁器 (白磁) 皿	(7.2)	(3.1)		口径率1/70以下	灰	胎	外: 10B71 灰白色 内: 10B71 灰白色		
-	57	18	2	3層 (第4～5層間)	土師器 皿	(10.0)	(2.0)		1/7	灰	胎 胎壁一帯3mmの表面を少し含む。胎1mmの胎面を含む。	灰	外: 10B67 黄褐色 内: 10B73に似る褐色色	

□ 埋戻し ( ) 埋戻し ( ) 埋戻し ( ) 埋戻し ( ) 埋戻し ( )

区画 番号	棟別 番号	階数 番号	階数 記	出土地名	産種	口径 (cm)	最高 (cm)	直径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
36	57	19	2	3層 (第4～5区間)	磁器(青磁) 類	(13.7)	(2.6)		□口径 1/10 以下	磁	良	外: 50%以上グリーン灰色 内: 50%以上グリーン灰色	陶器製茶器棟文庫
37	57	20	2	3層	漆器磁 器	(33.4)	(6.0)		□口径 1/10 以下	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	漆器系ごみ箱
37	57	21	2	3層 (第4～5区間)	漆器磁 器	(23.8)	(4.4)		□口径 1/10 以下	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	漆器系ごみ箱
37	57	22	2	3層 (第4～5区間)	瓦質土器 磁器	(22.5)	(5.0)		□口径 1/10	磁	不良 (いぶし 焼され ない)	外: 25%以上 内: 25%以上	
37	57	23	2	3層 (第4～5区間)	瓦質土器 磁器	(8.8)	(3.4)		□口径 1/6	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
-	57	24	1	下段3層	粉生土器 器	(3.5)	(5.0)		7 径1mmの破片を少し含む	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	内面に工具痕有り
37	57	25	2	3層 (第4～5区間)	土師系土器 磁器				7 径1mmの破片を少し含む。径1～2mmの破片を含む	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	最大長4.8cm、最大幅5.0cm、最大厚1.2cm 端のたき口(底部部分)
37	57	26	1	下段3層	粉生土器 器	(4.8)	(0.7)		7 径2mmの破片、石片を含む	磁	良	外: 10%以上 内: 25%以上	
-	57	27	2	3層 (第4～5区間)	粉生土器 器	(2.5)	(6.4)		1/10 径1mmの破片を含む。径1mmの破片を少し含む	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	
37	64	99	4	3層 (第4区間直)	瓦器 類	(12.8)	(3.5)		□口径 1/6	磁	不良 (いぶし 焼の中 不整)	外: 10%以上 内: 10%以上	内面に工具痕有り
37	64	100	4	3層 (トレンチ下層)	瓦器 類	(12.4)	(2.4)		1/5 □口径	磁	不良 (いぶし 焼不整)	外: 25%以上 内: 25%以上	
-	64	101	4	第1層 410 溝	土師系 器	(15.0)	(2.4)		1/10 径1mmの破片を少し含む	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	
-	64	102	4	3層 (トレンチ下層)	土師系 器	(7.6)	(1.2)		1/4 □口径	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	
37	64	103	4	2層 (第1～2区間)	土師系 器	(14.9)	(8.9)		□口径 1/5	磁	良	外: 25%以上 内: 10%以上	
36	64	104	3	溝底砂層直	特殊陶器 類	(2.1)			□口径 1/10	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	内外面とも凹陥クワ口形成
37	64	105	4	3層(第1～4区間) 西部セクションベ ルト	漆器磁 器	(29.6)	(3.6)		□口径 1/10	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	漆器系ごみ箱
37	64	106	4	3層 (第2～3区間)	瓦質土器 磁器	(19.5)	(4.5)		1/10 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 25%以上	
38	64	107	5	3層	瓦器 類	(11.0)	(2.7)		□口径 1/4	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
39	64	108	5	3層 (第2～3区間)	瓦器 類	(9.4)	(1.8)		□口径 1/6	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
38	64	109	5	3層	土師系 器	(7.8)	(1.6)		1/2 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 25%以上	内面に工具痕有り
38	64	110	5	3層 (第2～3区間)	土師系 器	(8.4)	(1.0)		1/4 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
38	64	111	5	3層	陶器 類	(4.2)			□口径 1/6	磁	不良 (中層 破片、石片、角片を含む)	外: 10%以上 内: 25%以上	陶器類
38	64	112	5	3層	土師系(瓦質 土器の構成不 良の可能性も)	(16.2)	(5.0)		1/10 以下 □口径	磁	不良	外: 10%以上 内: 10%以上	
-	64	113	5	3層	瓦質土器 磁器	(14.6)	(4.6)		1/10 以下 □口径	磁	不良 (いぶし 焼され ない)	外: 10%以上 内: 10%以上	
39	64	114	6	3層中～下部 ( $V = 42,311$ ライ ン 位置)	瓦器 類	(15.4)	(4.4)	(4.5)	1/4 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
-	64	115	6	3層上部 (第1～2区間)	土師系 器	(12.6)	(3.9)	(4.6)	1/10 □口径	磁	良	外: 25%以上 内: 25%以上	
38	64	116	6	3層 (第2～3区間)	瓦器 類	(11.1)	(3.0)		1/5 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	
-	64	117	6	3層上部 (第1～2区間)	瓦器 類	(11.8)	(2.8)		1/4 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	内面に工具痕有り
38	64	118	6	3層中～下部 ( $X = 12,340$ ライ ン、溝の東部直)	瓦器 類	(1.8)	(4.8)	(1.5)	1/5 □口径	磁	良	外: 10%以上 内: 10%以上	

□：埋存、○：埋存程度、△：埋存程度、◇：埋存程度

図面 番号	併記 番号	測点 番号	調査 区	出土位置	遺物	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	埋存率	出土	産地	色調	備考
38	64	119	6	3層 (K=123.845ライ ン 横溝)	磁器(青磁) 皿		(34)	(36)	1/10	部	中年代	外: 黒褐色250℃1層オーブ染色 黒地 23962 灰褐色 内: 23971 黒オーブ染色	
38	64	120	6	3層中部 (第2~3層間)	土師器 皿	(9.0)	1.2		1/4	部	部	外: 23982 灰褐色 内: 23982 灰褐色	
—	64	121	6	3層最下部 東北ア7E皿 (Y=42.315ライン横溝)	土師器 皿	(8.0)	1.0		1/4	部	中年代	外: 23981 灰褐色~23982 粉褐色 内: 23982 灰褐色~23982 灰褐色	
—	64	122	6	3層 (第2~3層間)	土師器 皿	(9.1)	1.3		1/5	部	部	外: 23972 薄褐色 内: 23972 灰褐色	
38	64	123	6	3層上部 (第1~2層間)	瓦葺土器 鉢	(12.9)	(4.4)		1/10 以下	部	埋存	外: 灰褐色 内: 灰褐色	
38	64	124	6	3層中部 (第2~3層間)	須恵器 鉢	(20.0)	(3.7)		1/10	部	部	外: 灰褐色 内: 灰褐色	埋存品2枚
38	64	125	6	3層 (第2~3層間)	須恵器 鉢	(25.0)	(3.8)		1/10 以下	部	部	外: 23971 灰褐色~23971 灰褐色 内: 23971 灰褐色	埋存品2枚
38	64	126	6	3層上部	陶器 磁鉢	(32.0)	(3.7)		1/10	部	部	外: 23982 灰褐色~23982 灰褐色 内: 23982 灰褐色	埋存品 埋り目 (7~8巻まで1対1?)
39	65	127	7	2層	磁器(赤付) 皿	(10.0)	5.5	(3.6)	1/5	部	部	外: 100%1 粉褐色 染付 50%1 黄褐色 23971 灰褐色 内: 100%1 灰褐色	
39	65	128	7	2層	陶器 鉢	(8.6)	(5.5)		1/10	部	部	外: 23982 灰褐色~23982 灰褐色 内: 23982 灰褐色	埋存品
39	65	129	7	2層+3層 (東北トレンチ)	磁器(白磁) 皿	(15.7)	(2.1)		1/10 以下	部	部	外: 23981 灰褐色 内: 23981 灰褐色	
38	65	130	7	第3層特定	瓦葺 鉢	(14.8)	(4.6)		1/10	部	部	外: 灰褐色 内: 灰褐色	
—	65	131	7	2層+3層 (東北トレンチ)	土師器 皿	(8.2)	(1.3)		1/4	部	部	外: 23984 灰褐色 内: 100%1 灰褐色	内底面の凹凸が、一般化した土師器有り
—	65	132	7	3層上部~中部 (北東-南西ア7)	土師器 皿	(8.0)	0.9		1/2	部	部	外: 23984 灰褐色~23984 灰褐色 内: 23984 灰褐色	
—	65	133	7	3層 (東北トレンチ)	土師器 皿	(7.1)	1.6		1/3	部	部	外: 23972 灰褐色 内: 23972 灰褐色	
—	65	134	7	3層中部~下部	土師器 皿	(6.6)	1.2		1/3	部	部	外: 23973 薄褐色 内: 23973 薄褐色	
39	65	135	7	3層(南東)	土師器 皿	(8.6)	1.5		1/3	部	部	外: 23973 薄褐色 内: 23973 薄褐色	外底と上部の間に粘土の層が埋り残る
39	65	136	7	3層中部~下部	土師器 皿	(8.0)	1.3		1/2	部	部	外: 100%1 灰褐色~100%1 灰褐色 内: 23982 灰褐色~23982 灰褐色	
—	65	137	7	3層中部	瓦葺土器 笠	(16.3)	(2.7)		1/10 以下	部	埋 込 中 不 埋	外: 灰褐色 内: 100%1 灰褐色	
39	65	138	7	3層 (東北トレンチ横 溝)	磁器(青磁) 皿		(3.2)		1/10 部	部	埋 込 中 不 埋	外: 2071 粉褐色 内: 2071 粉褐色	埋存品磁器片文様とみられる
—	65	139	8	3層 (第3~4層間)	土師器 鉢	(13.1)	(2.3)		1/7	部	部	外: 100%1 灰褐色 内: 23972 灰褐色	
39	65	140	8	3層 (第1~2層間)	磁器(青磁) 皿	(13.3)	(2.7)		1/5	部	部	外: 23061 オリーブ染色 内: 23061 オリーブ染色	埋存品磁器片文様
39	65	141	8	3層 (第4~5層間)	磁器(青磁) 皿	(1.9)	(3.5)		1/4	部	部	外: 黒褐色250℃1層オーブ染色 黒地 100%1 内: 23051 オリーブ染色	内底に黒褐色の埋り残りがみられる
38	65	142	13	3層中部 (東北トレンチ)	瓦葺 鉢	(10.7)	(2.6)		1/6	部	埋 込 中 不 埋	外: 23971 灰褐色 内: 23971 灰褐色	
—	65	143	13	3層上部~中部 (東北トレンチ)	土師器 鉢	(9.4)	(3.8)		1/6	部	埋 込 中 不 埋	外: 23972 灰褐色 内: 23972 灰褐色	
39	65	144	13	高層段ざね埋込部	陶器 皿	(11.6)	2.2	(3.2)	1/4	部	部	外: 埋込品 内: 埋込品	内底面に埋込品有り
42	69	170	9	須土層 (埋込部)	陶器 鉢	(2.6)	(4.2)		1/3	部	部	外: 埋込品 内: 埋込品	埋込品と須土層
41	69	171	9	2層	磁器(白磁) 皿	(2.0)	(5.3)		1/2	部	部	外: 23971 灰褐色 内: 23972 灰褐色	埋り込し埋り
40	69	172	9	2層+3層 ミニチュア瓦 葺	陶器	(3.7)	3.4		1/2	部	部	外: 100%4 灰褐色~23973 黄褐色 内: 100%4 灰褐色	埋込品有り
40	69	173	9	3層 (東北トレンチ)	磁器(赤付) ミニチュア瓦 葺	(3.9)	4.1		1/2	部	部	外: 埋込品 100%1 灰褐色 黒地 23961 黄褐色 内: 埋込品 100%1 灰褐色	埋込品有り
42	69	174	9	2層+3層 (東北トレンチ)	磁器(赤付) 皿	(10.5)	(4.5)	3.8	1/3	部	部	外: 23061 粉褐色 染付 50%1 黄褐色 内: 23061 粉褐色	埋込品有り

品名 品番	探出 番号	調査 区	出土位置	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	残存率	胎土	焼成	色調	備考
40	69	175	9	3層	陶器(灰濁 土)	(9.7)		1/10 径3mm以下の長形、径4mm以下 の短形、径2mm以下の円筒状 の器片	中澄 黄	黄	胎土: 1076/2 赤褐色 内: 1076/2 オリーブ褐色 外: 1076/3 赤褐色	灰濁土
40	69	176	9	3層	灰濁土器 片(口縁)	(27.8)	(6.0)	1/20 径2mm以下の長形、右側を欠く	1/10 黄	黄	胎土: 1070/2 赤褐色 内: 1070/3 赤褐色 外: 1070/1 赤褐色	灰濁土を欠く
40	69	177	9	3層	赤土器 片(口縁)	(3.9)	4.2	7 径3mm以下の長形、右側を欠く	赤	黄	胎土: 1076/3 赤褐色 内: 1076/2 赤褐色 外: 1076/1 赤褐色	灰濁土を欠く
-	69	178	9	3層	灰濁土器 片(口縁)	(10.1)	(3.7)	1/5 径1.5mm以下の長形を欠く	黄	黄	胎土: 1076/1 赤褐色 内: 1076/1 赤褐色	
41	69	179	10	3層上部 (Y=42.80 アボ 第1～2区画)	磁器(青黒 石) 片	(11.0)	(5.9)	1/4 径	黄	黄	胎土: 12007/1 青石リズ灰色 内: 12007/1 青石リズ灰色	
42	69	180	10	3層上部 (X=123.045 トレ ンチ)	陶器 片	(11.6)	3.3	(4.0)	1/4 径	黄	胎土: 1076/2 赤褐色 内: 1076/2 赤褐色 外: 1076/1 赤褐色	赤土を欠く
42	69	181	10	3層上部 (X=123.045 トレ ンチ)	陶器 片	(11.6)	(3.9)	1.6 径	黄	黄	胎土: 1076/4 オリーブ褐色 内: 1076/4 オリーブ褐色	黒土を欠く
41	69	182	10	3層 (焼成不明)	磁器(青黒 石) 片	(3.2)	4.6	7 径3mm以下の長形を少し欠く	黄	黄	胎土: 1076/2 オリーブ褐色 内: 1076/2 オリーブ褐色 外: 1076/2 オリーブ褐色	15分の形、取り出し良好、赤土を欠く
-	69	183	10	3層下部 (X=123.045 ライン アボなし)	土器 片	(10.5)	1.6	1/5 径	黄	黄	胎土: 1256/2 赤褐色 内: 1076/3 赤褐色	
40	69	184	10	3層下部 (X=123.045 ライン アボなし)	瓦器 片	(14.6)	(3.4)	1/5 径	中不 黄	黄	胎土: 1256/2 赤褐色 内: 1076/3 赤褐色	
42	69	185	10	3層 (焼成不明)	磁器(赤付 土) 片	(11.6)	3.0	(7.4)	1/3 径	黄	胎土: 12008/1 赤褐色 内: 12008/1 赤褐色 外: 12008/1 赤褐色	3層上部に赤土あり、口縁部と底込みの 部には赤土層が認められる。 胎土は磁器の胎土と類似す
40	69	186	10	2層・3層 (焼成不明)	陶器 片	(32.0)	(3.7)	1/10 径	黄	黄	胎土: 12394/3 赤褐色 内: 12394/3 赤褐色	磁器片
40	69	187	10	3層上部 (第1～2区画)	灰濁土器 片	(28.0)	(3.2)	1/10 径	黄	黄	胎土: 1060/2 赤褐色 内: 1060/2 赤褐色	灰濁土を欠く
-	69	188	10	3層上部 (第1～2区画)	灰濁土器 片	(24.8)	(4.4)	1/10 径	黄	黄	胎土: 1045/2 赤褐色 内: 1045/1 赤褐色	灰濁土を欠く
41	69	189	10	3層下部 (第3～4区画)	磁器(白磁 土) 片	(14.6)	(4.1)	1/10 径	黄	黄	胎土: 1076/1 赤褐色 内: 1076/1 赤褐色 外: 1076/1 赤褐色	
41	69	190	10	3層中部 (第2～3区画)	緑釉陶器 片	(2.0)	(6.0)	1/10 径	黄	黄	胎土: 1090/1 赤褐色 内: 1090/1 赤褐色	緑釉付
40	69	191	11	3層	赤土器土器 片	(14.2)	(3.3)	1/5 径	赤	黄	胎土: 1076/2 赤褐色 内: 1076/2 赤褐色 外: 1076/2 赤褐色	
-	69	192	11	3層 (Y=42.58 ライン側面)	赤土器土器 片	(1.3)	(8.4)	1/2 径	赤	黄	胎土: 1076/4 赤褐色 内: 1076/4 赤褐色	
40	69	192	11	3層	瓦器 片	(14.2)	3.4	(4.0)	1/3 径	黄	胎土: 1045/2 赤褐色 内: 1045/2 赤褐色 外: 1045/2 赤褐色	
41	69	193	11	焼成不明 (1～2層)	磁器(青黒 石) 片	(1.6)		7 径	中不 黄	黄	胎土: 1076/2 オリーブ褐色 内: 1076/2 オリーブ褐色 外: 1076/2 オリーブ褐色	灰濁土 取り出し良好
41	69	194	11	3層	磁器(青黒 石) 片	(2.8)	(6.8)	黄 1/3 径	黄	黄	胎土: 1076/2 オリーブ褐色 内: 1076/2 オリーブ褐色 外: 1076/2 オリーブ褐色	灰濁土 花文 取り出し良好
41	69	195	11	3層	磁器(青黒 石) 片	(3.4)	(5.2)	1/4 径	中不 黄	黄	胎土: 1076/2 オリーブ褐色 内: 1076/2 オリーブ褐色 外: 1076/2 オリーブ褐色	灰濁土 取り出し良好
40	69	196	11	3層	陶器 片	5.4	3.2	2.2 径	黄	黄	胎土: 1076/1 赤褐色 内: 1076/1 赤褐色 外: 1076/1 赤褐色	
40	69	197	11	3層	土器 片	7.8	2.1	径 存在	黄	黄	胎土: 1255/3 赤褐色 内: 1255/3 赤褐色 外: 1255/3 赤褐色	
41	69	198	12	2層 (焼成不明)	磁器(青黒 石) 片	(4.3)	(6.3)	1/10以 下 径	黄	黄	胎土: 1076/1 赤褐色 内: 1076/1 赤褐色 外: 1076/1 赤褐色	灰濁土を欠く
40	69	199	11	3層	赤土器 片	(16.3)	(6.1)	1/3 径	黄	黄	胎土: 1076/3 赤褐色 内: 1076/3 赤褐色 外: 1076/3 赤褐色	
-	69	200	12	3層 (焼成不明)	陶器 片	(8.6)		1/4 径	黄	黄	胎土: 1255/3 赤褐色 内: 1255/3 赤褐色 外: 1255/3 赤褐色	

表3 石器観察表

品名 品番	探出 番号	調査 区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考	
43	58	31	1	第3層 41土坑	石錐	2.4	1.6	0.4	1.1	チャート	縄文時代
44	58	32	2	2層(第1～2区画 上層+トレンチ部分)	石錐未製品	3.8	2.7	0.6	5.3	ザマカイト	
45	67	164	4	第2区(3層上部)	石錐	4.8	2.0	0.8	5.0	ザマカイト	弥生時代の同一層
43	67	165	4	2層(第1～2区画)	石錐	(2.8)	1.8	0.3	0.6	ザマカイト	縄文時代早期
44	67	166	3	3層上部(第1～2区画)	石錐	3.9	3.8	0.8	3.9	ザマカイト	

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
44	67	167	4	2層(マンガン含む、中央部1層目) 縄文53-1区3層	割片	4.0	5.4	1.4	34.5	サツカイト	
44	67	168	4	2層(マンガン含む、中央部1層目) 縄文53-1区3層	石核	13.1	10.3	2.6	321.8	サツカイト	
45	68	169	4	2層(マンガン含む、中央部1層目) 縄文53-1区3層	磨石	10.2	8.6	6.1	749.7		
45	71	210	9	3層(露上)	有舌尖頭鏃	7.7	3.7	1.3	27.2	サツカイト	縄文時代早期
45	71	211	9	3層	叩き石?	4.9	3.6	3.1	85.1		

表4 石製品観察表

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
45	57	30	1	埋蔵層別 2層(露上)	砥石	16.1	3.8	2.3	80.9	砂岩	
45	71	211	9	3層	砥石(仕上げ部)	16.0	3.5	1.1	35.7	砂岩	
45	71	212	9	3層	砥石(仕上げ部)	18.7	3.6	1.0	50.1	砂岩	

表5 木製品観察表

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
42	66	161	6	2層 or 3層(機軸部別) 3層上部(第1～2層間)	機物底板	16.0	7.4	0.7		外面に黒漆を塗布
—	70	207	9	2層	内部材	18.8	2.0	1.6		紐や釘有り
42	70	208	11	3層	内部板	8.4	3.6	1.6		内部状
42	70	209	11	3層(上部)	機物底板	6.4	6.3	0.7		紐取り 黒漆を塗布か?

表6 銭貨観察表

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	直径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	発行年	備考
46	57	28	2	2層(第1～2層間)	北宋銭(元豊通寶)	2.4	0.7	1.5	3.7	発行	1078年前後
46	57	29	1	機軸部別(1層)	一銭背銅貨	2.2	—	1.0	3.5	発行	
46	66	145	4	第1～2層間(3層)	明銭(洪武通寶)	2.3	0.7	1.0	3.1	発行	1368年前後
46	66	146	4	第1～2層間(3層)	北宋銭(聖宗通寶)	2.4	0.75	1.0	2.2	3/4	1038年前後
46	66	147	4	3層上部(第1～2層間)	北宋銭(元豊通寶)	2.4	0.7	1.0	2.9	発行	1078年前後
46	66	148	4	3層上部(第1～2層間)	北宋銭(治平元寶)	2.3	0.7	1.5	2.7	発行	1064年前後
46	66	149	4	第2層(3層上部)	北宋銭(聖宗通寶)	2.4	0.7	1.5	1.9	発行	1038年前後
46	66	150	4	3層(第1～2層間)	北宋銭(元豊通寶)	2.3	0.7	1.5	2.4	発行	1078年前後
46	66	151	5	2層	南宋銭(紹定通寶)	2.3	0.7	1.5	2.0	発行	1228年前後
46	66	152	5	3層(第2～3層間)	北宋銭(元豊通寶)	2.3	0.7	1.5	3.5	発行	1078年前後
46	66	153	6	第1層、601萬	北宋銭(聖宗元寶)	2.4	0.7	1.0	2.8	発行	1066年前後
46	66	154	6	機土層(機軸部別)	北宋銭(聖宗元寶)	2.2	0.7	1.5	1.8	発行	1066年前後
46	66	155	6	3層上部(第1～2層間)	北宋銭(太平通寶)	2.4	0.6	1.5	2.5	発行	976年前後
46	66	156	6	3層上部(第1～2層間)	明銭(永楽通寶)	2.4	0.6	1.5	3.2	発行	1408年前後
46	66	157	7	3層中部	北宋銭(道徳通寶)	2.5	0.75	1.0	3.5	発行	1056年前後
46	66	158	8	第2層	北宋銭(聖宗通寶)	2.4	0.7	1.0	2.1	発行	1038年前後
46	66	159	13	3層(第2～3層間)	〇〇〇貨	2.4	0.7	1.0	2.4	発行	
46	66	160	8	西暦 8世紀、2層	一銭銅貨	2.7	—	1.5	6.1	発行	
46	70	201	9	2層	北宋銭(聖宗元寶)	2.2	0.6	1.0	2.2	発行	1066年前後
46	70	202	9	2層	寛永通寶	2.5	0.6	1.0	3.2	発行	1636年前後
46	70	203	9	第1層上部	寛永通寶	2.4	0.6	1.5	3.8	発行	1636年前後
46	70	204	9	3層	南宋銭(隆興通寶)	2.4	0.7	1.0	2.3	発行	1160年前後
46	70	205	9	3層	北宋銭(紹興元寶)	2.3	0.7	1.0	1.5	発行	1084年前後
46	70	206	11	(X = -121.844 Y = -42.5055 Z = 218.64)	北宋銭(元豊通寶)	2.3	0.7	1.5	3.3	発行	1078年前後

表7 金属製品観察表

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
—	66	162	7	3層上部～中部	銅造不明品	12.5	2.8	0.4	鉄製

表8 土製品観察表

図例番号	採出番号	遺物番号	調査区	出土位置	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	発行年	備考
—	66	163	7	2層	土塊	4.1	1.4	1.6	7.2	発行	

# 写 真 图 版





1. 1区第3面全景（西から）



2. 1区第3面全景（南西から）

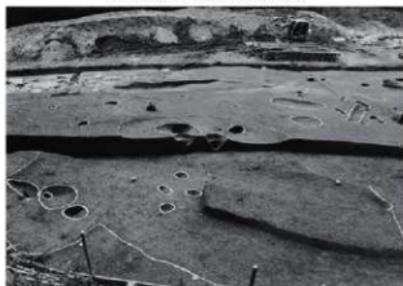
写真図版2 1区



1. 1区第3面近景（北東から）



2. 1区第3面近景（西から）



3. 1区第3面近景（東から）



4. 4土坑・5土坑（北から）



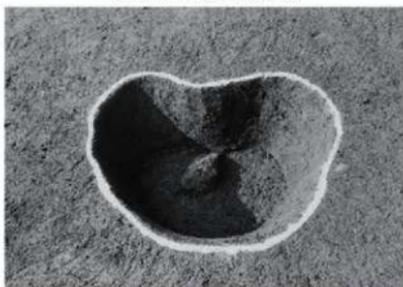
5. 第2面下段近景（北から）



6. 第2面上段近景（北から）



7. 53土坑断面（西から）



8. 71ピット完備状況（北から）



1. 2区第2面全景 (南西から)



2. 2区第2面全景 (南から)

写真図版4 2区



1. 2区第3面全景（南西から）



2. 2区第3面全景（南から）



1. 2区第4面全景（南西から）



2. 2区第4面全景（北東から）

写真図版6 2区



1. 2区第5面全景（南西から）



2. 2区第5面全景（北東から）



1. 2区第3面 215 土坑検出状況 (西から)



2. 2区第3面 229 石列検出状況 (南西から)



1. 3区第1面全景（東から）



2. 3区第1面全景（南東から）



1. 4区第1面全景（西から）



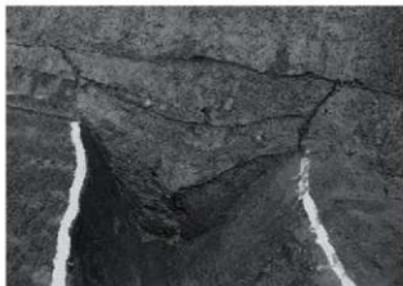
2. 4区西部近景（西から）



1. 4区中央部近景（南西から）



2. 4区東部全景（東から）



1. 4区409溝断面(南東から)



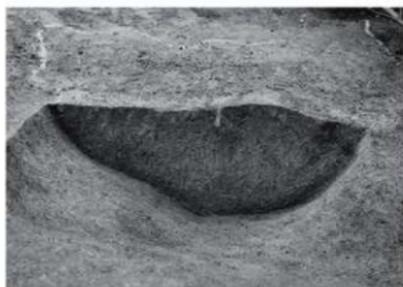
2. 4区410溝断面(北から)



3. 4区411土坑断面(南西から)



4. 4区413土坑断面(南から)



5. 4区416土坑断面(北東から)



6. 4区417土坑断面(西から)



7. 4区450ピット断面(東から)



8. 4区440土坑・441土坑断面(南から)



1. 5区第2面全景 (西から)



2. 5区西半足跡検出状況 (南から)



1. 5区第3面全景（西から）



2. 5区第3面全景（東から）



1. 6区第1面全景（南西から）



2. 6区第1面全景（北東から）



1. 6区第1面601溝(東から)



2. 6区第1面601溝断面(南西から)



1. 6区第3面全景（南西から）



2. 6区第3面全景（北東から）



1. 6区第3面 603 杭列検出状況 (南東から)



2. 6区第3面 602 杭列検出状況 (南東から)



1. 7区第1面全景（南西から）



2. 7区第1面全景（南から）



1. 7区第3面全景（北西から）



2. 7区第3面全景（北から）



1. 8区第4面全景（北から）



2. 8区第4面全景（北西から）



1. 9区第1面全景 (西から)



2. 9区第1面全景 (北から)



1. 9区第2面全景（西から）



2. 9区第2面全景（北東から）



1. 10区第2面近景(南西から)



2. 10区第2面1001溝・石列検出状況(北東から)



1. 10区第3面近景(北東から)



2. 10区第3面1002石列検出状況(北から)



1. 10区第4面全景(北西から)



2. 10区第4面近景(南西から)



1. 11区第2面全景（西から）



2. 11区第2面全景（北西から）



1. 11区第2面全景（北東から）



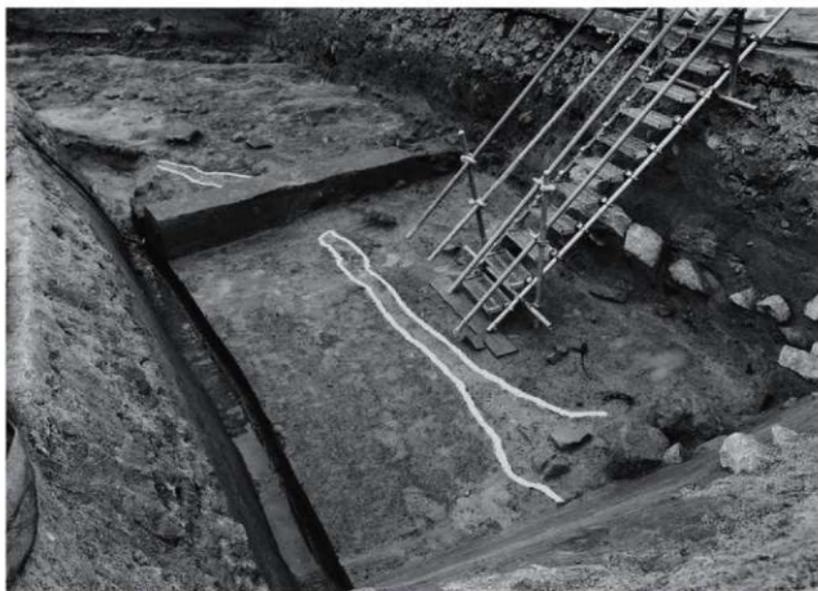
2. 11区第2面棚田検出状況（南東から）



1. 12区第3面全景 (北西から)



2. 12区第3面全景 (南東から)



1. 13区第2面全景（北西から）



2. 13区第3面全景（南東から）

写真図版 30 2区遺構出土縄文土器(1)



1～3. 2区 215 土坑出土深鉢



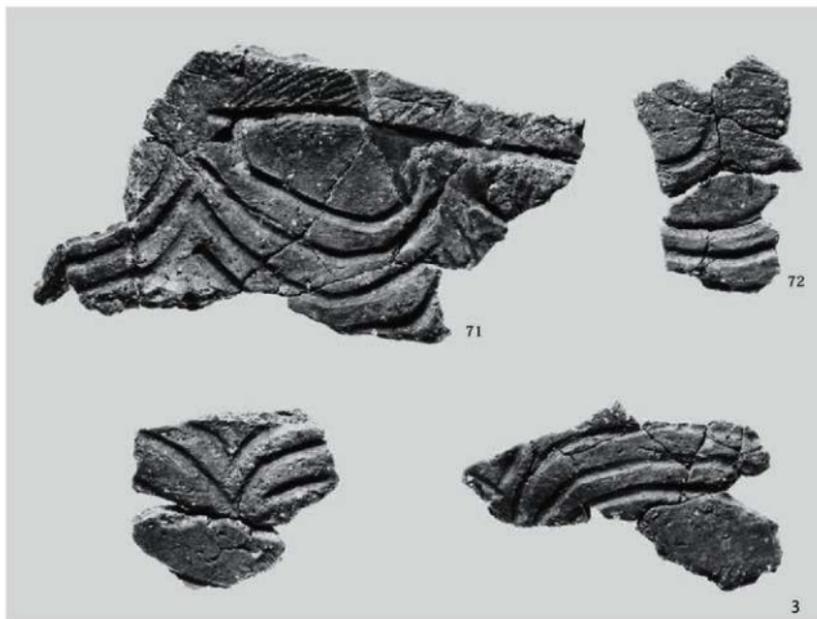
写真図版 32 2区遺構出土縄文土器 (3)



1

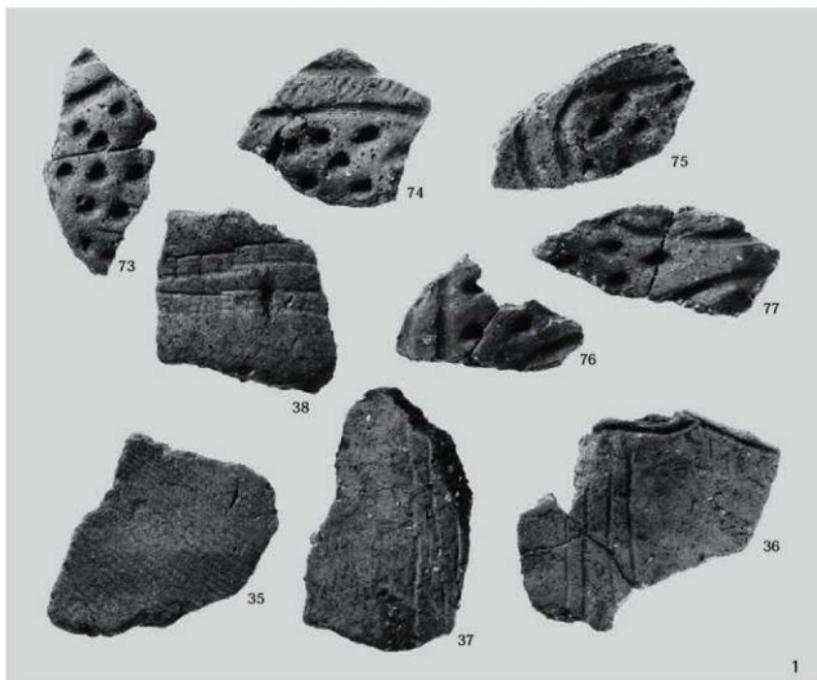


2

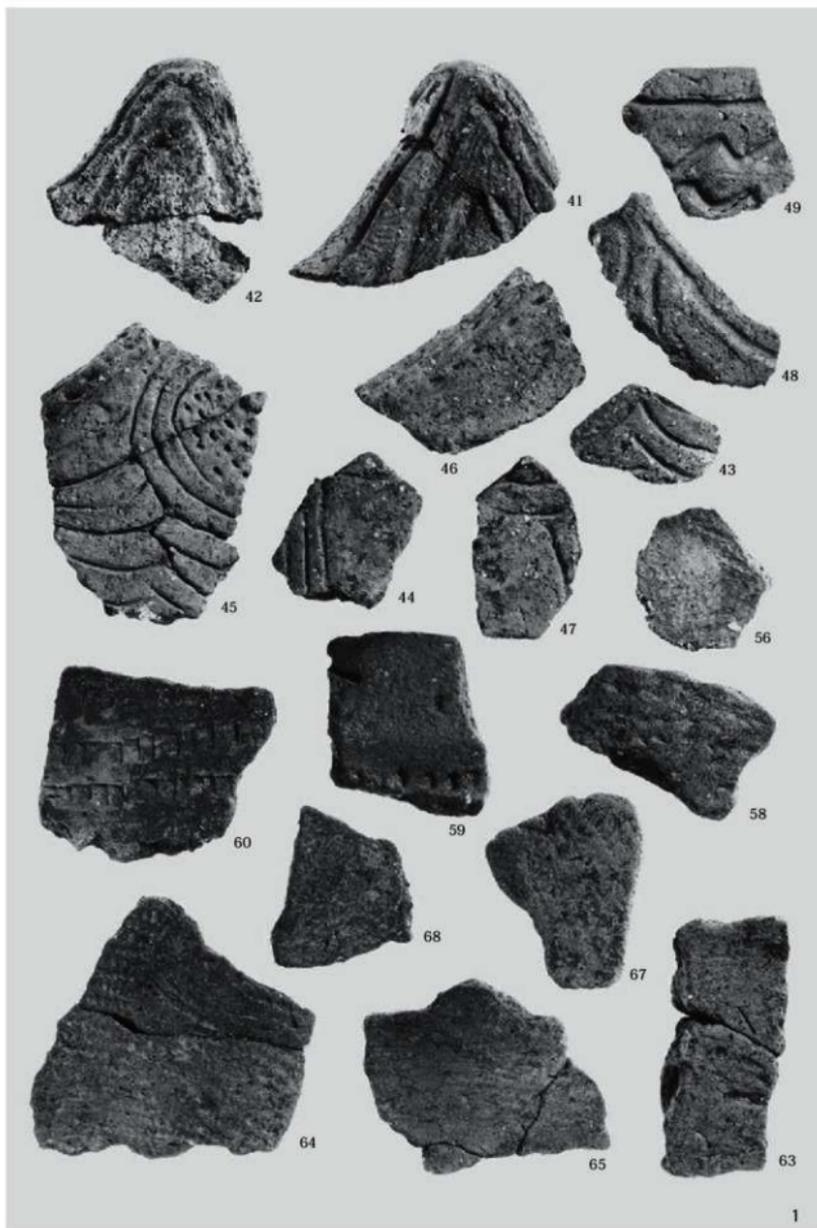


3

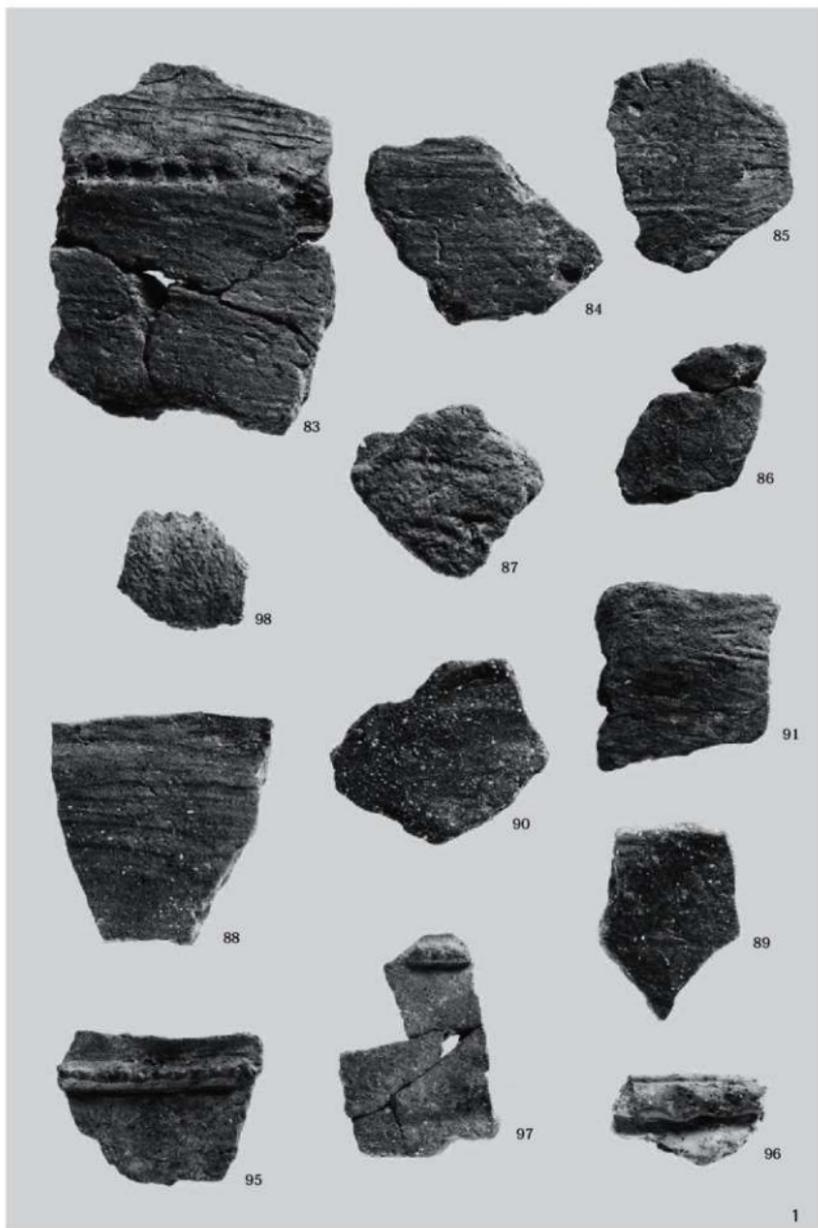
1～3. 2区 215 土坑出土深鉢



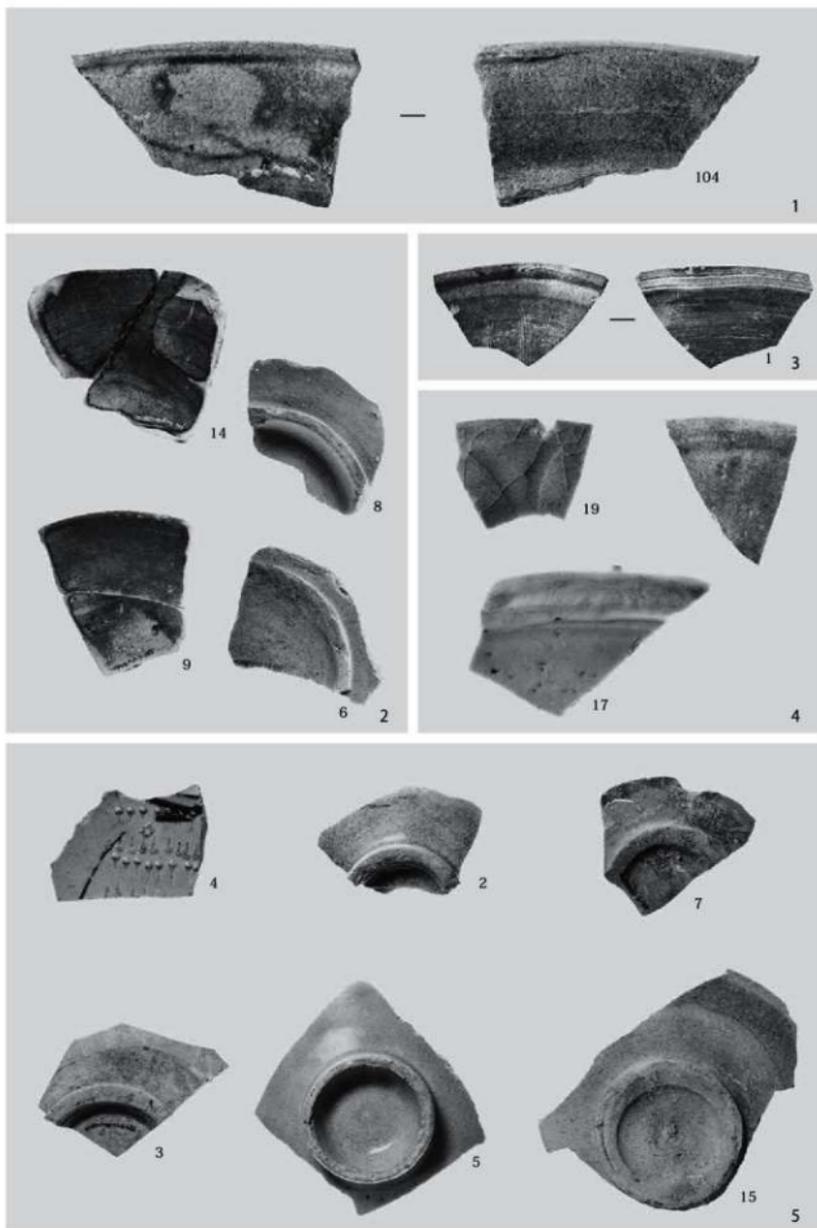
1. 2区215土坑出土縄文土器、1区71ピット出土縄文土器、53土坑出土縄文土器  
 2. 1区包含層出土縄文土器 3. 2区包含層出土縄文土器 4・5. 4区包含層出土縄文土器



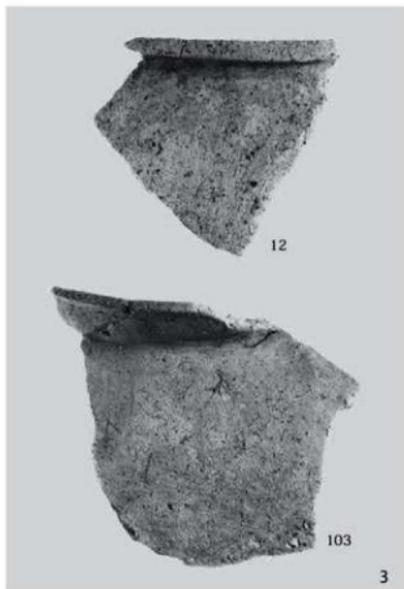
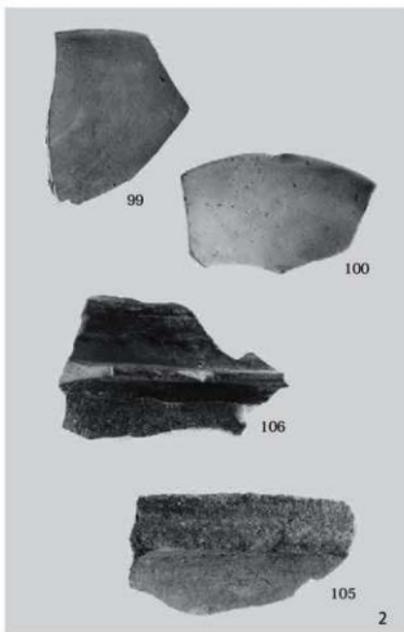
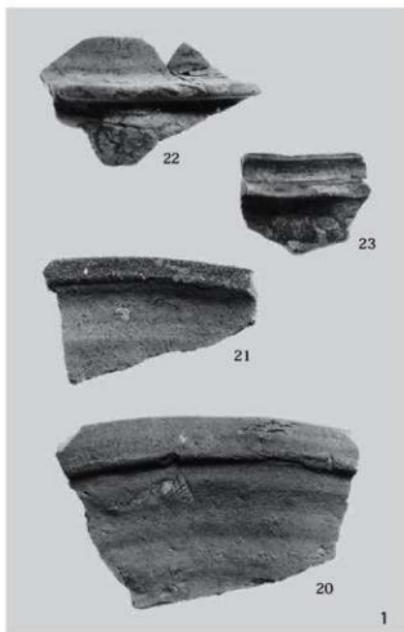
1. 1区包含層出土縄文土器



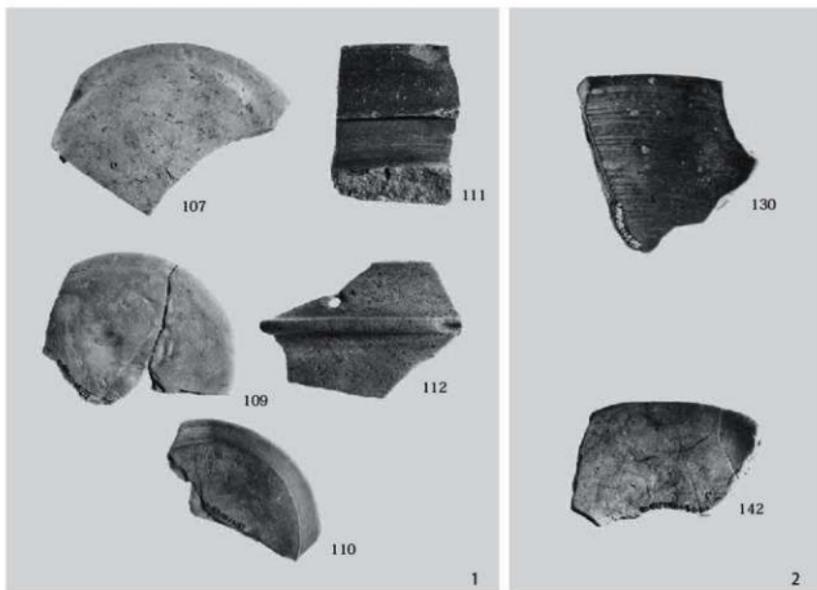
1. 2区包含層出土縄文土器、4区包含層出土縄文土器



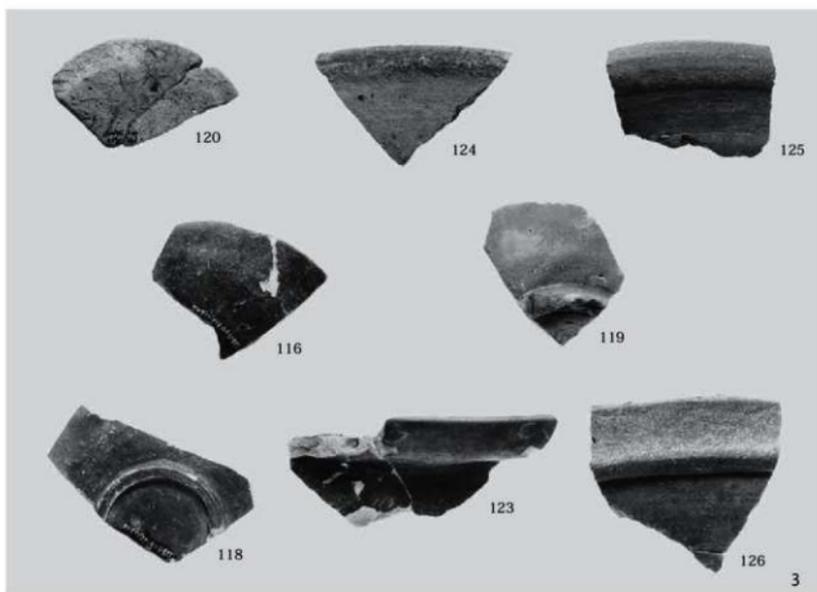
1. 3区出土土器 2. 2区出土土器 3. 1区出土土器 4. 2区出土土器 5. 2区出土土器



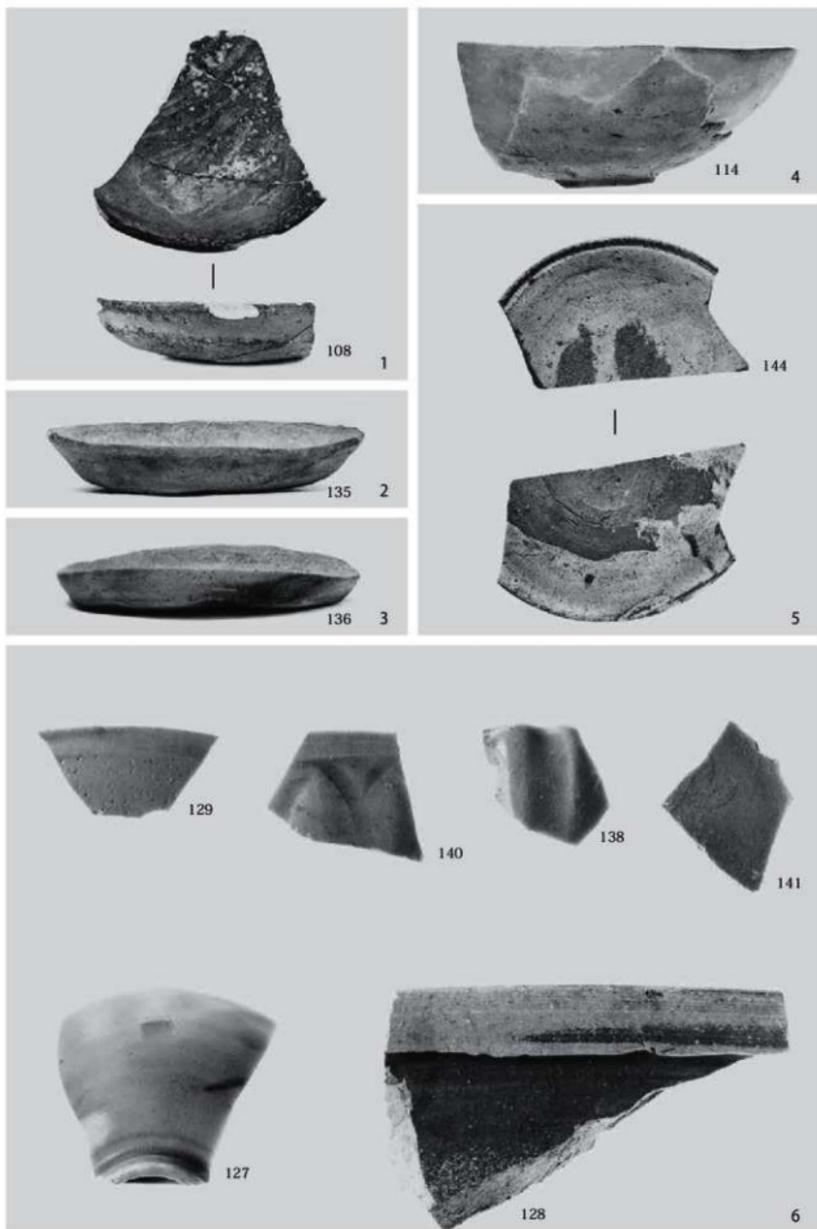
1. 2区出土土器 2. 4区出土土器 3. 2区出土土器、4区出土土器 4. 2区出土土器 5. 1区出土土器



1. 5区出土土器 2. 7区出土土器、13区出土土器

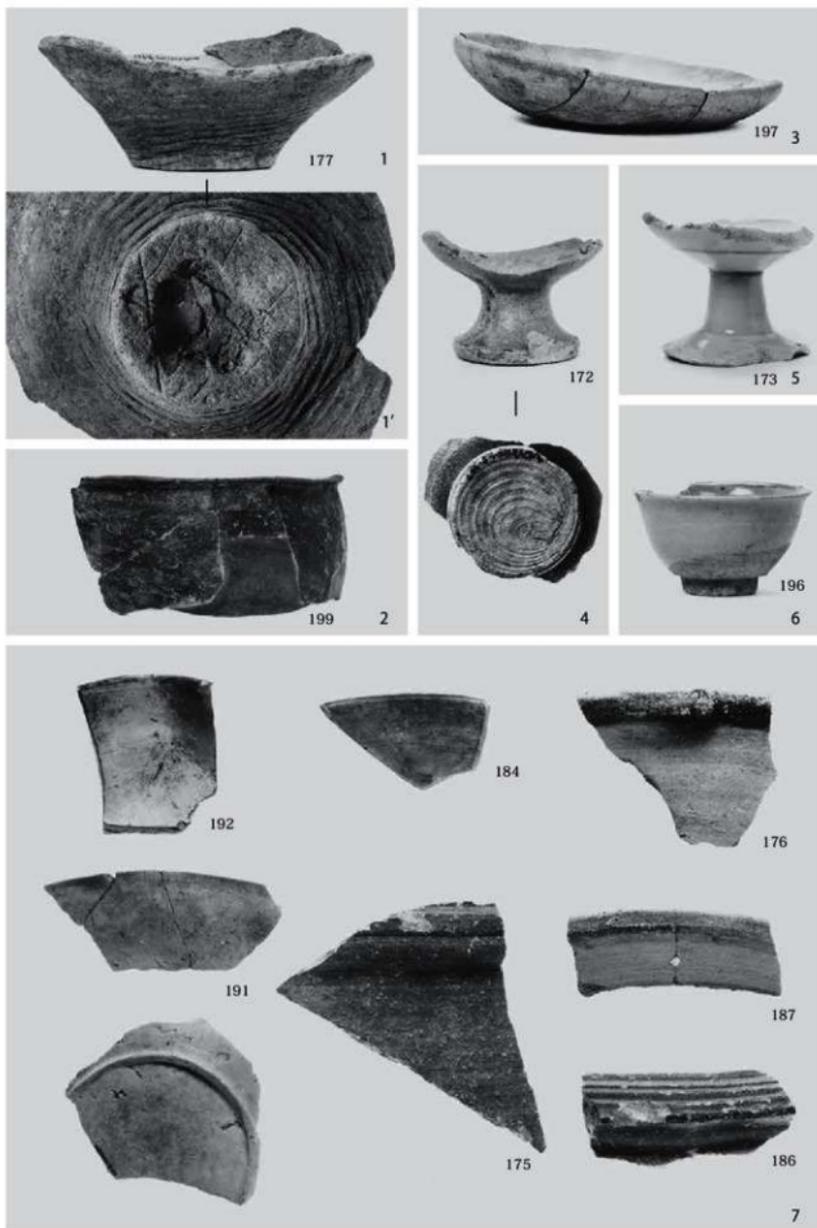


3. 6区出土土器

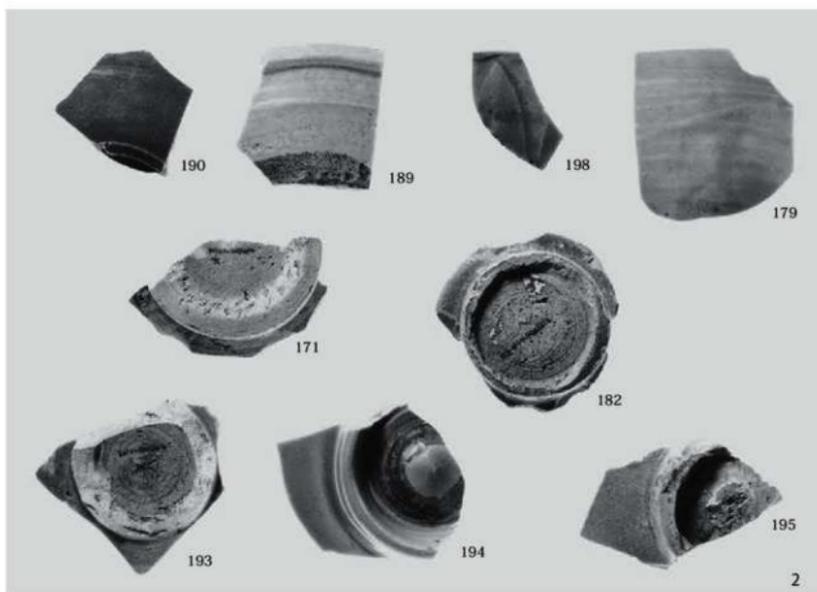
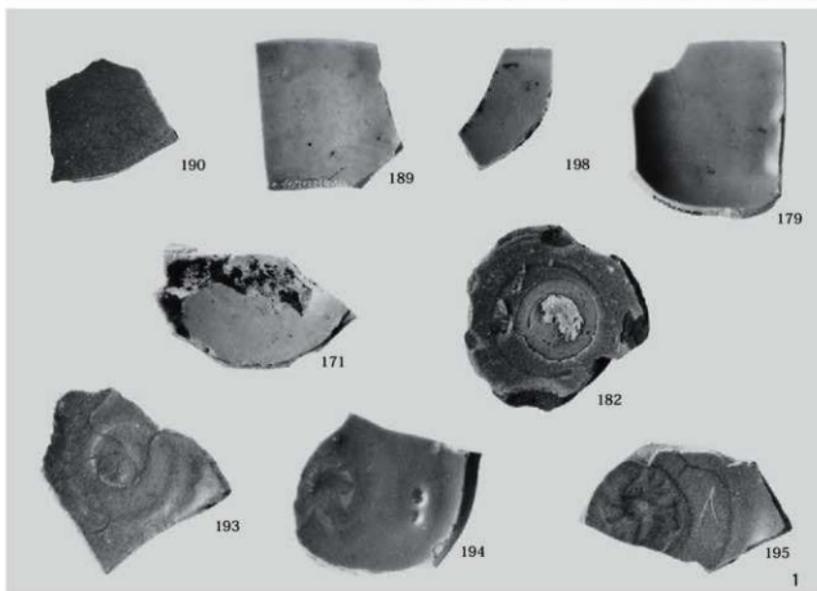


1. 5区出土土器 2·3. 7区出土土器 4. 6区出土土器 5. 13区出土土器 6. 7区出土土器、8区出土土器

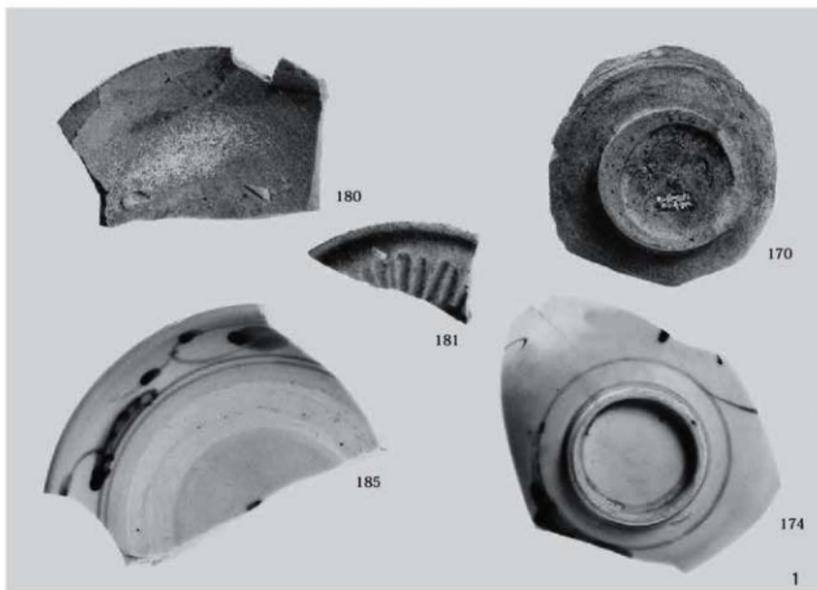
写真図版 40 9～12区出土土器(1)



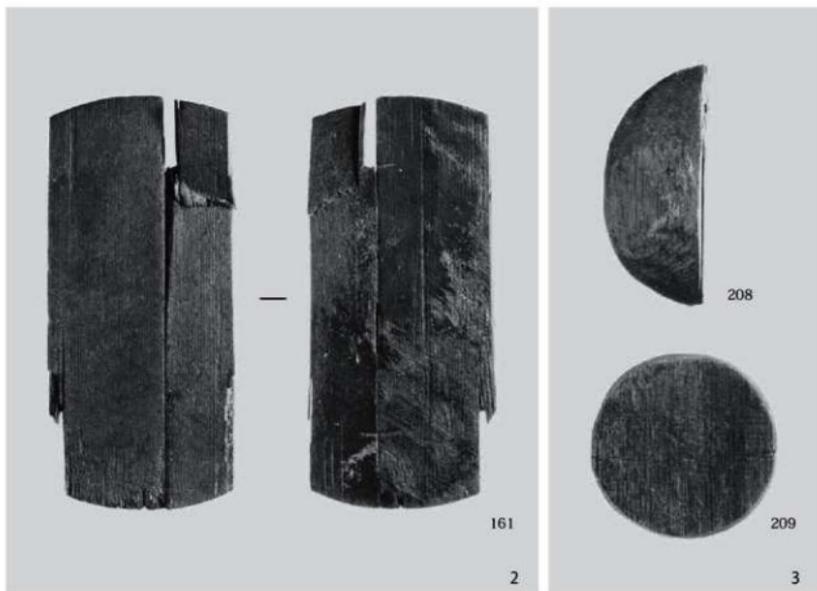
1. 9区出土土器 2. 11区出土土器 3. 11区出土土器 4. 9区出土土器 5. 9区出土土器 6. 11区出土土器  
7. 9～11区出土土器



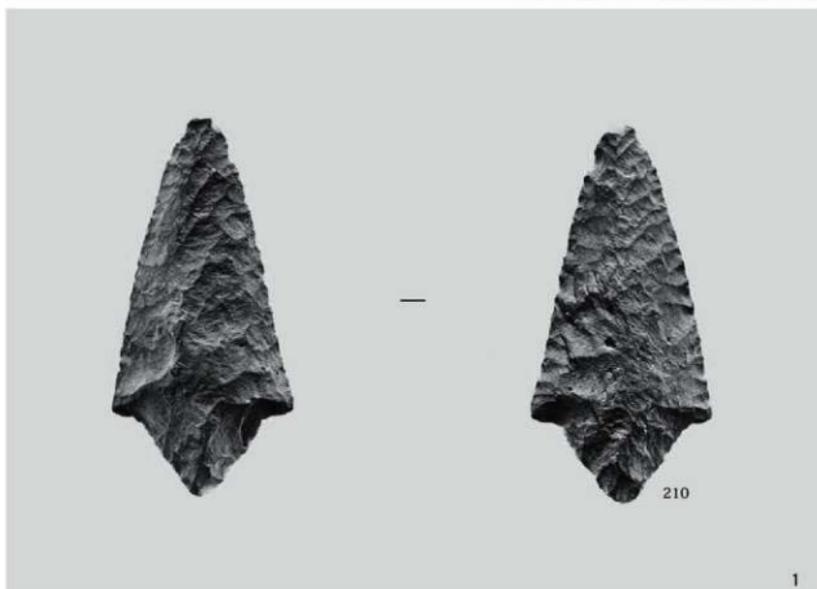
写真図版 42 9～12区出土土器(3)・木製品



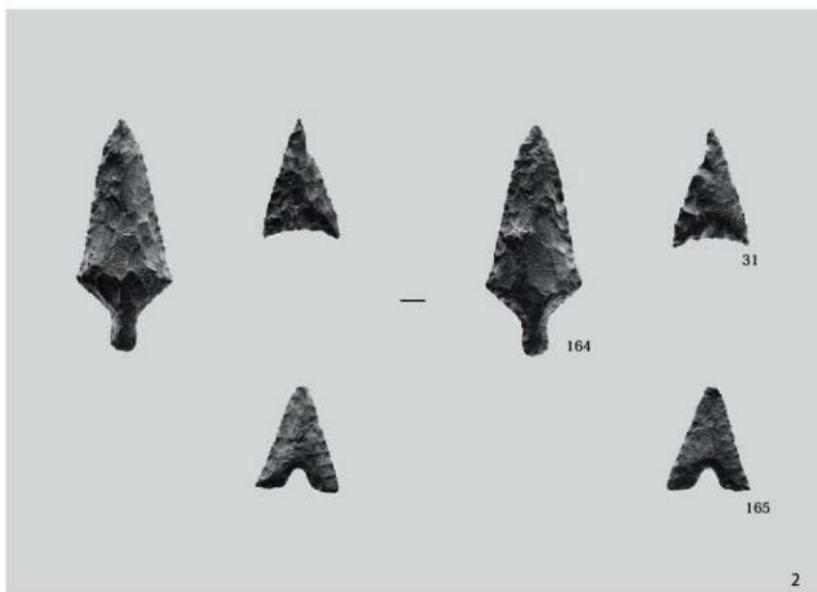
1. 9～11区出土土器



2. 6区出土曲物底板 3. 11区出土曲物底板

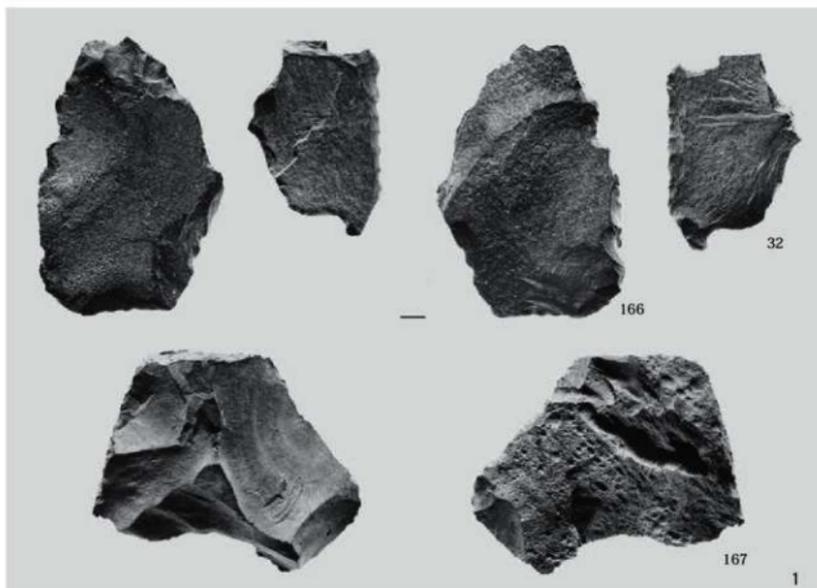


1. 9区出土有舌尖頭器

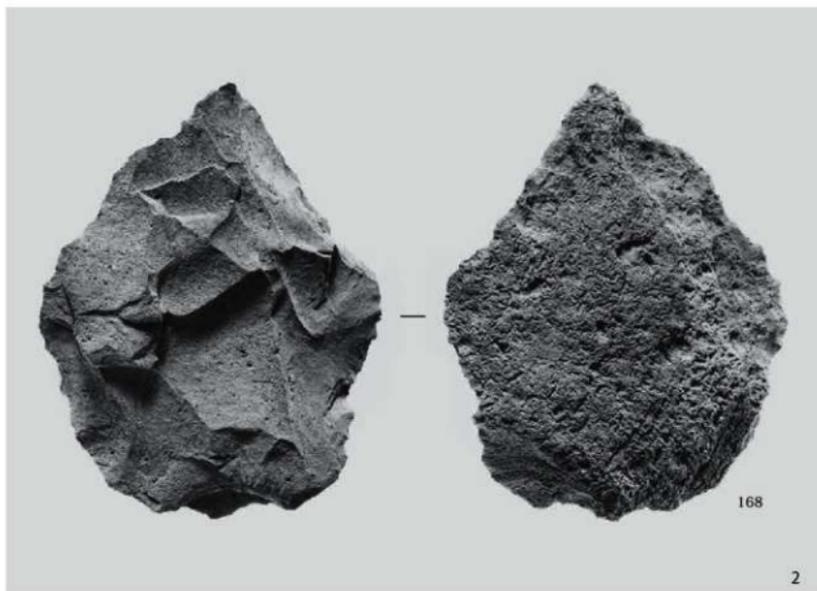


2. 4区出土石鏃、1区出土石鏃

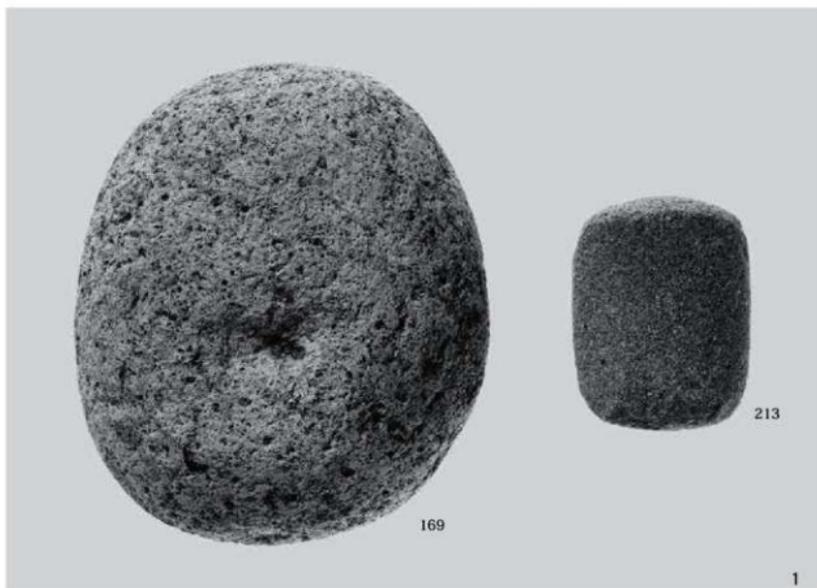
写真図版 44 打製石器 (2)



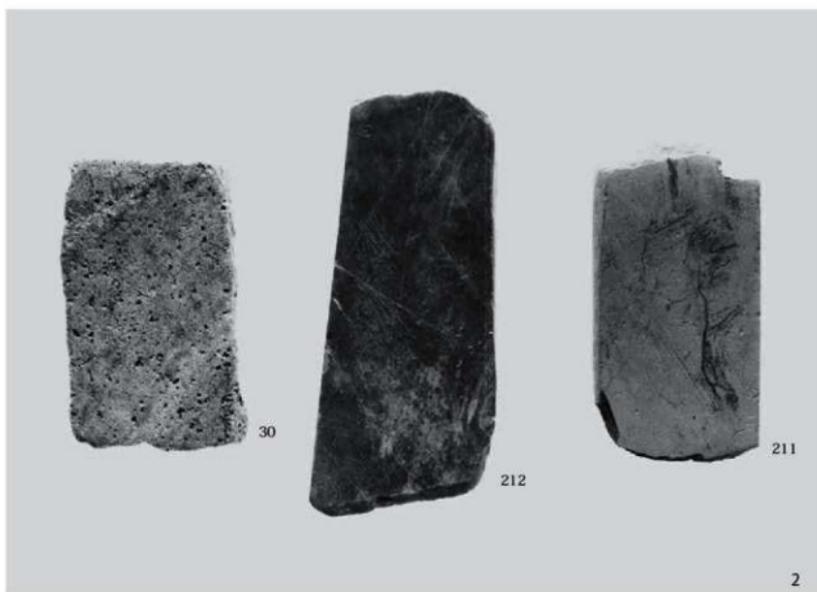
1. 2区出土未製品、13区出土剥片、4区出土剥片



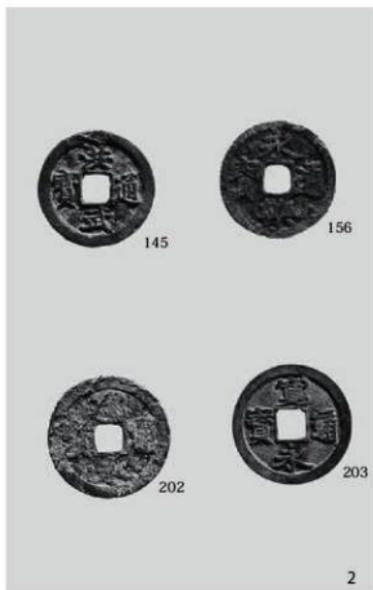
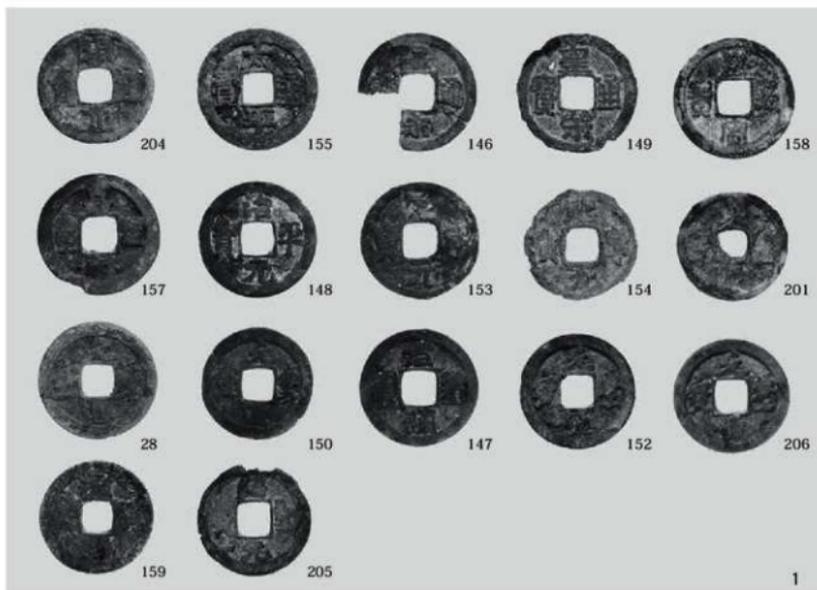
2. 4区出土石核



1. 4区出土磨石、9区出土卵石



2. 1区出土砥石、9区出土砥石



1. 唐銭 - 開元通寶、宋銭 - 太平通寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、〇〇通寶、紹聖元寶  
 2. 明銭 - 洪武通寶、永樂通寶、寛永通寶 3. 宋銭 - 紹定通寶 4. 一銭青銅貨、一銭銅貨

# 報告書抄録

ふりがな	せんだいにのみあいせき						
書名	千提寺南遺跡						
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第245集						
編著者名	川瀬 貴子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 Tel. 072-299-8791						
発行年月日	2014年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号			(㎡)	
せんだいにのみあいせき 千提寺南遺跡	おおさかふいばらきし 大阪府茨木市 せんだいにのみあいせき 千提寺 地内	27211	9488	北緯 42度39分50秒 東経 123度84分50秒	(11-1-1～12調査) 20120116～ 20130308  (11-1-13調査) 20130520～ 20130606	13400㎡  1066㎡	高速自動車国道 近畿自動車道 名古屋神戸線 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
千提寺南遺跡	生産 集落	縄文	土坑	縄文土器・石器			
		中世	水田・溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・陶器・ 輸入陶磁器・銭貨・石器・石 製品			
要 約	東部では縄文時代の土坑・ピット・溝などを多数検出した。なかでも、一つの土坑からは縄文時代中期末の土器が一括資料として得られた。遺跡全域にわたっては、古代末～中世の水田、棚田やそれに関連する溝、石列、杭列などを検出し、耕作地として連絡と利用されてきた事が判明した。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第245集

## 千 提 寺 南 遺 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2014年3月20日発行

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地